

---

# ある脇役の話。

わわわわ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある脇役の話。

### 【Nコード】

N5301P

### 【作者名】

わわわわ

### 【あらすじ】

オリ主、ケイ・マッケンジーは麻帆良学園の魔法生徒であった。それも桜咲刹那のような剣術を修めたわけでもなく、龍宮真名のように有名な暗殺者でもなく、もちろん高畑・T・タカミチのように紅き翼にも参加し立派な魔法使いに近い存在でもなかった。少々変わり者であったものの、彼らに較べれば一般人に違いない彼の極々平凡な日々をヒロインに那波千鶴を迎えお送りします。という内容のつもりです。ご都合主義、独自解釈、アンチ、チートなどの要素を含むかもしれません。

## 第一話 エヴァ前編？

ケイ・マツケンジーは、上機嫌だった。

前回のデートでは映画が前評判に比べ遙かに劣るものであったため、少々不満の残るものであり、彼女も機嫌を損ねていたようだった。もともと年の割に落ち着いた彼女のちょっとした機嫌の変化までも見抜けるのは自分ぐらいであるとケイは自負していたが。

それに較べ、本日のデートは大成功といえる。少々遠かったが、舞浜まで足を延ばし多額の資金を投入した甲斐あったというものだ。終始機嫌よく、お互い楽しめた。そのお陰で、中学生である彼女にとっては少々遅めの帰宅となり寮まで送ることとなった。それもまた彼女とともにいれる時間を増やしてくれることであると、自分の高校の寮から距離のある場所まで来ること苦にならなかった。

彼女、那波千鶴と出会い、付き合うようになり既に一年近い時を経過していた。プレゼントを始め今日のデートにしる普通の高校生には少々高い対価を払っているが、彼女とともにいる時間の喜びに較べれば大したものではなかった。それに自分は“アルバイト”をしているため資金は普通の高校生よりも潤沢だった。

桜通りに差し掛かったころ、足を止め、空を見上げれば雲ひとつない空にくっきりと満月が浮かんでいた。ケイは肌寒さを感じつつもいつになく美しく感じる満月に眼を奪われた。ケイが空に眼を向けているのに気付कि、千鶴も空を見上げれば冬であるためはつきりに見えるものの、天文部である彼女にとっては見慣れた空だった。あまり天文に興味を持たなかったケイがこれを機会に関心を持つてくれればいいのだけど、と内心考えさらに興味を引く話題を頭の中で考え出した。

数秒、いや十数秒、空を見上げていたケイは漸く千鶴の方に顔を向けた。中学生としては大人びた、しかし大人にはほど遠い幼さを秘

めた千鶴の顔を見つめ、ケイは笑顔を浮かべてしまう。

ふと、ケイの眼の端になにかが横切ったように見えた。それは実際に見えたのか、長年というほどではないものの幾度となく命の危機を迎えたことのあるケイに備わった勘が見せたものなのかもしれないが、どちらにせよ危険であると直感に告げられた。迷うことなく、千鶴を抱き寄せその反対方向へと飛んだ。魔法使いという少々一般人よりは危険で、特殊な世界に生きていたケイにとってその程度のことは朝飯前だった。

「キヤツ!!」

“お姫様だっこ”と俗に呼ばれる移動方法を取らされたことなのか、それとも突然のことだったためなのか、少々遅れ気味に千鶴の短めの悲鳴が響いた。短めであったのは千鶴なりに周囲に大きな声を漏らさないとの配慮だったのだが、結果的には無駄になった。千鶴が知ることはなかったが、周囲には既に防音結界が張られていたからだ。

「少々血を戴きたいのだが、避けられるとは思わなかった。魔力の糸で拘束しようとしたのだが……」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは、その歳と不釣り合いな表情、そして如何にも魔法使いと見られるようにと全身黒でマントをたなびかせ、木の上で立っていた。数年来戦場に身を置かず勘が鈍った上、この技も十数年使っていなかったため精度が落ちたか、エヴァはそう内心吐き捨てた。同時に、エヴァは糸に気付き、一瞬でそれを避けた男に興味をもった。

「二一番、那波千鶴。そっちの男は誰だ？」

「えっ？へっ？」

呟くように口にされた一度目と異なり、明確に自分へと声をかけられた千鶴は混乱から抜け出せなかった。それでも自分を“お姫様だっこ”したままのケイと反対側の木の上に立っているエヴァを交互に見、何が起きているかを判断しようとしていた。一方、ケイはずつと、エヴァの方を睨みつけたままだった。

「その前にお嬢さんの名前をお聞きしたいのですが？」

「ふん、私を知らんのか。良く聞け、私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。誇り高い悪の魔法使いだ」

ケイはエヴァの答えを聞きつつ、千鶴を降ろし背後に回るように指示を出した。同時に小声で、またエヴァには見えない位置で“アデアット”と唱え、自らのアーティファクトを取りだした。木の上で、両手を腰に当て、高慢な表情を浮かべたエヴァは漸く自らの紹介を終え、二人に応えを求めてきた。

「誇り高き悪の魔法使いであるマクダウエル嬢は、こんな夜に僕たちのような一般人にどういった御用件でしょうか？」

「光栄に思うのだ。私の血肉となるためにその血を捧げる機会を与えてやるのだからな。そうだな、貴様の方は時が来れば従僕にしてもいいかもしれんな」

“すぐに龍宮真名に今のことを連絡してくれ” 小声で有ったものの千鶴には確かに聞こえた。掴んでいたケイの腕を強く握ることで、わかったという合図を送った。エヴァの登場、そしてその威圧感に千鶴は怯えていた。おそらくケイがいなければすぐに逃げ出すか、腰を抜かしていたかもしれない。しかし、ケイがいることでやや落ち着きを取り戻し、その指示に従い携帯電話を取り出そうとした時、

今までに感じたことのないような不思議な浮遊感を千鶴は感じた。

「貴様、なにをした!？」

エヴァにはケイが何かをしたようには見えなかった。が、千鶴は一瞬にしてその姿を消した。姿を消す、その事象を起こす魔法といえは第一に転移が挙げられる。ポピュラーというほどではないのはそれを習得するために高技術を伴う上に、魔力を多く消費するからだ。透明にする魔法などエヴァは聞いたことが無く、気配を消すことも彼女が一度認識している以上できないはずであった。

魔法であれば詠唱が行われたはずであるが、ケイは詠唱をしていなかった。詠唱中には魔力を籠めねばならないが、エヴァは油断なくケイの魔力に動きが無いことも確認していた。無詠唱だとしても魔力の動きが必要であり、それもなかった。つまり、魔法ではないということ。で、あれば、自ずと答えはアーティファクトによるものとなるとエヴァは結論を降した。

「便利なアーティファクトだな。貴様が残ったということは一人を転移させるものか。少々面倒だが、那波は一般人。後でどうにでもなる。まずは貴様から血を戴こう」

「それはどうでしょうか、“闇の福音”。あなたが僕のことを魔法使いと思わなかったように彼女も魔法使いかもしれませんよ。それに僕は従者なのですから、彼女の従者かもしれません」

「ありえん。クラスメイトのことぐらい確認している。」

百戦錬磨である“闇の福音”の相手をするということにケイは緊張を覚えていた。しかし内心とは異なり、ケイは余裕の笑顔を浮かべ、エヴァに応じていた。時間が限られるエヴァと異なり、ケイは時間を稼げばよく、そうすれば千鶴が援軍を呼んでくれると信じていたのである。

真名を指名したのは、千鶴のクラスメイトであるため連絡できるだろうということがあった。またケイの知っている限り千鶴のクラスメイトであり魔法関係者でもあり現在のケースに使えるのは三人であった。けれど二人目の関係者は少々短絡的であるため、意図を察せず、こちらにただ向かってくる可能性があり、そして最後の一人はこちらの意図を察しても援軍には心もとなかった。その意味でケイにとって真名の方が適していた。もっともあくまで相対的なものに過ぎず、真名も二人と異なる欠点を持っていたのだが。

「それはどうでしょうか。“闇の福音”は十歳で成長を止め、頭もそのままもつぱらの噂。こちらが謙ればベラベラと喋ってくれる頭の弱さから察するに噂は事実だったのでしよう。呪いではなく、本当は留年をしているだけなのではないか、と先日聞いた陰口がまさか本当のことだと実感することになるとは思いませんでした」

「貴様あー!!」

先ほどの余裕の表情と異なる、嘲笑を浮かべるケイにエヴァは怒りを覚えた。明らかな挑発と理解していながらも、最初から自分だと知っていながら名乗らせ喋らせていたと思うとますます怒りが内よりにこみあげてきた。その怒りを止める気は起きず、女を逃がせたからといって調子にのりだしているこの男に泣いて謝らせてやる、とエヴァは決意した。百戦錬磨の六百歳にもなる自分と、二十にも満たずこの学園に居る以上大した実戦も踏んでいないであろう小僧。魔力の大半は失ってはいるものの今は満月の夜、多少の魔力はある。それに較べこの男の魔力は自分と大きな隔たりのない魔法使いとしては平均にも満たない魔力。どこにも負ける要素は存在しない。だからこそ、魔法使いではないと判断し襲ったのだ。そして、戦い、いや自分が一方的に勝つ、戦いとは呼べない行為の第一声は決まっている。

「死ねえ！！！」

エヴァはそう大声で宣言するかのようにつぶやき、ケイへと襲いかかった。

\*

千鶴は酷く狼狽していた。不思議な浮遊感の後、周囲の景色は変わり、確かに握っていたはずのケイの感触はなくなった。茫然自失、といった方が正解だったのかもしれない。暫らく何も考えられなかった。ただ、一分と経たず思考するまでには回復した。それは保母のボランティアをしている関係上、想定外のことを起こす子供による驚きに慣れていたので、それとも生来のものだったのか。もっとも、子供の起こす想定外の行動はあくまで常識の範囲内で有り、現在千鶴に起きたことは常識の範囲外のことであった。

やや落ち着いた千鶴がまず行ったことは状況の確認だった。確かに手にケイの腕を握っていた感触があったことを思い出すと、周囲を見渡した。その部屋には電気が付いていないものの窓から差し込む月の光により、千鶴にはどこに自分がいるか確認できた。何度か来たことのあるケイの部屋だったのだ。

そして記憶していることを順々に思い出して行った。エヴァの言葉を信じるのなら、千鶴にはまったく理解できないことだったが、自分とケイを襲ってきたことになる。血肉や血などの表現から実に攻撃的であったことを千鶴は覚えていた。そして、あの恐怖を伴う威圧感を、千鶴は思い出し身体が震えてしまい、自分で自分を抱きしめることで落ち着こうとした。そして、ケイはそのことを肯定するように行動していた。自分を抱え移動し、背後にかばっていた。そして、ケイの“すぐに龍宮真名に今のことを連絡してくれ”とい

う言葉を漸く思い出した。

「真名さん、真名さん」

普段はひとり言をほとんど言わない千鶴であったが、今は自分に言い聞かせるように真名の名前を唱えていた。同時に頭の中では、その言葉の直後にここにいた、ということが思い出されていた。現実ではありえない、夢だったのではないだろうか。その考えが頭に浮かぶ、最後の突然この場所に居るということがそのことを証明しているように思えた。ケイのこの部屋で眠りにつき、今眼を覚ましたのではないだろうか、と。漸く鞆から携帯電話を取り出し、見た時刻は先ほどの事象の続きで有るといえる時刻だった。

千鶴は記憶という酷く曖昧なものを信じ、常識を捨て真名に連絡することを決めた。もし本当のことであつたら、ケイの危機なのだろうから当然のことなのだが、現実感を伴っていなかった千鶴にとつては少しの勇気が必要とする決意だった。真名が笑ったり吹聴したりするような人間ではないとは思うが、それほど親しい仲ではなかったからだ。

もつとも、これらの考えもどこか頭の片隅で考えていただけで、携帯電話を見つけるまでは手間取つたが、それからは一切戸惑いなく真名への連絡をしようとしていた。

「もしもし、真名さん」

「ああ。どうしたんだ、那波」

幸運なことにすぐに出てくれた。電源を切っていたり、傍にいなかったりという可能性は余裕のなさから考えていなかったものの、千鶴は安堵の溜息を吐いた。その安堵は、ただ人の声を聞いたからなのかもしれなかったのだが。

「実は先ほどのことなのですけど、

」

頭の中で整理していた千鶴は要領よく順序立てて真名へと説明したつもりだったが、普段の彼女に較べれば全くもって下手な説明であった。しかし真名はすぐに状況を理解し、逆に順序良く質問していきそれに彼女が応える形での説明となった。

「状況は理解した。こっちでどうにかするよ」

「私にできることはなにかしら？」

説明を終え、真名の熟考のあとの答えに対し、千鶴は迷いなくそう聞くことができた。判断付かない状態から現実として受け入れたというより、これも含め夢であるという処理をしたのかもしれない。

「……君はそこで待機していてくれ。もし誰か、……エヴァンジェリンか茶々丸が来ることが有れば、その指示に従ってくれ。誰も来なければ三十分とせず彼か私が連絡する」

「わかったわ」

千鶴の答えを聞き、真名は電話を切った。千鶴は虚空を見つめながら、もう一度、先ほどからの不思議なことを思い出すのだった。

\*

厭らしい戦い方をする奴だ。それがエヴァのケイに対する評価だった。いや、戦いですらなかった、一方的にエヴァが勝つという意味ではなくケイが戦うのでなく逃げるという意味で。ケイにより次々

と口頭やその行動自体による挑発が行われたが、五分も経てばそれも受け流せるようになった。ただ、タイムリミットが有る状態で、挑発行為にのり単調な攻撃ばかりをしていた自分をエヴァは自嘲していた。確かに自分は子供っぽかったのだらう。相手を小僧と侮っていたことを素直に認め、自分を相手に既に十分以上逃げ続けている男に対し、その力量を褒めざるを得ない。冷静に観察しわかったことだったが、ケイの攻撃はあくまで逃げるために必要な攻撃であり、時間稼ぎだけのために動いているのは明白だった。エヴァは攻撃を中止し、ケイもそれに乗り、互いに距離を取り向かい合った。

「チツ。貴様、何という名だ！」

「……………狙われると困るので教えたくないのですが」

「ふん。どちらにしろ、すぐにわかるものだ！！せめて自分で名乗れ！！」

「はあ。……………ケイと申します。できれば二度とお逢いしたくありません」

「却下だな。次回を楽しみにしている」

エヴァは獰猛な笑みをケイへと向け、そのまま背を向け歩き出した。既にタイムリミットであることに気付いたエヴァはその場を去ることにしたのだった。追撃する理由を既に失っているケイはエヴァの怒りを少しでも静めておこうと声をかけた。

「一応申しあげておきますが、千鶴は魔法使いではありませんし、挑発に使用した噂や陰口などを僕は耳にしたことはございませんので、安心してください」

エヴァは足を止め、背後を振り返りケイを睨みつけるとそのまま何も言わず、再び足を進め立ち去った。

## 第二話 エヴァ前篇？

ケイの部屋、そのベッドの上で膝を抱え眼の前に携帯を置き微動だにしない千鶴に変化が訪れたのは、真名との連絡を終え、十分と経たないうちであった。眼の前に置いた自分の携帯に着信が来たのだ。相手はケイであることが表示されており、2コールもさせないうちに電話に出た。

「もしもし！！」

「ごめん。遅くなった」

十数分、たったそれだけの時間であったものの、ケイの声を聞かないだけで不安に苛まれたことはこれまでなかった。だから声を聞けただけで不安が胸からすっぽりと抜け落ちたことを感じ、自分の中でケイの大きさを千鶴は実感した。

「……………無事だったのよね！？」

「ああ。心配したほどではなかったし、平和的なやり取りですんだよ。かすり傷一つ負っていない」

“平和的なやり取り”、エヴァは確かに魔力で編んだ糸を使い攻撃していたし、その当たり前どころが悪ければケイは死んでいたのは事実だった。けれど、エヴァもケイも命のやり取りは意図していなかったのを互いに理解していたため、二人にとっては“平和的なやり取り”であった。その意味でケイの言葉は間違っていないが、かすり傷一つ負わなかったのは明確な嘘である。そこそこの治癒魔法の使い手であるケイにとって、酷いものでなければ治せるため、千鶴に会う前には治すことで問題とならなかった。

「今から帰るから十分ほどでそつちに着く。詳しくはその時話すら悪いけど待っていてくれないか」

「うん」

「あと、帰りがさらに遅くなると思うから、同室の子たちに連絡を入れておいて」

「わかったわ」

そこで電話を切り、同室の村上夏美に連絡を入れるべく、千鶴は頭の中で言い訳を考え始めた。いつそのまま外泊するのもありかもしれない、などと頭によぎる程度に自分に余裕が出てきたことを確認し、夏美への電話を鳴らした。

\*

「大丈夫だったか」

真名は桜通りに着き、ケイに声をかけた。エヴァが撤収し終わった後となったが、ケイも間にあうとは思っていなかった。あくまでエヴァを帰らせる口実、そして万が一の時の回収が、真名がこちらに来た理由であり、その二つは幸運にも杞憂に終わった。学園側への連絡は滞りなく真名は済ませており、エヴァの従者である絡繰茶々丸がケイの元にやってこなかったのが何よりの証拠だった。茶々丸の性質上、場所の捕捉が容易でありエヴァを今回の件で罰することの明確な証拠となりえるため来られなかった。当然、エヴァもそのことは承知しており、茶々丸を連れて来なかったのはそのためである。

「事後処理を頼む」

「わかっているよ。さつさと帰って安心させてやれ」

それは真名がやってきた主たる理由で有り、実際ケイの心配など微塵もしていなかった。真名が知る限り逃げに徹したケイを狙撃するのも少々難しい。戦えば簡単に倒せる自信を真名は持っているものの、逃げに徹するケイを捕捉する自信はなかった。もともとこの学園の多くの魔法使いが目指す姿には程遠く、またどこかのクラスメイト同様、魔法関係への意欲は薄くあくまでアルバイトとしている姿は、魔法使い間での尊敬を集めることはないのを真名は知っていた。少なくとも例外を一人、それもクラスメイトからあげることができたが。

「よろしくお願いします」

いつもの笑顔を真名に向け、ケイはその場を去って行った。

\*

「あの男……」

悔しさを滲ませながらエヴァは言葉を口にした。未だ茶々丸の待っている家には遠かった。けれども、桜通りからは離れたため、一刻も早くケイのことを知りたくなったエヴァは茶々丸への念話を行った。

“茶々丸、ケイという名の魔法生徒を知っているか？”

“マスター、御無事で何よりです。ケイさんですか、少々お待ち下さい”

茶々丸がデータベースを調べている間、エヴァは沈黙し、その答えが出るのを待っていた。しかし、思っていたより短時間でそれは済み、茶々丸からの返答も早かった。

“ 該当者は一名、ケイ・マッケンジーという魔法生徒が麻帆良高校の二年に在籍しています ”

エヴァは自らの記憶を辿ったが、この数年警備の仕事で会ったことが無かったため、魔法生徒ではない可能性も考慮していた。しかし、あっさり見つかり少々拍子抜けしていた。会ったことが無いのだから最近魔法生徒になった、元々モグリだったものなのだろうか。自分が会ったことが無いこと、そして自分を手玉に取った実力からその辺りを付けて続きを促した。

“ 魔法生徒になられたのは三年前です ”

“ 最近、というほどではないな。……………それまでの経歴は？ ”

“ アメリカ出身ということと、母親の名前がメアリー・マッケンジーということ以外書かれておりません ”

“ はっ？ ”

三年もいれば普通何度か顔を合わせる機会が有ったはずだと、頭に浮かべながら続きを聞いてエヴァは驚いた。経歴なしというのはこの麻帆良学園ではほとんどあり得ない。最強頭脳の名を冠する者が一人いる程度で、それもあくまで一般生徒、さらに時には監視も付いていることもあるほど注目されている。ましてや魔法生徒において経歴が無いなどあり得ない、とエヴァは眼を見開き驚いたのだ。これはよほどの監視対象で有るか、逆に上層部の信頼を得ている、もしくは希少価値の高い存在であるという結論に達したエヴァは、後日じじいを問い詰めることを決めた。おそらく自分に会わせるこ

とを控えていたのだろうと推論もふまえつつ。

“なんでもいい、他になにかないか？”

“個人的なものでよろしければございます”

経歴をみて、自分以上になにかを感じたのか、それとも同じことを推量したのか興味が出たエヴァは続きを促した。当然、できる限り情報を知りたいということでもあった。

“警備に関しても修行に関しても酷く怠惰でやる気のない人物です”

“ほう、どうしてそう思う？”

“いえ、先日お会いした際も警備への意欲を感じられませんでしたし、ケイさんとよく組まれる方もそのような愚痴をこぼしておりました”

“へっ………、良く会うのか？”

“いえ、マスターと同様頻繁に理由を付けてお休みになられるのでお逢いした回数は少ないです。最後にお逢いしたのは先月マスターが仮病でお休みになり私一人で行かせていただいたときです”

“うるさい！！”

遠まわしに自分が非難されているように感じてしまったエヴァはつい怒鳴って念話を切ってしまった。すぐに自分の非を認めたものの、それは後回しにしてケイについて再び考え出すのであった。

\*

「はい、わかりました。では弐集院先生お願いします」

そう言つて電話を切つたケイは漸く自室へと戻つてきた。真名と別れてからずつと今日の宿直の魔法先生であつた武集院光と電話で、今回のことについて話し合つていたのだ。今日の失敗について想いを耽る。そもそも千鶴とのデートに浮かれ周囲の警戒を怠つており、奇襲を避けられたのはただの幸運だつた。もつとも学園の中で周囲の警戒をするような人間はそうそういないものだが。ケイの失敗は魔法生徒であると周囲にわかるようにしていなかつたことだつた。魔法生徒であるとわかつていればエヴァはケイ達を襲うことはなかつたのである。エヴァがケイを知らなかつたのは互いにサボリ気味だつたためであるが、最終的に魔法生徒でないと判断したのは魔力の小ささであつた。

過ぎたことを考えても仕方なかつたが、もう一つ頭に浮かぶのはあの対応でよかつたのかだ。千鶴はあの場で記憶を消し、魔法に関わる・関わらないという選択肢すら与えないということも考えられた。その場合自分はエヴァに捕まる可能性が有つたが、千鶴にこのような選択肢を与えれば学ぶかどうかはともかく、魔法のことを忘れようとはしないことはケイにとって明白なことで有つたからだ。答えの出ない自問自答をひとまずわきに置き、千鶴が待つ自室の扉を開け、中へと入つた。

「御帰りなさいませ、あなた。ご飯にする、お風呂にする、それともア・タ・シ？」

「はあ」

ケイは深い、深いため息を吐いた。部屋の中で待つていたのは制服の上にエプロンを付け、三つ指をついてお辞儀をした千鶴が言った、その言葉だつた。普段で有ればうれしい遊びで有つただろうが、先ほどまでシリアスに悩んでいた自分がばかしくなり手を額にあてケイは深いため息を吐いてしまった。自分の緊張の糸がほぐれ、笑顔を浮かべたことをケイは自覚した。同時にこんなときでも自分

に配慮してくれる千鶴に感謝した。

「ありがたいんだけど、今日は送るよ」

「あら、夏美には今日泊りだった言っちゃったわよ」

「それで雪広さんに怒られて帰ることになったんだろ？」

「お見通しね」

「いつものことじゃないか」

村上夏美・雪広あやかともに千鶴のルームメイトである。長女・千鶴はしつかり者のお姉さんで二人の面倒を見、次女・あやかは少々我儘で有るものの人一倍責任感があり、三女・夏美は甘えん坊といったところがケイの評価だった。同学年同クラスの彼女たちを三姉妹と捉えていることを口にしたことはないが、少ないながらも会った機会のある夏美・あやかの印象と千鶴の話の結果だった。

\*

「つまり、魔法に関して沈黙を守るか記憶を消すかを明日までに決めればよいわけですね」

式集院とケイの打ち合わせによって、夜遅くのことなので翌日に持ち越された魔法の説明をされた千鶴の第一声がそれだった。もちろん、あのあとケイは千鶴を寮に送る間、できる限り説明をし、この選択についても話していた。今日改めて朝にケイが千鶴を向かえに行き、今は学校の会議室で式集院から詳しい説明を受けていた。魔法のことが一般人に知られた場合、当事者だけに説明させると自分の不利になる情報を伝えない可能性があるため、マニュアル化されたもので説明するようにしているのだ。もっともこんな面倒な真似

をしているのはこの学園の他少数派で、ほとんどの場合当事者間に任せられている。マニュアル化しているとはいえ、学園の関係者しか魔法を漏らしようがここではない以上、学園自体も当事者ではないかと批判もあるが、やらないよりマシであるというものである。

「うん、そうだね。後は質問などが有れば聞くよ」

式集院は安心させるように笑顔で、千鶴に話しかける。前日の夜に桜通りでの件で、木が二本斬られていたため、その修繕を徹夜で行っていたとは思えないほど、陰りのない笑顔だった。式集院としても年に一件あるかどうか程度のことであり、赴任してきて数度目の体験であり、力が入りマニュアル以上に熱弁を振る魔法や魔法世界について詳しく語った。

「では、沈黙を守るということにおきます」

「……………そうかい。わかったよ。ところで魔法は習うかい？」

「そちらの方は保留で、ケイとよく相談してから考えます」

「いつでも何かあれば相談に来てね」

式集院からすれば即決し保留ということに驚いた。即決する人の多くは、言い方は悪いが魔法の力に魅せられる人が多いと聞いていたからだ。だからといってそのことと犯罪に結びついているわけではなく、ほとんどの人は魔法使いとして普通の生活を送っている。

式集院は話を終えたため、席を離れ会議室から退出していった。出ていく前に昼までには鍵を返しに来てくれというあたり、二人に気を利かせたのかもしれない。

「なにかある？」

「どうして私にも黙っていたのって言いたいところだけど止めておくわ」

「ありがとう」

「ケイはこういう魔法使いを目指すの？ 忒集院先生が言っていた“立派な魔法使い” というのを目指すのかしら？」

千鶴が発した声は、質問というより確認の声で有った。普段から千鶴に関すること以外積極的に動こうとしない、勉強も労働意欲も低いケイがそんなもの目指すはずが無いのだ。そんな男になぜ惚れたのか、と自嘲する時期はすでに過ぎ、当然のことと受け入れてしまっている。

「まさか」

「そうよね。ところで世のため人のため陰ながらその力を使っているという事なの？」

「わかり難いよな、それ。簡単に言えば警官だな」  
「警官？」

「魔法使いの犯罪はこの世界の法律じゃあまり裁けないし、なににより捕まり難い。そのためそれ専門の人たちがいるってことだよ。一応魔法世界の各国も細かい部分は違うもののこちらの世界と似たような法律を持っているんだ。刑罰やらは違うけど、日本の刑法と似たようなものだな。それを魔法世界各国がこちらの世界の魔法使いにも適用させて取り締まるための部隊ってのいうが実態だよ」

「へえ」  
「同時にもう一つの意味が有って、英雄という意味でもある。子供の憧れの職業らしい」

「ケイも憧れていたの？」  
「いや、全く。眼の前に化け物がいたからそんな考えは浮かばなかったな」

### 第三話 エヴァ前篇？

「働きたくないでござる、働きたくないでござる」

「死ねえ！！！」

高音・D・グッドマンは大声を上げ、自らの操る影法師にふざけたことを言うケイへの攻撃を命じた。場所は魔法関係者専門の訓練場。多くの魔法使いは腕を磨く場として一般人に見つかり難い場を必要としており、毎回人払いの結果をしても人が来る可能性もある。そのため、この学園ではいくつかの場を提供していたのだ。高音のように派手な魔法を使う者にとっては特に有り難く、彼女自身はよく利用していた。

しかし、今高音はクラスメイトが見れば驚く、いや別人と断ずるような大声を上げその表情もまた憤怒を現していた。クラスメイトの誰もが高音は冷静沈着で激怒などというものとは遠い存在だと考えているからだ。

「よけるな、当たり前なさい！！！」

「いやあ、“立派な魔法使い”はそんなこと言わないと思うけど、そこるところはどうかな？」

「くっ」

言うまでもなく当てる、それは当然であり高音自身も理解はしている。理解はしているが嘲笑するような顔でこちらを見ているケイに一撃でも当てなくては、いや一撃では済まないという思いが高音に去来していた。この三年間の積年の恨み、何度対戦を挑んでも断られ、三年間で数度しかその機会に恵まれなかった。今日幸運にもその機会に恵まれたのだから、とついつい力が入ってしまう自分を抑え、高音が冷静でいたのも最初のうちだけだった。

高音自身に攻撃を当てず、制限時間いっぱい逃げ続ける、これがケイの三年間変わらぬやり方だった。最初に対戦した時に、女だから手加減したのか、と詰め寄ったがケイはなんでもなくように影法師の防御が強く当てられなかっただけだ、と答えた。その時は少し自尊心を満たされたものの、その後他の教師・生徒との対戦の内容は全て高音と同じだった。学園長である近衛近右衛門は一ヶ月と経たず、ケイへの訓練の強制を諦めてしまったため非常にサンプルは少なかった。しかし、これだけはわかった。やる気が無いのだ、ケイは。

同年代との間でこの学園でトップに君臨していた高音には到底許せるものではなかった。高音は最初から上位だったわけではなく、血のにじむような努力をし、上へ上へと登ってきたのだ。その自分に黒星　正確には引き分けで有ったが　をつけた相手がやる気が無いでは済まない。必ず勝利し、その壁を壊し突き進むと決めたのだ。

同時に高音にはやる気が無いケイは、自分の力の限界を勝手に決め諦めていった人たちを見ているようだった。だからこそ何度も諦めずケイに声を掛け、意欲を出させるように努力してきたのだ。別に自分と同様に“立派な魔法使い”になれとは述べたことはないし、そうなれば良いとは思うが、強制するつもりはない。けども、もつとしっかりしろ、働け、負担がこっちに来るのだから、と言いたいのだ。最後のが高音にとって本音だったのかもしれない。

\*

「お姉さま、お疲れ様です」

時間を終え外に出ると見学していた佐倉愛衣に高音は声を掛けられ

た。しかし愛衣は後から出てきたケイの方には見向きもせず声も掛けなかった。愛衣にとってケイは眼障りで鬱陶しくお姉さまである高音の周りにうろつく害虫、というわけではない。むしろ、高音が普段ため込んでいるストレスを発散する良い相手であると考えていた。もつともできることなら、愛衣自身もあのような形でないにしても高音のために役に立ちたいと思っており、高音の役に立っているケイを羨ましく思っていた。つまるところ、ケイに声を掛けなかったのは、高音の方に夢中で気にも留めていなかったからだ。そして、ケイも愛衣がそのような人間だと知っており、高音の居ないときには愛衣とは良い関係を保っている。それは面倒事を持ってこないという意味においてもあつたが。

「凄かったわね、高音さん。もちろんケイもだけど」

「ああ、ありがとう」

千鶴はケイに声を掛けた。この模擬戦を行った原因は彼女だった。ケイは魔法について学ぶかどうかを保留した千鶴の求めに応じ、施設を見学に連れて来ていたのだ。そして、ここで魔法について見せようと思つて来てみれば隣室で高音と愛衣が訓練を行っていた。それを見学させることで、魔法の実演としようとしたのだが、いくらか経った頃こちらに気付き、高音と愛衣が訓練を終わらせ、近づいてきた。勝手に魔法を見せてもらったこともあり、お礼を言い少し談笑していた中で、高音の模擬戦の申し出が有り、ケイにとっては残念なことながら、千鶴がそのことに同意してしまった。おそらくケイの実力を見たかつたであり、高音は学園でも指折りの魔法使いであることを考えれば、彼の実力を見せるのに適しており、戦闘を見せる意味でも丁度良かったため、断ることができなかったのだ。

ケイと千鶴が違う施設を見に行くと別れた後、愛衣が高音へと声を掛けた。

「お姉さま、どうしてケイさんはあんなにお強いんですか？」

「強い？……そうね。彼に聞いたことが有るのだけど、母親が化物だったとよく言っていたわ」

「化物ですか…？」

「巨大ハリケーンを一撃で吹き飛ばし、大雨も快晴に変えたそうよ」「はっ？」

信じられない、という眼で愛衣は高音を見ていた。当然だと高音は思う。自分にだって信じられないのだから。

「嘘、ですよね？」

「私にそう言ってきたのは本当よ。彼はよく嘘を吐くから私は信用していないのだけど」

「そ、そうですね」

規模にもよるがハリケーンを消し飛ばすなど、少なくともあの“紅き翼”級でなければ不可能なはずである。この学園においても学園長はともかく、他の教師にできるとは思えなかった。そのため、学園長に次ぐ実力と言われ、紅き翼も知っている高畑・T・タカミチに高音自身質問したことが有った。規模によっては可能だというのが、“紅き翼”の力に既に並んでいると言われる高畑の答えだった。高畑級の人間が頻繁にいるわけもなく、嘘であると高音は考えていたのだ。また、ケイ自身の戦闘スタイル、耳にした魔力量からそんな人の子とはとも思えない。ケイが高音より遙かに強ければ別だが、そこまで大きく離されていないことは彼女自身感じていた。

だからこそ、高音は法螺と断じていた。ケイ自身はそのことに対し、自分に較べ母親が若すぎることを上げ捨て子か何かだと思っている節があつたが、高音からすれば魔法使いである以上外見年齢はあてにならないものであつた。さらにそれ自体もケイの法螺で有るといふことも捨てきれなかつたが。

「お姉さま、そろそろ時間ですわ」

やれやれ、もうか、と高音は準備をし、施設から出ていくのであつた。

\*

「ねえ、ケイ。あなたが魔法を知つた切欠つてなんだつたの？」

「切欠か。母親が魔法使いだつたから、いつだつたかまでは覚えていないな」

「そうなの？」

「ああ。化物だよ」

「どんな人なの？」

「明確な記憶の最初は三歳くらいの時だつたか、“銀行に行くけど着いてくる？”と聞かれたことだな」

「銀行？普通じゃない？」

銀行、その意味を知るのは数日後だつたんだが、荷物をまとめ普段外出していた雰囲気ではなかつたため、強く印象に残つていたのでと思う。いや、もしかしたら後から、その質問に二つ返事で答えたことに対する後悔から強く残っているのかもしれない。

「うん、着いて行く。」

三歳の僕は二つ返事で母親の問いにそう答えた。“スーパーに行く”などと同様の気軽な問いで有ったため疑うことなく躊躇なく返事を返した。けれど、おかしいと思い始めたのは母が大荷物をまとめ出したことだった。少なくとも鞆を十個程度は用意していたんだ。スーパーに行くときとの違いから不信の声を上げようとしたんだけど、声を掛ける前に母は影に魔法でその荷物をしまい出したんだ。初めてみる凄い魔法に興奮した僕は“凄い！！”と声を上げて、疑問をすっかり忘れ、ただただ荷物が影に収納されて行っているのを見物していた。

僕には未だに習得できない魔法だけど、この便利さから是非習得したい魔法の一つだね。少なくとも母以外が使ったところを見たことが無いんだけど。

「ケイ来なさい。」

収納を終えて、家の中の最終点検を終えて僕を呼び、抱きかかえた。詠唱を行い、一瞬で周囲の景色が変わり、見慣れた部屋の風景が見慣れない機械的な空間へと変わった。未だに当時の自宅の場所はわからないけど、おそらく超長距離の転移魔法だったと思う。

一変した景色に、僕は喜びまたしても感嘆の声を上げていた。その転移先は魔法世界へのゲートの一つであり、手続きをし、ゲートを越え魔法世界へと向かったんだ。

ゲートの向こうも見たことのある風景ばかりで、喜んでいたのを良く覚えてるよ。そのゲート近くの街で一泊した。内心、スーパーとかと違い銀行ってというのはすごい遠くに有るものなんだ、と期待に胸を膨らませていた。遠くにあるんだから凄いものに違いないそう信じていた。

翌日、昼ごろまで街に滞在し、車を借り出発した。車といってもこ

つちの世界とは違ったものだけど、用途は一緒だから似たようなものだ。三歳の僕には、その車に乗っての移動も楽しくてね、ずっと景色を眺めていたよ。

この日から数日、移動ばかりで街には入るものの、基本は野宿だった。街に行っても店に入って話を聞いて出て来るだけだったから、僕も飽きてきていたんだ。

でも、すぐに刺激的な日々が始まったんだ。街道を車で走っていたときに正面から大量の車が土煙を上げてやって来てね。僕たちの車は止められた。当時の僕には理解できなかったけどそれは盗賊というか追剥だね。眼を付けられたってことだった。怖い人たちに車を止められて僕は車の中で怯えていたよ。

母が車を出したことも気付かなかったんだけど、すぐに大声が響いたと思えば爆発音や悲鳴が耳に入ったんだ。僕は母がいないことに気付いて恐る恐る外を見たんだけど、そこにはたくさんのさつきまで怖いと思っていた人たちが倒れていてね。遠くまでそんな感じだったんだ。急いで母を眼で探したらすぐに見つかったよ。立っていたのは母と走って逃げる四、五人だったからね。逃げていく人にも魔法を放って、その後足元でひれ伏すボスらしい人を尋問していたんだ。そこまではわからなかったけどね。身ぐるみを剥いだ母はその後、僕を連れ彼らのアジトに向かって宝を回収していったよ。

僕はそんな母に、こんなことをしていいのかって聞いたよ。

「当たり前じゃない。悪人に人権はないのよ」

その言葉を何を当たり前のことを聞くのか、当然のことじゃないって感じの顔で言ってきたよ。僕はそれを当然のことだと信じたんだ、何せ三歳児だったからね。まあ、結局のところ母とって銀行というのは盗賊のことだったという話だね。その後も次々と狩りに行っていたし僕も何度も同行したものだ

「……………す、すごいわね」

「まあ、今から考えれば二日目に山の近くに止まった時にはそのあたりの山賊を狩っていたのだと思うし、翌日からも怪しい行動を取っていたよ」

「魔法世界っていうのは治安がそんなにも悪いの？」

「悪かった、というのが正解だね。二十年前の魔法世界全体を巻き込んだ戦争の後数年、甚大な被害を受けたから地方の治安まで手が回らなかったし仕方ないことさ」

「それが“立派な魔法使い”の仕事なの？」

「違うよ。これは“盗賊殺し”の異名を取った母さんぐらいしかないことだ。少なくとも“立派な魔法使い”であれば宝の収奪はしないよ」

若干引き気味の千鶴の質問にケイは答える。引くのは当然だと思いつつも、当時の自分には、母親から与えられる知識が全てで有ったため、“悪人には人権が無い”という考えは常識だった。その常識の間違いや、母のやっていたことの非常識さを知るのはそれから数年後で有ったし、この話以上の無茶を散々やらかしてくれたものだった。この話自体もかなりオブラートに包んでいる。あの盗賊たちの中の逃げ出したものに対しても、次々と大魔法を唱え、最後にはついでとばかりに倒れている人も巻き込んで広域殲滅魔法を使っていた。盗賊退治のついでに地形が変わることなどさらにあったし、命乞いをしていようと関係なかった。何人死んだか、何人再起不能となったか知らないが復讐に来ることはなかった。あそこまでやられて復讐に来ると言うのはかなりおめでたいと思うが、自分が気付いていなかったただけという可能性もケイ自身否定できない。母との二人旅はその後十年ほどにわたって続いた。その序章ともいえる話だ。

「お母様ってどれくらい強いのか？」

「どうなんだろう？良くわからないんだ。この学園で一番だつて噂の高畑先生よりかは強いと思うんだけど、僕のようにどちらの足元にも及ばない様な人間には計り知れないレベルの話だよ。母さんが苦戦したのは一度竜の肉を味わいたいつて包丁片手に出かけて行った時だけしかしない。それだつて珍しく服が破けていた程度だから」

「へ……へえ」

実際、竜の巢に向かったのだから、一頭と戦えたわけがない以上、下手をすれば数十頭対一人でやり合つた可能性もある。まあ、いくら母さんでも数頭が限界だろう、服が破けていたと言つても少しだけだつたし、とケイは思つていた。

#### 第四話 エヴァ前篇？

「なんじゃ、エヴァ。まだ何かあるのか？」

学園長室、そこで学園長と向かい合い偉そうにソファに腰掛けている金髪の吸血鬼、エヴァに尋ねた。先ほどまでこれまでの吸血事件について嚴重注意を行ったことで、解散するつもりであった学園長に対し、エヴァはただ睨みつけていた。もつとも、エヴァは注意されたことに対し知らないの一点張りであった。

「どうしたんだい、エヴァ。不満なのはわかるけど、このことに関してなにかあるのかい？」

「チツ、そうじゃない。タカミチ、お前はこのケイという男についてどの程度知っている？」

ケイくん、三年前にやって来て以来怠け者の名をほしのままに独占してきたエヴァの対抗馬として名乗りを上げた少年、高畑にすれば内心苦々しくそう思っていた。それはケイを尊敬していると公言する、最近魔法生徒となった自分のクラスの春日美空に悪影響を与えていることだ。美空の師であるシスター・シャークティーから何度も苦言を貰っている。一魔法教師であった昔と違い、今はどちらかといえば管理職側の人間である高畑にとってケイは頭痛の種の一つであった。もつとも個人的には生真面目とまではいかない鷹揚さを持ち合わせる高畑にとってその程度、怒りの対象にはならない。

「いや、僕は全く知らないよ」

エヴァの求めていたのはあくまで経歴のことであり、評判などではないことを察した高畑は事実を答えた。三年前はまだ管理職になく、

そこまで詳しい情報に触れていなかったし、関係者になったのだから経歴を詮索するような真似をしないというのが高畑の考えだった。管理職になったのだから改めねばならない考えだが、学園長が採用した以上疑う気もなかった。

「なんじゃ、知らなかったんか？」

学園長はそっけなく、知っていることが当然で有ると言った感じで言葉を発した。高畑からすれば、一度質問した際大丈夫と一言だけしか答えてもらえなかったではないか、と少々の憤りを覚えていた。深く聞こうとした質問ではなかったし、疑うと言っほどのものではなかったのだが。

「教える、じじい」

「ふむ、そうじゃのう。タカミチ君に教えておいてもよからう」

そついった学園長は眼を瞑り、腕を組み、額にしわを寄せ、沈黙する。三十秒と持たず苛立ったエヴァは“早く話せ！！”と声をあげ、学園長の眼が開かれ話し出した。

「何から話してよいものやら。……………結論から言っしまえば彼自身は凡人じゃ」

「嘘を吐け！！」

「まあ、待つんじゃない。しかし、母親はそうではない。少なくともナギレベルの天才じゃな」

「ナギさんの！？」

高畑は驚愕の声を上げたが、エヴァも声こそ出さなかったものの驚きの表情までは隠せていなかった。

「あの大分烈戦争のときじゃ。ヘラス帝国もメセンビリーナ連合も何も北のオステイアルトばかりで戦争していたわけではない。南のボリアリス海峡を通り竜山山脈を抜け、テンペテルラに向かうルトも考えられておった。そしてそれはお互いで有り竜山山脈近くで大きな会戦行われた」

「そのようなこと聞いたことがないのですが？」

「通れない理由は噂として色々ばら撒かれたのじゃが、実際の主因は最低でも万人規模で有った互いの軍が双方壊滅的な打撃を受けたからだそうじゃ」

「はっ？」

「わしは当時もこちらに居たが、両国の中枢に何人も知り合いはいる。終戦後に密かに教えてもらったんじゃ。写真は入手し、接触を何度も試みたがどれも失敗、彼女自身メアリーとだけ名乗ったらしい。その名も本当であるかはしらん」

「どうやって、万人規模の相手に壊滅的打撃を加えるんだ？」

「わからん。山脈を削り一気に土砂で決着をつけたとも、魔法を乱発したとも言われている。付いた仇名は“ブラッディー・メアリー”じゃ」

驚きで思考が回っていない二人を相手に学園長は一方的ともいえる説明を終えた。驚くのは当然であり、自らも両国の情報部の友人から同じ回答が帰ってこなかったら信じることはなかったと、学園長は髭をなでる。それでも、会ったことが無ければ受け入れなかっただろう、そう会った事さえなければ、という内心を口にしない。

「彼女からの手紙とともに彼が来ての。内容は“あとよろしく”程度のものじゃった。彼自体は内に秘めた飛び抜けた才能も、巨大な魔力も持ち合わせない平凡な人間じゃったから受け入れたというわけじゃ。経歴に関してはここに来るまで彼女とあちこち点々としていたようじゃし、確認する術もない以上、それで良しとしたんじゃ」

「なぜ本物の“ブラッディー・メアリー”からの手紙だとわかった？」

「……………なぜじゃろうかの。フオッフオッフオッフ」

さてこの話はおしまい、とばかりに学園長は席を立ち部屋を出ていった。 “妖怪のような頭をした人間がいると聞いて”とそれだけのために会いに来たことや、その時戦争のことを聞いた答えが“昼寝の邪魔をしたから”だということは決して外に漏らしてはいけぬ秘密として学園長自身の胸にしまっているのであった。

\*

「せ〜ん〜ぱ〜い。」

ケイは背後からの声に気づき、相手が誰かを確信する。未だ距離が有ることをその声の大きさから判断し、反応を返さないように身体の動きをそのままに素早く眼だけで逃げ場所が無いか確認する。残念ながら近くに適した場所は存在しなかった。前にお店に逃げ込んだときに、そのままついてきて奢らされたことを考えれば不用意にどこかに入るわけにもいかず、またシャークター以下背後の声の主の天敵が周囲に存在しない以上、そういった口先だけで逃げる術も存在しなかった。流石に学校の帰り道、アーティファクトを始めとする魔法を使用するわけも行かず、走って逃げようにも確実に捕まることをケイは知っていた。なぜなら声の主はこの学園で一番の足の持ち主なのだから。願わくば、用件が面倒事でないことを祈るのみである。

「先輩、呼んでいるのにどうして振り向いてくれないんすか？」

それは実に簡単で、君に会うと三度に一度ほどの確率で面倒なことに巻き込まれるからだ、と口に出そうとするも、どうにか抑える。そのことは何度も口にしており、彼女に伝わっているはずだが全く懲りもせずやってくるあたり、人が悪い後輩だと言えた。

「はあ」

「先輩、ため息なんかつかないで下さいよ。仕方ないじゃないっすか。サボり気味な先輩を道連れ……じゃなくて先輩に助けてほしいんすよ。悪知恵を貸し……相談に乗ってください」

学校も違い、あくまで魔法生徒同士で有ると言うだけにも関わらず、美空は良くケイを頼る。それは互いの目的が如何に力を抜くか、面倒事にぶち当たらずに済ますかなどという意味で一致していたため、先人の知恵を借りに来ているのだ。ケイとしても千鶴のクラスメイト、悪びれることなくしつこくやってくる美空の相談を断ればさらなる面倒が眼に見えている以上、断るという選択を取り難い。現に何度か試した方法はいずれもより面倒になっただけで、無駄に終わっていた。逃げ出すというのもその一つであり、そのままでもなくあくまで気付かなかったという態度を取ってトイレに逃げ込み、時間を稼いでいる間に窓から逃亡したのは成功した。同じ手は二度と使えない上、周囲にそういった施設は存在せず、今回は運を天に任し、大事でないことを祈るしかケイには取る手段がなかった。ケイは内心はともかくとして、いや、表面上も見ること拒絶を表しているものの、肯定する返事をやむを得ずだし、美空の相談に乗ることとなった。

「先輩聞いて下さいよ。私に今度来る子供先生をそれとなく気付かれないようにフォローしろって言うんすよ。酷いですよね」

「それは面倒かもしれないな」

子供先生、来週遙々イギリスより来日する予定の少年であった。千鶴や美空のクラス担任は現在高畑であったが、彼が来日次第担任を交代することは既に発表されている。そして、その補佐として副担任を設けることや、逆に彼を副担任にする、いや一教師として受け入れるべきだ、などと魔法教師間で喧々諤々と話し合われたとケイは聞き及んでいる。一般教師も含め、他の教師が積極的にフォロースるということで今の形に落ち着いたらしいのだが、幸運にもケイにとっては全く関係のないことであった。ほとんど興味のないことでも有り、千鶴に前もって知らせておくべきか、その時どういった感じで話すべきかを考える程度の問題であった。

ネギ・スプリングフィールド、英雄という意味での“立派な魔法使い”ナギ・スプリングフィールドの一人息子。十歳にしてメルディアナ魔法学校の過程を二年短縮し首席卒業まで果たした天才児、その上含有する魔力量も桁違いである。ケイも美空もその程度の情報しか持ち合わせていなかった。調べたわけではなく、先日学園長より発表が有ったためである。

「やっぱり面倒っすよね」

美空に課せられた役割は監視と報告が主であり、ただでさえ面倒な雑務であると同時に天才が相手と来ている。知識量があるだけのあまり賢くなく、監視の目など気付かない先生であればいいが、そんな都合のよい天才はいないだろう、とケイは考える。ならば、監視も面倒で有り、フォローもし過ぎると勘付かれる可能性が高い。手助けを減らし自助努力によってネギの成長を促したいとの上の意図に反しないギリギリを見極め、手助けをしなくてはいけない。もつともネギから助けを求められた場合はその限りではないだろう。ということとは学園長の意図は明白といえる。おそらく学園長も中間管理職と言ったところなのか、とケイは嘆く。

「美空が選ばれた以上、そんなに面倒事ではないよ」

「どうということっすか？」

「他のクラスメイトを選ぶわけにいかなかったこともあるだろうけど、美空の普段の行いを考えれば簡単だろ」

「普段っすか」

「真面目できっちり仕事をこなすタイプじゃないだろ？」

そして、おつちよこちよいである。詰めが甘く、技量に乏しい。そんな美空を選んだのだから望む結果は見えてはいるはず。見つかったなし崩し的にそのままネギに協力しろということ。学園長も上から面倒な育て方に関する注文を受けたのだろう、とケイは推量した。

「そういうことっすか。サボっていいものなんスね。じゃあ、先輩ありがとうございます」

言葉が足りず、ケイの意図とは異なる解釈をした美空はケイが声を掛ける間もなく、超スピードで走り去って行った。いい加減な自分に任された仕事なのだからいい加減なもので良いのだろう、美空はそのように判断したのだった。ケイはそのことに気付くも、学園長や直接の監督責任者であるシャークティーが巧くやるだろうと訂正するのを諦め、当初の目的で有った千鶴の元へと向かった。

\*

美空との会話は歩を休めることなく目的地へと向かっていたため、約束の時間に遅れることなく間に合った。

「遅かったわね」

「恨むなら君のクラスメイトの美空にしてくれ」

「美空を？」

「ちよつと面倒な相談事をされてね」

ケイにとっては大事ではなかったが、美空がこれからネギに関連し面倒事に巻き込まれるのは確定的だった。一応千鶴にもそのことを注意しておく方が良いだろうと、ケイは話を続けた。

「その内容なんだけど、千鶴のクラスの担任が来週代わるんだ」

「えっ？こんな時期に、高畑先生になにがあつたの？」

「出張も多かつたし、管理側に回りつつあつて高畑先生もすっかりとした時間を取れなくなってきたからね。本格的に管理側に回るこ  
とになつたんだよ」

「でも、どうしてこんな時期に？」

「もうすぐ高畑先生には長期出張が入る予定で、どちらにしる二月後半から三月の末まで長期出張が入っているからね。その間、担任不在というわけにいかないから、だれか代わりを務めなくてはいけない。四月からの担任を予定していた先生を早期に来てもらうことにしたんだ。それで引き継ぎの時間もあるだろうから来週から来る  
ことになつたんだよ」

「少し残念ね。確かに担任としては長期出張が多くて困つた先生だ  
つたけど、クラスの評判もよかつたのに」

建前はその通りであるが、本音のところをどう伝えるか、ケイは悩む。その教師が、魔法使いであること、子供であること、“立派な魔法使い”になるための修行の一環でありそのためあまり口出ししない様にしてほしいことは伝えなくてはいけない。一方で、何故千鶴のクラスなのか、担任以外にすべきなのではないかなどの当然の疑問には答えられない。前者は美空始めこの学園で一番魔法関係者

の多いクラスであることと選ばれたのだろうし、後者は箔付けかより高い成長を望むためであろうと推察していた。あくまで推論に過ぎないものであり、教えるほどのことではないとケイは考えていた。

## 第五話 エヴァ前篇？

三学期が本日終わり、明日からは春休みであり警備の最終日ということもあるためケイは久しぶりに顔を出した。基本的に警備は普段魔法先生と有志の魔法生徒が担っているのだが、春休みに入れば教師の手も空き、有志の魔法生徒の参加回数もそれに伴い減らされるもっとも有志の魔法生徒という述べ方をしているが、ほぼ全員が有志であり、ほとんど強制の時にしか顔を出さないのはエヴァやケイくらいなものだ。

今日のようなイベントが有りそうなきは強制的に全魔法生徒も動員される。今回のイベントは春休みを前に盛り上がり暴徒と化す生徒が増えそうだからというものだった。

「久しぶりね、ケイ。もつとまじめに警備に参加しなさいよ」

「あ、お疲れ様です。ケイさん」

ケイに声を掛けてきたのは高音と愛衣だった。高音とケイは同学年であり、生真面目と不真面目の組み合わせとしてお目付け役に彼女はケイと良く組まされる。そして、高音の従者である愛衣もセツトとなるため、基本的にケイはこの三人での行動が多い。

この学園での警備員の仕事は主に二つである。まず生徒の暴走を止める役割である。昔武道系の部活が数十人規模で暴発した時に近くに居た警備員が一人で全員を止めたのは、武道系の部活の間人ではもはや伝説となっている。デスメガネ、と呼ばれ恐れられている高畑のことだった。この学園では、他の学校などより歯止めがかかり難いと言われており、暴走というよりはっちゃけ過ぎて周囲についつい迷惑を掛けてしまう生徒が多い。原因は認識障害結界のためであるとも、学園の中心に存在する世界樹からもれだす魔力の影響とも言われるがあくまで噂レベルであり実際に証明されたわけではな

かった。

もう一つの役割は周囲に拡がる森での迷子の探索である。これは定期的に見回り、また依頼があれば搜索しており、生徒側であるケイに依頼が来たことはない。

他の仕事に一応、侵入者に対するものがあるが、ケイの聞いたところでは年に一度あるかないか程度のもので最近起きていない。それも一般人より高い魔力の持ち主は麻帆良学園を被う探知結果に引っ掛かり情報がすぐに中央に届くため、すぐに解決される。付け加えるならば、学園長や高畑をはじめ、名の知れた魔法使いを有するこの学園に侵入し、何かをしようとする蛮勇をもつものはここ数年存在していない。

「そう言えば聞きいたわよ、ケイ。あなた彼女を守るため、エヴァンジェリンさんと戦ったそうじゃない」

満面の笑みを浮かべ高音はケイに話しかけた。内心逃げればかりのケイが戦ったというのが珍しく、また彼女のために戦うということに高音は好感を覚えた。もっとも今までの巨大なマイナスに較べれば小さなプラスであったが。

「記憶にないですね」

「へ？あ、そうだったの」

とぼけるケイに対して高音は実に残念そうな表情を浮かべた。噂の真偽にケイは答える気はないのだ。それは実際になかったのか、それともケイらしく目立ちたくない・面倒事を増やしたくないという考えから否定しているのかは高音にはわからなかった。しかし、どちらにしろこうなればケイが口を割ることはない和高音は知っていた。

エヴァの桜通りの件は“なかった”こととして処理されている。ケイも千鶴もその身に関してはエヴァが保証させられており安全といえ、ケイとエヴァの間で取引が行われた。千鶴は戦闘を見ていないため、襲われたという意識が低く悪戯というレベルで認識していたため、今後人を襲わないのであれば、と了承した。また、学園・エヴァともに大事になると困るためその取引を歓迎した。そして、ケイとしてもいくつかの条件を飲ますことで満足な結果となった。残念なことに千鶴との約束は三者によって形骸化されており、守られることはなかったものの、表面上事件自体が“なかった”こととなった。真名と式集院も別件で沈黙を約束され、高音が知ったのはあくまで噂に過ぎなかった。

桜通りでの戦闘、ケイが逃げ切れたのは幸運によるものであった。茶々丸という増援は来なかったものの、魔力を封じられていても六百年にも渡る戦闘経験があるエヴァから逃れるのは大変なものであった。いくつもの幸運、エヴァ側の多くの失点によるものであったのだ。十五年閉じ込められ、碌に戦闘経験を積んでいなかったため勘が鈍っていたこと、魔力の糸を久しぶりに使うため感覚が取り戻せていなかったこと、ケイの魔力の小ささに油断していたこと、タイムリミットの存在による焦りなどエヴァのミスは多かった。吸血する相手は一般人を選ぶつもりだったため、まだ準備していなかったのだ。そして、逆にケイにとってプラスだったのは格上の相手とやり合うことに慣れていたことが大きかった。

ケイが魔法生徒であり、千鶴を逃がした時点で少なくとも翌日には学園に報告されることは確定していた。そうなればこれまでと同様の吸血行為は難しくなると踏んでいたエヴァの選択肢は三つであった。吸血行為を諦め、戻る。ケイの血だけでも吸う。ケイは諦め、周囲から一般人等を探し出し吸血するという三つだ。最初の一つは少しでも目的のために力を付ける必要が有り却下され、二つ目は実

力で退けられ、三つ目はケイからの連絡で学園側が動くため、大事となり後のことがより困難になると考えられたため行わなかった。別れたのはケイが十分な時間を稼いだ後であり、すぐにエヴァは監視下に入っていた。

「それはともかくとして、子供先生の評判はどう、高音？」

「年寄りの道楽といいましようか、学園長の悪戯で一度学校を休みテストに遅刻したそうですが、教師としての評判は上々とのこと。現にネギ先生のためにクラス一丸となって勉強し最下位から一位になりましたしね。クラスに慕われているのは教師として良いことですわ」

「魔法使いとしてはどうだい？」

「人助けを一度し、その時のことで魔法がばれた相手がいたそうですが、記憶を消すのではなく沈黙を守ってくださいなさっているそうです。その方も、ネギ先生と仲良くなっているとか。ただ、魔力の暴走が懸案事項ですね。その方にも何度か迷惑を掛けていらっしゃるらしいのですが、その方はよくしてくれているとのこと。良い方なのでしょうね」

「魔力の暴走とはどういったものなんだ？」

「風が吹く程度と聞いていますわ。巨大な魔力を制御するのは難しいもの。回数も徐々に減っているそうなので、影で努力しているのでしょう」

風が吹く程度、とは過小な評価であり、実際には武装解除であり服まで脱がしている。大問題で有るのだが、被害者は主に一人であり、その少女は現在訴える様子もなく高音の述べるようにネギと仲良くしている。本来であれば学園としては何らかの措置をすべきところであるが、その少女の保護者が高畑であり学園長のいわば身内ということで、甘えている感は否めない。実際ケイは千鶴と美空からそのことを聞いており、どうにかすべきであると提言したが、その少女から訴えない現状と頻度もそれほどではないことを踏まえ、何

ら行動に移されていない。千鶴も不承不承ながら子供であるということに納得し、引き下がった。大浴場にネギを入れているような生徒たちなので、千鶴もそこまで心配していなかったことも大きい。

問題はもう一つあり、ネギが来る前にケイが相談された美空の件だった。学園側の思惑としては、ケイの推察通り学園側はどこか抜けている美空が“偶然”関係者であることをばらし、ネギの助けになるように目論んでいた。しかし、想定したより美空が巧く監視しており、またネギがそこまで鋭くないこともあつて現状進んでいない。既に初日に味方を一人手に入れているため、美空の必要性はやや薄れているため、学園側もこのことは諦めつつあった。

\*

千鶴は後悔していた。もっと強く是正を求めるべきだったのだと。ネギについて千鶴は前情報としてケイから色々聞かされていたが、会ってみればかわいい子供に過ぎなかった。ケイに頼まれて暫らく大目に見るつもりでいたが、授業はしっかりしており、担任としての仕事も他の教師の手を裏で煩わしているであろうけれども、少々大げさに言ってしまうえば不在の多い高畑より良い教師だったと、この一カ月半を振り返る。このテスト期間に不在であったことやテストに遅刻してきたが、他の教師はしっかりフォローしていた。ネギ先生のためにと、勉強にやる気のないクラスメイト達が一致団結し勉強したことなど今までになかったことであり、生徒に慕われるといえば大げさだったがその点は評価できる。マスコットに過ぎないという考えも持っていたが、教師としてのネギは表面上落第点を付けられない。

問題は魔法使いとしてのものだった。初日の様子から神楽坂明日菜後に千鶴が聞き知ったことによるとネギ先生と同室に暮らしているに、魔法をばれているのではないかと疑ったが、数日もすれば確信に変わった。周囲に大きな影響を及ぼすことではないし、アスナ自身納得している様子だったため、そのこと自体は問題ではない。問題は魔力の暴走と呼ばれる行為だった。ドッジボールでの件は千鶴からしても溜飲を下げる行為であり、自業自得とは言わないまでも、天罰と思え軽視していた。その他にこの一カ月半のうち教室で一回、風呂場で一回、目撃していた。ともに被害者はアスナであり、彼女自身その場は怒っていたが許していることは見ていてわかったため、気にしていなかった。

今日までの千鶴の評価は、教師としては落第でなく、魔法使いとしてはアスナのお陰で落第を免れているといったところだった。あくまで技術論や裏方の苦勞など知らない表面上を見た限りの、千鶴自身の知っていることだけでの判断であったが。

しかし、今日、評価の間違いを思い知った。自分が、ネギに甘い評価を降していたこと、いや魔力の暴走を甘く見ていた、と千鶴は思う。

“学年トップおめでとうパーティー”が開かれ、後からネギがクラスメイトであまりこういった催しものに出て来ない長谷川千雨を連れてきたとき千鶴は内心ネギに好感をもった。口では来たくないと言っていたが、千雨も強引に誘われるのを待つており、だからそ子供の力でここまで連れて来ることができたのだろう、と。それを見抜いたかは別として、連れてきたのだからネギもなかなかやる、と。

その直後に魔力を暴走し、千雨を裸にしなければ高評価のままだった。が、残念ながら、風呂場でもなければ、教室で下着姿というも

のでもなく、その意味でアスナの時より酷かった。野外であり拓けた桜の木の下それも下着でなく、全裸にするということを行ったのだ。周囲を見渡せば人らしき姿は居らず、クラスメイトだけであつたし、女子寮前であるため居たとしても男である可能性は低く、そのことは救いであつた。千鶴は素早く近くに合つたタオルや自分の上着などを掛け、涙目で謝るネギを置き、千雨を連れ彼女の部屋へと向かつた。走るように向かつたこともあり、幸運にも人目にさらされることはなかつたが、“いつか絶対消してやる”と千雨が何度も呟いていたのは心の裡に秘めておくことにした。

部屋に入り、千雨に服を着てもらい、一通り慰めた後、彼女からの頼みで一人にした。部屋の中にあつた衣装や小道具についても心の裡に留めておいた。会場に戻ってくれば、千雨のことをアスナに尋ねられ、会うなら後日か時間をおいた方が良くいと助言をし、一段落したところで、千雨の部屋を再び訪ねた。間をおいたこともあり落ち着いてきていた千雨に、部屋について口止めをされ、ネギに関する愚痴を散々聞かされた千鶴は、千雨が立ち直っていることを確認すると適当なところで切り上げ、ケイに電話した。もちろん今回のことを抗議するためだつた。

「わかつた、どうにかするよ」

強く抗議した後、ケイはそんな返事を溜息交じりにしたが、彼がやる男であると知っている千鶴は充分だと判断し、電話を切つた。

\*

千鶴が魔法のことを知ってからというもの、自分は働き者になつて

しまったものだとかイは自嘲する。高音が聞けば、“どこが働き者ですか”と激怒することは明白だが、過去に較べれば働いているのはまた事実だった。千鶴関連に対しては力を惜しまないため、魔法の方まで千鶴関連となったためそれはやむを得ないことであった。といつてもまともな魔法生徒に較べればまだまだサボっていることだけは事実としてある。

「刀子先生、ネギ先生のことと相談が有るのですが、少々御時間よろしいでしょうか？」

「ええ、いいわよ」

葛葉刀子、魔法教師であり実力者として学園で通っている。今回の話は女性、それも実力者であり、若い方が同情しやすく話が通しやすいとケイは考え、それに当てはまる三人のうち一人である刀子を選んだ。もう二人の候補の内、一人は出張中であり会えず、最後の一人であるシャークティーはシスターであり今回のような事案には本来適しているが、若過ぎて発言力が低い。刀子が西洋魔法使いでないという点も都合がよく、変に“立派な魔法使い”を意識していない。“立派な魔法使い”は凄いと子供のころから教えられ、ナギという大英雄と呼ばれる存在が同時代に居たため、多くの西洋魔法使いにその子であるネギへ甘さが有る。その点、魔法世界にも疎い刀子は適任と言えた。

「本日、ネギ先生のクラスは野外でパーティーを行っていたそうなのですが、その場に居合わせた一人の生徒を、魔力の暴走で全裸にするという事案が発生しまして、今後のことを考えれば被害を拡大しないように対策を打つべきだと思います」

「ぜ…全裸？」

「はい。聞くところによると一般の生徒であり、シヨックで部屋に引き籠ったとのこと。ケアの方は僕の知り合いのクラスメイト

に頼みましたが、年頃の生徒にそのようなことをすることを看過すべきではありません」

「そ、そうよね。ちょっと待ってくれる」

刀子はケイの評判を聞いているが、逆に言えば面倒事はしないということであり、態々自分に嘘を吐くメリットもない以上本当のことを言っているのだろう、と考えた。あとで真偽の確認はするとしても、聞いていた内容からは想像できない被害に頭痛がしていた。しかも、魔法教師数人がいる部屋での発言のため、聞き耳を立てていた者には聞こえていたはずであった。

「彼の魔力の暴走で、そんなことが起きるとは聞いていないのだけ  
ど」

これは事実であった。この件に関しては学園長と高畑が主たる情報を握り、他の教師には細かい情報まで伝わってこず、高音と同程度の情報しか刀子は聞いていなかったのだ。

「詳細は省かせていただきますが、件の生徒以外に最低でも四人は下着姿にしています。他にも噂になっていますが、僕は確認できていません」

「それを学園長と高畑先生は知っているの？」

「今回の件はまだ知らないかもしれないですが、他の件は少なくとも報告があがっているはずですよ」

ますます、刀子は頭痛が増した。周囲の魔法教師たち、特に若い女性教師の眼が厳しくなっているであろうことは刀子には容易に想像できた。そして、この場で自分を選んで話しかけてきたケイの意図を正確に察した。

「わかったわ。私の方でやっておくわ」  
「ありがとうございます」

ケイが去った後、静まり返った部屋で一人怒りにうちふるえている  
刀子は自分のロッカーを開け竹刀袋を取り出すと、現在のスケジュー  
ール上の学園長の居場所を正確に思い出し、そちらへと走って行っ  
た。

## 第五話 エヴァ前篇？（後書き）

学園長が嘘を流したのではなく、魔力の暴走から大体風程度という認識で、噂になっていただけです。

## 第六話 エヴァ後篇？

「じじい、どうしたんだ。その怪我は？」

「刀子くんを怒らせてしもうての」

治癒魔法を使ってもよかったが、支障が有るわけではなし、むしろ暫らくはこのままの方が再度襲撃される心配がないだろうと学園長は怪我をそのままにしていた。

竹刀袋 中身は当然真剣だったが 手にした刀子はすぐに学園長室を襲撃した。高畑が出張で居なかったこともありその分もとばかりに、である。治癒魔法が存在する魔法使いたちにとっては怪我に入らない程度ではあったが、暴行を充分にした後、刀子は用件を切り出した。過少な情報を発表していたというより嘘の情報を放置していたこと、女性として許せない行為を看過していたことに対して今後どういった対策を取っていくのか、ということである。

詳細を聞いてみれば、ケイの報告通りで有るものの他の四人のうち三人は不謹慎ながら罰せられるようなことをしているし、残りの一人に關しても許している様子で有ることであった。だからといって刀子は女性として全く許す気はなかったし、その日に起きたことを考えれば怒りが収まることはなかった。

話し合いの結果、春休み間に付焼刃的に修行をおこなっても魔法の制御ができないこと、授業が始まれば時間が無いことから、最良とは言い難いものの魔力を封印する魔法具をネギに貸与することとなった。といつても完全に封印するのではなく半分程度で、それを付けていれば暴走したとしても本当に風程度で、徐々に制御を巧くさせるためにもそれを使用することで刀子も納得した。しかし、“次はないですからね”と言い残していった刀子を前に、惚れ薬の件は

ばれていなくて良かったと学園長は胸をなでおろした。

新学期に魔法具は間に合い、現在ネギはそれを付けている。一応、学園長は何かの時は外すようには言っておいた。

「契約は覚えているかの？」

「ぼーやを殺してはいかんのだろう」

エヴァは億劫そうにそう答えた。エヴァが吸血を始めた半年前から学園側は見て見ぬふりをしていた。エヴァも桜通りに被害者を転がしたりせず、自室まで帰らせるという最低限の工作をしていたこともあるが、それだけでは発覚が遅れただけだった。しかし、それでも学園側は見逃していた、といつても、明確な証拠が存在しないうめ追及もできなかったのだが。

エヴァ自身には気に入くないことであつたが、そもそも学園の魔法教師は概ね新人を除きエヴァに好意的だった。

子供の頃に、ナマハゲ扱いに親が子供に怖がらせるために使う“闇の福音”も、知識層の間では既に悪ではなくなっていた。そもそも六百万ドルの賞金は二百年以上昔の元老院が異種狩りの一環で掛けたもので、当時から緊張関係にあつた帝国に多く住む長命種や獣人などの非人間的なものの代表格としてエヴァにも掛けたものだった。それが二百年も経つと悪逆非道などと噂が先行し、実質を伴わないものとなっていた。もつとも当時のハンターを全て撃退し、百年も経つたところには誰も手を出さないようになったことを考えれば実力は折り紙つきであつた。

十五年前、少なくとも百年は自ら手を出し被害を出した記録が無いこと、また賞金を掛けられた経緯などから封印されたエヴァの賞金を学園長やナギが取り下げさせた。今では少し調べればまほネットでもそのことを知ることができる。もつともその名残として未だにナマハゲ扱いはされているのであるが。

この学園に来て最初に魔法使いが驚くことは、“闇の福音”と実際のエヴァの違いだった。見た目に反した言葉遣いは慣れればどうということではなく、外見同様子供っぽい性格もあり疑問を抱き、調べ事実を知る。その後は十五年もこのようなところに閉じ込められていることへの同情を覚えるのだ。不真面目ではあるが警備員として働いており、接する機会は少なからず得られた。中には登校地獄の呪いを解除しようと頑張るものまで過去には居たほどだ。そのため、気付かれないように吸血する程度であれば見逃されていたというのが今までであった。

「はあ、面倒事が増えたのう」

「……………すまん」

「貸しじゃぞ」

「わかっている」

半年前に結んだ契約は一戦交える代わりにネギを殺さず、またむやみに襲ったりしないなどのものだった。学園長はネギがここに来ることを知った直後、エヴァとその契約を結んだ。ネギが平穩に、とはいわないまでもゲリラ的に襲撃を行われては安心して彼が生活できないし、完全にエヴァを抑える自信は学園長にはなかったため、全てを厳重な監視下での一度戦いで片付ける気であったのだ。最初、ネギに事情を話し、血を提供してもらおう気ではいたが、エヴァがプライドから反対し対戦という形となった。学園長としても実戦経験を早めに踏ませることは肯定的であったため同意した。対戦という形を取る以上、エヴァが勝てば死なない程度に血を吸うが、負ければ別のネギのための対価を払うこととなっていた。

そして、エヴァの対戦のための吸血行為にも目をつぶっていたのだが、ケイトのことで、学園長も放置しておくわけにはいけなくなり、

エヴァとケイの取引でなかったこととなった。学園長とエヴァにとつて不幸中の幸いにも、ケイも千鶴も自分たちの身の安全と＋で納得し、大きな枷とはならなかった。その為、これからのことはさらに細心の注意を持って内々に行わなくてはならなくなった。学園長は一つ上に関東魔法協会さらに上に本国が控える上役を持つ立場であり、上への報告する義務が有った。吸血程度で見逃しているならば良かったものの、ケイのことに關しては彼が騒ぎだせば面倒なことになり、エヴァに対し大きな制約を課す必要が出て来るため、取引しか道はなかった。

頭が痛いことにネギとのことで、近いうちにもう一度報告を誤魔化さなければならなかった。

\*

「失礼します」

先ほどまで居たエヴァは既に帰り、学園長室に入ってきたのは美空とケイだった。“座りなさい”、そう言われ二人はソファに腰掛けた。向かいのソファには学園長・高畑が座っていた。

ケイも美空も呼ばれた理由が判らず頭を捻っていた。普段であれば美空はケイを学園長室まで連行し“御愁傷様つす”と一声掛け去っていく。しかし、二人で呼ばれたのだ。ケイのやる気のなさには学園長は諦めていたし、美空については学園長でなくシャークティーが注意することである。二人の共通点として他に挙げられたのはネギ先生についてだった。ケイが刀子を焚きつけたことを学園長は知っているだろうが、彼を罰したり注意したりできる事柄ではない。

また、美空と一緒に呼ばれる理由にもならない。

その上、学園長とともに態々忙しい高畑まで一緒に居ることが重要

だということを現していた。ケイも美空も内心、高畑の姿を確認した時点で頭を抱えた。面倒事である、と。

「ふむ。よく来てくれた。美空くん、今までネギくんの監視・報告御苦労じゃったの」

「へっ。……もうやらなくていいってことっすか？」

「そうじゃ。ネギくんは正式に教師になったからの」

「わかりました」

いきなりのことで驚いたものの、面倒事が減ることに美空は内心の“やったー！！”という喜びを押し隠し平静を装って返事をした。表情から明白にその感情が読み取ることができたが。

「それでじゃ、美空くん。今後のことなんじゃが、しばらくネギくんと距離を取っておいてくれ」

「距離っすか？」

「うむ。あと、もし何か知り得たことがあれば、誰にも言わずワシが高畑先生に報告してくれ。シスター・シャークティーにも言わんようにな」

美空なりのフィルターを通し理解すると“ネギ先生周辺で面倒事が起きるから見なかったことにしろ”ということだった。美空の心情としても巻き込まれるのは御免のため二つ返事で返した。

「了解っす」

「ふむ、では帰って良いぞ」

「へ？……では学園長、高畑先生お疲れ様です。先輩頑張ってくださいね」

一応一声掛けつつ、喜びを全身に現し美空は急ぎその場を去って行

った。覚悟していた面倒事などなかったのだから。

「ケイクン。君に仕事を任せたいのじゃよ」

強い正義感や高い倫理観、ネギに対する特別な想いなどは縁遠いケイにとつては抵抗なく受け入れられる任務であり、万が一の時以外何もしなくてよく、学園長から個人的に出される報酬も大変魅力的なものであった。万が一の時の危険度は半端ないものの、ケイには自信があつたため二つ返事でその依頼を受けた。

共犯関係であり、千雨の時のように誰かを焚きつけないようにとの口止めの意味も含まれていることをケイは察していた。ケイは“千鶴に見つからないように細心の注意を払ってくださいね”とだけ条件を伝えた。

\*

四月に入り学園長にとって頭の痛い事案が発生した。ネギとエヴァの戦いだった。事前にエヴァから通告が来るはずだったため、前もって場所にも工作し、周囲に被害が及ばず、また見つからない様に準備するつもりだったのだ。にも拘らず、エヴァからの事前通告はなかった。

「エヴァ流石にあれはやり過ぎじゃ」

「チツ、勘付いたか。あの程度、大目にみるところだろ」

学園長はエヴァを呼び出し、桜通りでの新学期早々の吸血事件に釘を刺していた。エヴァの返答に学園長は頭痛が酷くなった。あれだけ派手にやって見つからないと思つたのだらうか、と。大目に

見るどころではなく、一步間違えれば内々に済ますことも無理であったに違いなかったのだ。

「何かやったのかい？」

「ふむ。まず七日にクラスメイトを吸血後、態々痕跡を残しネギくんを誘い出し、翌日今度は彼が来るのを見計らって、別の子を襲い、ネギくんを誘い出す形での戦いを行った。結果はアスナくんの介入でエヴァが撤退したがのう」

高畑は工作に関与していないため、知らなかった。魔法を使えないため、そういった工作に向いていないのだ。

「一般人に手を出した上で、それは……」

「その隠蔽工作にわしがどれだけ苦労したと思つとるんじゃ」  
「……………」

高畑はそれを聞きエヴァを見れば、俯き少々落ち込み気味である。学園長の弁の通りであれば学園として罰を与えなければならぬ。なにせ、つい三カ月前にケイのことで嚴重注意に処したところなのだから。

「エヴァ、一回の戦いは、あれでよかつたんじゃな？」

「良いわけがあるか……」

「しかしのう、エヴァ。一度は一度じゃぞ」

契約では前もってエヴァが申請するはずであったが、遭遇戦となつたためそれをしなかった。エヴァの考えでは、偶然の産物なのだからカウントされず、次回の満月の日にでも再戦を期し、そのときを戦いの日にするつもりだったのだ。

「あれだ。あれは遊びだったから戦いじゃない」

「それは苦しいじゃろう」

「それに神楽坂の介入が有った。あれは反則だろっ」

「“人生は準備不足の連続”なんじゃろう？申請しておったらワシからも介入を防いだじゃろうが、そこで戦闘を始めたのはエヴァじゃ。いきなり始められてはワシらも対応しきれん」

「とにかく、ダメなものはダメだ。あれは一回じゃない!!」

学園長は溜息を吐く。これで解決としておけば、もうネギに危険が無く、そのうえ形の上ではネギの勝利ということとなって学園長からすれば最良の結果となる。しかし、エヴァが納得しなければ意味が無い。強制力を伴うような魔法を用いなかったことが仇となった。

「……………学園長、僕からもお願いします。エヴァにもう一度チャンスを上げてください」

「なんじゃと？」

予想外にも高畑がエヴァに付いたことに学園長は狼狽した。本来二人でエヴァを追い詰め納得させるところであつたにもかかわらず、だ。高畑にすれば同級生でもあり長い間の友人であるエヴァの希望を叶えたかった。ナギが現れないと悟つてからの十余年、エヴァの力になれなかつた高畑は修行を見てもらっていた恩返しの意味もあり助け船を出した。

「学園長はおっしゃいました。ネギくんが実戦を踏むチャンスだつて。確かにこのままエヴァを抑え込めば表面上最良の結果になると思います。けど、彼にも大した経験にもなりませんでしたし、エヴァは消化不良です。彼女は十五年間警備員として貢献してきたじゃないですか。今回のことは大目に見てあげて下さい」

高畑はそう言つと立ち上がり学園長に頭を下げた。それを、エヴァは驚愕の表情で見上げると、決意した表情をした。

「頼む」

エヴァも立ち上がり、頭を下げたのだ。学園長はエヴァが自ら頭を下げたことに面喰ってしまった。十五年の付き合いでどんなことが有っても頭を下げなかったプライドの塊であるエヴァが頭を下げたのだった。

「……………わかった。ただし、何が起きてもこれが最後じゃぞ」

## 第六話 エヴァ後篇？（後書き）

魔法具は、エヴァを除き千雨の後魔力の暴走の犠牲が出てないこと、流石に何かをしなくてはいけないだろうと妄想。

春休みの自主練で普段の暴走が無くなったとも考えたけれども、そんな短期間で納まるなら学園に来る前にどうにかしているはず。

そのためエヴァの修行までは魔法具によって抑えられていたという設定を、この拙作では採用しています。

## 第七話 エヴァ後篇？

「今日の夜だ」

「は？」

「約束の一度のことだ」

突然やってきたエヴァはそう言い放った。不遜な態度は相変わらずであり、あの日頭を下げた殊勝さは欠片も見せていない。夢幻であったのかと疑ってしまうほど、あの時と異なる一步間違えれば高慢であると取られかねない、いつもの態度だった。

今日の夜、エヴァのその言葉の意味することを学園長は正確に察することができた。停電の日という意味では一般人には見つかりがたく良い日だったが、本来エヴァは何もできないはずだった。満月の日から既に数日過ぎ、吸血も満足にできないはずである。夜とはいえ一般人と大して変わらない行動しかできないはずであったのだ。

しかし、そんな日をあえてエヴァが選ぶ理由は二つしか学園長には思いつかなかつた。エヴァの持つ別荘を使うか、結界による魔力抑制に気付いたかの二つだった。前者の別荘は結界の魔力抑制が効きにくくなるため、吸血行為ができるものの、大きな力は震えない。一方後者であれば少々厄介で、万全とは言わないまでもそれに近い魔力を取り戻すことになる。そして、停電の日ということを考えれば後者である可能性が高い。

「いつ知つたんじゃ？」

「……さあな」

吸血行為を行っていたということは、知ったのはつい最近。頭を下

げてから今までの四日以内で有ることは確定だった。このことを知っているのは学園内でも極少数であり、漏らす可能性のある人間はいないと学園長は信じていた。エヴァとネギに対して少々甘い高畑にさえもそのことはまだ伝えていなかった。知ったというより教えられたという可能性が高い。学園内で自分たち以外にそのことを知りそうでかつエヴァに教える人間、残念ながら学園長には一人の生徒しか思い浮かばなかった。

電気によつて巨大な魔法陣を描き常態的に魔力を奪い、その魔力で侵入者に対する探知結界を敷いていた。探知結界も作動しなくなることを考えれば、学園周辺に万が一のために魔法使いを配置しておく必要がある。また面倒事が増えたと学園長は頭を痛めた。

「今回だけじゃぞ」

「解呪できれば次はないがな」

エヴァは捨て台詞のようにそう吐き捨て、学園長室を出ていった。果たして解呪は可能なのか、と何度目かの疑問を学園長は抱いた。吸血行為それ自体は血液を飲んでいるが、正確に言えば血液と魔力を吸っているのだ。だから身体から直接吸わなければその用を為さない。もっとも吸血鬼は血自体を好み嗜好品として飲むこともあるため輸血パックなどが役に立たない訳ではない。しかし、そこから魔力を吸収することはできない。

登校地獄、巨大な魔力を操ったナギがかなりいい加減に掛けたもので、何名か研究をしたがお手上げ状態だった。もちろん、エヴァ自身もその研究を為し、六百年の英知を持ってしても解呪はできなかった。本来しつかり通えば自動的に解呪されるものであったが十五年経った今でもエヴァは通い続けている。

それに小さな光明をエヴァが見出したのは半年前。ネギがこの学園に来ると聞き、血縁者の、それも膨大な魔力を秘めた血を利用すれば解呪できるのではないかというものだった。エヴァは密かに事を進める気でいたが、数回の吸血行動をした後、学園長に呼び出され取引を持ちかけられた。殺さないことと一度きりということ。前者に関しては女子供を殺さないことを信条にしてきたエヴァには当然のことであった。しかし、後者に関しては大いに不本意なものであった。けれども高畑始め、何人もの魔法教師の眼を掻い潜り、事を為す自信は魔力の抑制されたエヴァには不可能に近かった。アスナのために一度は希望を見失いかけたものの、高畑のおかげで希望を繋げ、結界の情報のお陰で大きくなった。チャンスは一度、エヴァは胸に秘め夜への準備に取り掛かる。

\*

停電の最中の巨大魔力の顕在、本来であれば魔法関係者が直ぐにやっつきそうなものだが、誰も来ない。関係者の多くは今回の事態を知らないまま外縁部で侵入者の警戒を行っている。流石にそこまで距離があれば巨大な魔力であっても気付くものはいないはずである。停電の暗闇にまぎれ女子寮近くで二人の男が立っていた。二人はともにその女子寮の大浴場を覗いていたのだ。

「高畑先生、明石教授の娘さんにまで手を出していますよ」

“後で学園長を脅す材料になりそうですね”と言外に含ませている言葉。明石も高畑同様、上層部に位置する魔法先生だった。

「口止めされていただろ？」

「明確にはされていませんでしたよ。それに“正義”のための内部告発というのにも必要な時があります」

“まあ、言ったということはする気が無いということですから安心してください”とケイは言葉を続けた。どこまで信じられる言葉なのか、何故彼が相方に選ばれたのか、と高畑はまた頭痛がしてきた。ケイと高畑の二人は現在任務中であり、決して女子寮の風呂場をただ覗きに来たわけではなかった。その場所にメイド服のクラスメイトを侍らして悦に入っているエヴァがいるためである。

「冗談はさておき、一般人四名を操っていますが、良いのですか？」  
「良いわけではない」

高畑は間髪いれずに言いきった。文句は言うものの、誇り高いエヴァは契約を遵守する。そのことを知っている高畑は涙をのんで、今回のことは眼を瞑ることとした。こんなことあってはならないが、結界のことを知られた以上、再度やられても困る。いくら“何が起きても最後”とは言っていたものの高畑自身の参戦は許されるわけがない。その点、隣にいるケイ程度であれば許されそうなものであるが、彼にその気が全くないことを高畑は知っている。

「状況が動きましたね。ネギ先生が来られ、四人を無傷で制圧。状況を利用し、巧くやっていますね」

「……そうだね」

完全な傍観者に近いケイと異なり、高畑は気が気でならなかった。当事者二人、エヴァとネギともに親しい仲であるし、操られていた四人は元担任として教鞭を取った生徒たちだった。もちろんエヴァの従者である茶々丸とも親しい。この状況で手が出せないというのは高畑にとって苦しいものだった。ただ一つ、ネギが魔力抑制の魔

法具を外していることだけはしっかりと確認していた。

一方、ただの傍観者と化しているケイは、四人の回収を美空に頼むため連絡をし、しっかりと働いていた。今回のケイへの依頼は万が一の時にネギを逃がすことである。エヴァが勝利した時はすぐにそばに行き高畑の監視下で血液のやり取りをすることが決まっていた。その時に致死量に至りそうなきときは高畑が止める予定であった。もちろん、戦闘中にネギが死ぬ可能性が高いと高畑が判断すれば、彼が止めに入る。どちらにしろ、高畑がエヴァを止めている間にネギを逃がすことがケイの任務だった。

本来、持って逃げるだけであれば美空が最も適任であった。彼女のアーティファクトを持ってすれば神足で逃げることができる。しかし、エヴァの従者である茶々丸やチャチャゼロに襲われた場合に安全圏まで逃げられない可能性があった。

その点、ケイはそういう状況でも逃げられると学園長は確信している。それはケイのアーティファクト『臆病者の証』こんやういによってではない。ケイのアーティファクトは、一日一度自分もしくは自分以下の魔力量の者を無対価・無詠唱で強制的に転移させるものだ。ケイ独自の転移に基づいた能力のため、転移先に前もってポイント作成が必要であり、また距離の制限も大きい。今回のケースではいくら魔力を消費したからといってケイ以下の魔力量になるとは考えられない。それほどネギとケイの魔力量には大きな隔たりがあった。そういった面でアーティファクトではなく、ケイの腕を学園長が信用していただけだった。

「高畑先生、一般人っぽい娘が来ましたけど、どうしますか？」

学園の外へとつながる大橋へと、逃げ辿りついたネギとエヴァ・茶々丸を追い、ケイと高畑もいざというときに間に合うところに場所

を移した。高畑が一瞬たりとも見逃さないようにと戦いを見入っていたのと異なり、ケイは周囲の警戒を怠っていなかった。“一般人っぽい”、アスナは魔法のことを知っているものの、あくまで従者でもなく魔法使いでもなく、千鶴のように学園の指導も受けていないため関係者ともそうでないともいえ、ケイはあえてそういった表現を使った。

高畑がケイの見ていた方向に居るアスナをすぐに見つけた。妹のように思ってきたアスナをこの先の危険な戦いに巻き込むべきか迷いが生じる。アスナがネギとはまた違った意味で狙われる存在であることを高畑は重々承知していた。しかし、その危険性もかつてとは較べものにならないほど低く、またネギよりも低いと高畑は考えている。だからこそ、巻き込む必要はないと思う。しかし、魔法の世界についてネギを通し知り、おそらくここに危険が有ることを知りながら向かって行こうとしているアスナを止めたくなかった。

「……………彼女は関係者だから止めなくて良い」

「そうですか」

前々から覚悟はしていたものの、最後の決断に高畑は少なからず時間を要した。その間に橋に罠を仕掛けていたネギが、エヴァと茶々丸を捕縛結界で捕獲するも解除され、彼の杖を奪い取られ追い詰められていた。一瞬、捕縛結界で勝負が決まったとケイは感心したものの、ネギの甘さからくるミスに昔の自分を思い出した。

母から逃れる一環として、何度かネギが仕掛けた比ではない巨大な捕縛結界を仕掛けたこともあったが、掛るもののその強大な魔力で無理やり破るといふ荒業に何度となく、泣かされたものだった。徐々に強い捕縛結界を覚えたが、どんなものも一瞬で破られたのは悪夢だった。ネギが使用した捕縛結界も完全ではないとはいえ、エヴ

アも茶々丸の助けなしでは、破るためには最低でも十秒以上掛って  
いただろうから、その間無防備な彼女を一方的に攻撃できるネギの  
勝ちという考えも少々の理があるとケイは考えた。もっとも破られ  
た以上無意味な考えではあったが。

「間にあいましたね」

「……………うん、そうだね」

ネギは追い詰められ、既に吸血を行う場面になった時、アスナがや  
つてきた。魔法を覚えてもいないであろう、アスナにこの場面から  
の逆転は難しいとケイは考えるも、驚愕とともにその考えはすぐに  
改めざるを得なかった。

ほとんど一般人に過ぎないアスナの蹴りがエヴァに決まったのだ。

ケイには驚愕、それ以外に表すすべを持たない行動だった。魔法使  
いは魔力の高低により出力は変わるものの、戦闘時であれば、よほ  
どのが無い限り常時魔法障壁を展開している。さらに蹴られる  
前にエヴァは構えていたことから、障壁の増幅もしくは反撃の準備  
をしていたと考えるのが妥当であり、それでも障壁を越えたことか  
らよほどの威力を持って障壁を打ち破ったか、それとも……………、興  
味深い逸材であるとケイは思った。

ケイは気付かなかったものの、高畑はその時驚愕ではなくもっと複  
雑な表情を一瞬浮かべていた。それは多分に悲しみを含んだもので  
あった。

「どうやったんですかね」

「……………」

ケイの問いかけに高畑は無表情に沈黙を貫いた。眼の前の戦闘に気  
を取られ聞こえていなかったのかもしれない。ケイとしても高畑が  
応えてくれるとは考えておらず、どちらかといえば独り言に近い言

葉であつた。

ケイにはとても真似ができない、高魔力による高出力魔法の打ち合いが眼の前で展開されていた。ネギとエヴァ、ともに高魔力の持ち主であるものの後者の方が魔力も経験も上であつた。そのことから打ち合いとなればエヴァの勝利は眼に見えていた。

自分であればエヴァとどう戦つたか、ふとケイの頭をよぎつた。自分の人間性・戦い方が知られていなければ、大量の罫を仕掛けおびき寄せる。もちろん一般的に吸血鬼の弱点とされるニンニク他のものの大量に使つてのものだ。それでもどうにかなるかはわからない。エヴァもケイの知る化け物と同等の力は持つていゝるであらうし、その化け物である母からは一度として逃げ切ることはできなかつた。既に“魔王からは逃れられない”といつたところだと諦めの境地に達している。どちらにしるエヴァとは戦闘回避以外の選択肢はケイにはなかつた。

「ほう、あれが悪名高い魔力の暴走ですか」

「ははは……」

魔力の打ち合い、その最中ネギによる魔力の暴走による武装解除がエヴァへと決まり、彼女は裸にされた。もつともエヴァが裸にされた程度では決着というわけではなく、十二分に魔力を残すエヴァに対し、杖を折つたネギでは戦いにならない。エヴァの勝利、ケイはそう結論付けた。隣で乾いた笑い声を上げている高畑もその考えに同意するだろう、と。

が、突然暗闇に光が灯る。意味をすぐに理解した高畑はすぐに移動する構えとなり、数瞬遅れてケイも移動しようと思つた。しかし、眼の前で繰り広げられるネギによるエヴァの救助に高畑は動きを止め、ケイに対しても止めさせた。

「さて、僕たちの仕事も終わりだ。ケイクンお疲れ様」

高畑のその言葉を合図に二人は気付かれぬようにその場を後にした。

## 第八話 修学旅行？

「あ、ケイさん。こっち、こっち」

「夏美ちゃん、そんな大きな声を上げなくても大丈夫よ」

麻帆良の駅前にて、夏美が大きく手を振ってケイを呼んだ。待ち合わせには少々早く来たものの、夏美と千鶴の二人はもっと早く来ていた様子でケイもその呼び声につられ小走り気味に彼女たちの元へと向かった。

エヴァとネギとの決着は停電の復旧という形で有耶無耶に終わった。学園長が手をまわしたことなく、単純に速く作業が終わったからさっさと復旧しただけのことであった。毎年大体予定が十分程度は前後するものであったし、麻帆良に住んでいるものからすれば当たり前前のことだった。ただ、住民もまたエヴァや茶々丸も数年来の経験で知ってはいるはずではあるものの普段そこまで気に掛けたことはなく、エヴァは戦闘に夢中になっていたことで、茶々丸は未だ機械的であったため予定通りの時間に終わると思いついていたにすぎない。

そのことを理解していたエヴァは、夜に学園長室に怒鳴りこんだものの、何故延長するなど気をきかせなかったといった文句の域を出ないもので、ネギとの一回の戦いであると認められた。戦績は引き分けであり、血を貰えない代わりにネギ勝利時に用意すべきであった対価を出す必要がない、ということに学園長との話し合いで決まったが、引き分けですらエヴァにとっては屈辱的なものであったことは明白であった。もつとも、“戦い”以外でやるのは構わないのだから捨て台詞を吐いて出ていったが。

「今日は荷物持ちとして頑張ってくださいね」

「うん、頑張つてね。ケイさん」

修学旅行を二日後に控え、千鶴と夏美の荷物持ちとしてケイは招集された。態々、麻帆良の外に出て買い物するため、ナンパ避けの意味もあった。千鶴と夏美、そして今はいないあやかの三人は同室のため、他のクラスメイトよりも共に行動することが多かったが、今回はあやかだけクラブ活動があつたために既に買い物を終えていた。エヴァとネギの騒動において、千鶴は蚊帳の外に置かれていた。桜通りでクラスメイトが寝ていて朝に発見されたと聞けば嫌でもエヴァアとのことを思い出す。当然、その後のネギの気落ちのさまやエヴァアとのやり取り、態々追い掛けてまで確認したのではなかったものの、教室だけでのエヴァとネギの様子を観察すればおかしなことに当然気付いた。“ネギ先生を元気づける会”などという大浴場で開催された文字通りの会にも参加することなくケイに連絡を取った。ケイからはのらりくらりと誤魔化されたものの、身の危険はないはずだとの言を信じ、しばらく様子を見ることとした。ネギは別の要因によつたものであつたが元氣になつたことで千鶴も一応の安心を得ていた。

夏美が共にいるもののデートという形で会うのは二週間ぶりとなり、毎日のように電話していたし、たまにごく短時間だけ会う機会はあるものの、ネギとエヴァの件を問い詰めることはできなかった。そして、今日も夏美がいるためそういつた話はできないと千鶴は考えていた。

「遅くなってごめんな」

「ちゃんと時間には間に合っているわよ」

「そうだよ、ケイさん。それじゃあ、原宿に行きましょう」

\*

あちこち歩き回り、買い物を終え、一段落。千鶴と夏美の必要なものは買いそろえたため今はウィンドウショッピングをしていた。ケイが両手に荷物を持っていることだけは先ほどまでとは異なる。ケイも日ごろ鍛えてはいるため、買い物の荷物程度であれば苦も無く二人とともにウィンドウショッピングを楽しんでいた。

「ケイさん。それなんかいいんじゃない？……あれ？」

店頭で夏美がケイに服を薦めているとき、ちよつと距離が有るもののネギを見つけた。

「ちづ姉、あれってネギくんとこのかじゃない？」

「あら本当ね」

近衛木乃香、二人のクラスメイトでネギとアスナと同室、学園長の孫娘でもある。ケイはその程度の知識しか持ち合わせていなかった。

「……ねえ、あれってチア部の三人だよな？」

「そうね。どうしてあんなことをしているのかしら」

このかとネギ、その二人の行く手で次々とチアリーディング部の三人組が妨害行為を繰り返すことをしていた。ずっと見ている側としてはかなり奇異なものに映っていた。一応、変装らしきことをしていたが、千鶴と夏美からみればバレバレでありその行動の意味も図りかねていた。

「ちよつと見に行ってみようよ、ちづ姉、ケイさん」

「そうね。行ってみましょう」

このかとネギを追うチア部三人、さらにそれを追う千鶴と夏美。傍目から見ればおかしなものであり、数珠繋ぎに思えてきたケイは、次に自分たちについてくるもの現れないことを祈りつつ千鶴と夏美について行った。

「あれ、このかがネギくんを膝枕してる」

「あら、大胆ね」

このかとネギがデートしていると勘違いしたチア部三人によるちよつとした騒動であったものの、アスナとあやかが参加し結局アスナの誕生日を祝うために皆でカラオケに行こうと盛り上がりだした。

「……………ちづ姉、私あつちに参加するから後よろしく！」

「わかったわ。あやかにあまり遅くならない様に言っておいてね」  
「わかった」

夏美が少々気を利かせ、ネギたち側に参加することで千鶴とケイを二人きりにすることにした。もっとも荷物のはほとんどはケイが持っているし、夏美としてもあやかのいるネギたち側に参加するための口実でもあった。

「夏美ちゃんが気を利かせてくれたわね」

「そうだな」

夏美がネギたちと合流するのを見届けた後、二人は来た道を引き返した。

「久しぶりね。こうやって歩くの」

「ああ、そうだな」

「折角の時間だし楽しみたいのは山々なんだけど、その前に解決しなきゃいけないことがあるわ」

「なんだよ？」

「この前電話で言ったでしょう。ネギ先生とエヴァちゃんの件よ」

「あれか」

「結局何があつたか聞いてないのだけど」

「内容は話せない。少々複雑なものでね。言えることは大丈夫だったってことだな」

「だった、ね。わかったわ。それじゃあ、それじゃあその話はこれまでにして」

\*

「ケイ、心当たりある？」

「有り過ぎて困るけど、二人で呼ばれるって意味ではないな」

あの後、取りとめのない話をしつつ、夕食をともにし、寮まで千鶴を送って別れた。二日後である今朝には既に新幹線に乗り千鶴たちは修学旅行で京都へと向かっているはずである。千鶴が帰ってくるのは四日後であり、その翌日には会う約束をし、土産話を楽しみにしていた。

問題は今日、昼になるうかという時間に担任の教師によって学園長室へと呼びだされたことであった。生徒としては自称模範的である自分が急ぎで呼び出される理由が無く、ケイは首を捻っていたのだ。学園長室前に着くと、そこには高音もおり、魔法関係であることは確定したものの特にこれといった原因もケイには思いつかなかった。それは高音も同様であり困惑の表情を浮かべていた。

「帰っていいか？」

「ダメに決まっているじゃない」

「だろうな」

はあ、と隠しむせず溜息を吐くとケイはドアをノックし、学園長室へと二人で入った。

\*

「ちょっと何をおっしゃられているか、わからないのですが」

中に入り席に着いたところで、学園長の説明が有った後、ケイが放った第一声がこれだった。ケイのその言葉は隣の高音も同意とばかりに頷いていた。

「じゃから、ちょっとした小粋なジョークが現実になってしまったんじゃない」

学園長の話は簡単なものだった。婿である関西呪術会会長の近衛詠春はネギの父と盟友であり、その子ネギと会いたいと申し出てきたのだ。修学旅行に丁度そこに向かうため、学園長としても“親書”を渡す任務だと説明しネギを向かわせた。その“親書”は全く無意味なもので、会いに行く口実を作るためだけに用意したものであった。

その際に、関西呪術協会から妨害があるかもなどと、ちょっとした緊張感を持たせるための冗談として述べたのだが、本当に妨害が起きてしまったという話だった。

ケイも高音も教養として関西呪術協会と関東魔法協会の歴史について知っていたが、現在手を出してくる理由については心当たりがなかったのだ。その上、意味のない“親書”を狙うなど冗談としか思えず、学園長の言葉を疑ったのも仕方ないと言えた。

「妨害というのは具体的にはどういったものだったのですか？」

「新幹線内で大量のカエルが出たそうじゃ。本物ではないし、符術であることは確認済みじゃ」

「そのようなことをする者に心当たりはありませんか？」

「ふむ。心当たりといえば、先日西の長と電話した時に愚痴っておったが、下の者の中に過激派がおりとかどうとか。東と対立し、西の力を拡大しようという輩じゃが、極少数だとか言っておったのう。それくらいじゃな」

“ちなみに、親書の中身にもそのことを書いておいた。なにせ書くことが無かったからのう”などと続けたが、ケイも高音も聞いていなかった。

「そうですか。大変ためになるお話でしたが、僕は授業があるため失礼押させていただきます」

「待つんじゃ」

何故呼ばれたか理解できたため、ケイはいち早く逃げようとしたが間髪いれず学園長に引きとめられた。

「つまり、今から二人で京都に向かい、次に妨害が無いように対処しろということですか？」

「そういうことじゃの」

内心ケイは頭を抱えていた。カエル程度の低レベルな嫌がらせ、気

にしなければいいことであり、放置すべきことである、と。そして、同時にそのレベルの嫌がらせであれば術者のレベルも知れ、自分たちが必要であるのか、と。

「終わるまで公欠は当然として、……………今週いっぱい公欠というのはどうでしょうか？」

「そうね。ついでに京都観光というのは良いわね。愛衣もついでにどうですか、学園長？」

「ふうむ。公欠は良いのじゃが、佐倉君は中学生じゃろ？危険があるとは思わんが外に出すわけにはいかんのう」

「……………それは残念ですわ」

「彼らと同じ宿は満室で無理じゃろうから近くの宿を押さえておく。詳しくは現地で瀬流彦くんに聞いてくれ」

瀬流彦、比較的若い魔法教師であり、今回京都に行っている関係者の一人だった。瀬流彦を責任者にし、高校生に過ぎないケイと高音を派遣するという時点で、自体がどの程度の深刻度かは知れた。まだ若い瀬流彦に経験を積ませること、子供にしか過ぎない二人とすることは全く深刻ではないということだった。そのことをケイも高音も察しており、京都観光の方を重要視するように頭を切り替えていた。当然、愛衣の名前が出たのも仲の良い後輩兼パートナーにも楽しみを分けてあげようという高音らしい配慮であった。

あちらに着けば修学旅行生の周囲を警戒するように魔法使いであることを誇示しつつ警戒するだけで止むだろうというのが二人の共通した見解だったのだ。

\*

京都駅、そこに着いた時には、高音の手には麻帆良学園から駅の間で購入した旅行ガイドが存在し、良く見れば何ページかの角を曲げ、観光するところをある程度決めていた。時間は既に夕方、予定通りに行動していれば、ネギたちはそろそろ旅館に着く時刻だった。ケイは電話を取り出し、今回の責任者である瀬流彦へと電話を掛けた。

「もしもし、今京都に到着しました」

「来てくれたか。残念ながら、またやられたよ」

「またですか？」

「音羽の滝にお酒を混入されて何人も酔いつぶれている。ただ、前回も今回もピンポイントにネギ先生のクラスを狙っているから親書狙いであることは確実だと思うんだ。手口が似通っているから今のところ同一の犯人だと思う」

「それで、これからどうしましょうか？」

「そうだね。流石に旅館内に君たちを招き入れるわけにもいかないし、明日の朝に奈良に現地集合といこうか。バス内は今のところ大丈夫みたいだから」

「わかりました。京都観光でもして明日に備えます」

瀬流彦との電話を終え、ふと一つの案が思い浮かんだ。

「高音、思ったんだけど親書は内容がない、どうでも良いものなのだから渡してしまえばいいのじゃないか？」

「へ？」

「それで他の理由でネギ先生を西の長に合わせれば良いと思うんだよ」

「それはどうかしら。ニセモノであると思うかもしれないし、どうなるかわからないわ。でも、後で瀬流彦先生に相談しておきましょう。……さて、今日はもう終わりで良いのよね」

「ええ。明日の朝に奈良に先回り必要があるから、あまり遅くまで

は無理だけどね」

「大丈夫よ。私に任せなさい」

高音はキラキラした眼でそういい、早速行く場所へとタクシーを止め向かうのだった。高音は本来浮かれることの少ない冷静な人間であるはずだったが、外国育ちで、変に日本への信仰を持っており、特に古都京都は魅力的な場所に思っていた。残念ながら機会に恵まれず、また一人で行くという気も起きなかったため今まで来たことはなかったものの、今回のチャンスに思いっきり楽しむ気でいたのだ。

## 第八話 修学旅行？（後書き）

原作にてネギに親書を渡す際に学園長は魔法先生一人といった時点で嘘を吐いており、全部うそで良いじゃないか、と。

図書館島であんなことするほどはっちゃんけた人ですし、嘘であれば筆者的にも解釈しやすいのでそうさせていただきました。

親書が千草周辺のなんらかの不利な証拠ということも考えましたが、そうすると知っていたいながら大した護衛を付けなかったことに対して解釈できなかつたため、学園長は軽いものと考えており、狙われる可能性はゼロに近いと見ているということでもこのようにしました。

学園長が千草たちを釣り、詠春の反対派を一掃するために危険を知った上で学生を送り出したとするのも自分なりに納得がいきますが、この作品では基本的に善人という考えで動いていますので採用しませんでした。

## 第九話 修学旅行？

本来、真面目である側が浮かれまくり、不真面目である者はそれを止めるわけがなかった。旅館のある嵯峨嵐山駅まで行くため漸く觀光を辞め、京都駅へと戻ってきたときには既に終電を過ぎていた。

「少々浮かれてしまいましたわ。早く旅館に参りましょう」

少々ではなかったとケイは、高音の言葉に内心突っ込んだものの、早く休むことに異存はなく同意を口にしようとした。しかし、駅の違和感に気が付いた。

「……………気配がおかしくないか？」

「……………そんなことないと思いますけど」

ケイはあたりを見回し一つの柱に呪符が張られていることに気付いた。魔法使いは本来こういったものを無意識に遮断するため、効果の薄いものには気付きにくい。終電を終えている時間であったため、人がいないことにも違和感を覚えず、見落とすところであった。

「人払いの呪符だな」

「何故このようなものを。処分しましょう」

「いや、ダメだ」

人払いの呪符があるということはここで何か行われる予定であり、現在の状況から鑑みればネギ関連である可能性が有るとも考えられた。また、関係なくとも態々一般人を退避させている以上何らかの危険な行為が行われる可能性が高くむやみに剥がすわけにはいかなかった。

「瀬流彦先生、少しよろしいですか」  
「もしもし、ケイクンどうしたんだい？」

情報が足りなかったため、ケイは瀬流彦に電話をした。旅館の方で何か起きていれば犯人の関連で呪符を張っていたのかもしれないから。もつとも、全く普通の声で返答をした瀬流彦に何も起きていないことはすぐに悟ることができた。

「実は今京都駅に居るのですが、そこで人払いの呪符を発見しました。今回の件になにか関連はないのかと思いついて電話しました」  
「京都駅に人払いの呪符かい？……どうだろうね。こっちは何も起きてないし、とりあえず周囲の様子を見て暫らく待ってみてくれ」  
「了解しました」

呪符の存在を無視するわけにはいかなかった。もし何かあった時に責任を取りたくなかったがために電話したが、瀬流彦からの依頼は少々面倒だった。もつともどちらにしろ、漸く觀光の興奮も覚め、冷静さを取り戻しつつある隣の高音がいることを踏まえれば瀬流彦に言われるまでもなく、同様のことをせざるを得なかった。

「さてと、高音。まずどこから行くのか」  
「そうね。周辺を見渡すためにも上から調べましょうか」

\*

自分は本当に運が無い、ケイは今日のこの日、先ほどの行動を後悔していた。何故地下やホームを先に搜索せずに屋上に来てしまった

のか、もつといえは何故人払いの呪符に気付いてしまったのか、だった。何枚かの呪符を見つけてつ屋上へと長い階段を登って行くと隠す気もない気配が二つ感じられた。その時点でおそらく敵であるとケイの勘が囁いていたが、現時点ではただ居合わせただけという可能性や呪符を仕掛けたが全くの別件という可能性も否定できなかった。だからこそ、こちらも堂々と正面から向かう必要があった。少なくとも高音には堂々と行くしか選択肢は存在しなかった。

屋上に着き、二人の姿を確認したケイは頭痛を覚える。一人はネギ程度の年齢の男の子、もう一人はその子よりかは年上であろう女の子の剣士だった。二人の眼は既にやる気があることを示しており、二人ともがバトルジャンキーの素質を持つことを経験からケイは判断した。かつ、女剣士の方が少々ヤバい印象を与えられた。

「くんばんは」

「ウチ今暇やったんよ」

その一言ともに一足飛びに襲いかかってきた女剣士の剣を避け一定の距離を保つ。

「う〜ん。避けられてしもうた〜」

「姉ちゃん。いきなりはやり過ぎやと思うぞ」

男の子の方からも止める声が聞こえず、戦闘は避けられないものケイは判断した。内心溜息を吐き、ケイは高音に話しかけた。

「残念ながら戦闘の回避は無理だな」

「そうね」

「僕のお勧めとしては、あなたが男の子の方を相手にして僕がこちらの女剣士さんを相手にするってどうだ？あなたの好みにぴったり

ですし」

「そうね。とつてもいい提案ね」

高音は口ではそう言ったが、もちろん好みのタイプでもなんでもなかった。京都で剣士とくれば神鳴流とみて良かったため、魔を断つ剣を使う剣士と高音の使う影は非常に相性が悪かったのだ。

「ちょっと待ってーや。俺は女を殴るんは趣味とちゃうねん。だからそつちの兄ちゃんとやらせてえや」

「おやおや、困りましたね。女剣士さんはどうですか？暇を潰す遊びの時間なので、男女ペアの方が踊り甲斐が有ると思うのですが」

「そうどすねー。小太郎はんには悪いけどお姉さんの方より、お兄さんの方が面白そうやし、ウチもお兄さんの案に賛成しときますわ。それじゃあ、始めましょうか」

「その前にお名前だけでも教えていただきますか？僕はレイと申します」

「月詠、いいますわ」

ケイはさらつと偽名を名乗り、不満の声を無視した月詠は名乗り終わったと同時にケイへと突進し切りつけた。余裕を持ってかわすも月詠はそれを予測していたかのように追う。ただ逃げ、避けるケイに対し月詠は一方的に攻撃する。ケイが武器を携帯していないことから、切り合いといかず、あたかも月詠による狩りの様であった。もっとも月詠の大刀と小刀の二刀による攻撃は全く当たらなかったが。

「いい加減……当たってくれませんか……か！！」

声とともに壁際に追い詰めたケイに対し大刀を振りかぶり斬りつけ

るも読んでいたかのようにケイは懐に入り、月詠の腹を渾身の力で殴りつける。逆側の壁まで飛ばされるも月詠の負傷は軽度のものであった。月詠は避けられなかったものの、寸前で後ろに跳びダメージを軽減していた。

「うーん。なんやウチの動きが読まれとるきがしますな」

「そんなことはないですよ。それより月詠さんすごくお強いですね」  
「……………そっか」。神鳴流の型を綺麗になぞったんがいけなかつたんやな」

ケイの話を全く聞かず、自身の問いに自身で応えた月詠はそれが正解であると確信した。事実ケイは、刀子と刹那の神鳴流コンビの修行を何度となく見学し体験していたため動きが読めていた。それだけではなく化け物である母の良く言えて虐待であつた修行の成果であつたともいえる。ケイはその化け物から逃げるため、努力を重ねてきたため現在のスタイルが出来上がっていた。

「それやったらこれでどうやるか」

一気に動きが変化し、それまでの洗練された動きから荒々しい動きへと変化した。ケイにとってはどちらも大した違いなく、避けるということに特化していただけに経験によりなんとなく先読みし動くことができていた。そのため動きを変えただけではケイを捕えることは月詠にはできなかった。

しかし、そう広くない空間で二組、四人が戦っている場所で、偶然高音の影法師が殴り飛ばした小太郎がケイの元へと飛ばされてきた。高音自身が意図したことではなく、小太郎の鋭い攻撃に余裕がなかったためやむを得ず、飛ばす方向まで確認できなかったのだ。また、思っていたより威力が出たことも、小太郎がケイの近くまで飛ばさ

れた要因だった。

予想外に小太郎が飛ばされてきたことで、屋上の端にいたケイは下がるわけにはいかず、そちらを殴り返すことで、自身と小太郎の落下を防いだ。ケイも少々月詠のために視界が狭まっており気付くのが遅れ、避けるより先に殴ってしまったのだ。

その無駄な動きを月詠が逃すはずもなく、大刀で渾身の突きを心臓めがけて放った。ケイは寸前で何とかずらし、脇を刺されることとなったが、小刀が来る前に相手の腕と胸を掴み外へと投げ飛ばした。

「あ〜れ〜」

真つ逆さまに月詠は落ちていった。緊張感のないその声とは異なりしつかりと大刀を抜き、着地もすんなりと決まった。月詠が戻ってくる前にケイは自身に治癒魔法を掛けようとしつつ、彼女を見ていたが、そのまま屋根を利用し遙か高い屋上まで登ってくるのかと思いきや建物の中に侵入して行った。ケイはそのことで漸く、下で起きている喧騒に気付く。それは月詠達の待ち人が来たということであった。親書関連である可能性も否定できず、応援に行きたいところであったが自分の負傷具合に代案を使うこととした。

「戒めの風矢」

こちらの状態に気付かず、夢中で戦っている小太郎を背後から一撃した。

「ちょ、なんやねん!？」

「眠りの霧」

不満の声を上げる小太郎を高音がすかさず眠らせた。

「大丈夫ですの？」

「見張りと自分の治癒をしておくので、下で何か起きているので見て来てくれる？」

「それがいいわね」

高音もその言葉で階下の喧騒に気付き、走って階段へと向かって行った。

「治癒」

\*

せつかくの捕虜であった小太郎にケイは眼の前で逃げられてしまった。

“おぼえてなはれー” その声が近くで聞こえ、見るとバルーンに空飛ぶサルに乗る全裸の女がいた。直後、同乗していたのであるう月詠が舞いおり、小太郎を回収していった。負傷中であり高音も階下に向かったまま戻っていなかったため手出しできず見送ることとなった。

「捕虜のこと悪かった。高音さん」

「いえ、気にしないで。仕方ないですわ」

階下を見に行つた高音は、ネギ・アスナ・刹那・このかしかいないことを確認した後、急ぎ屋上へと戻ってきた。下に居なくなつたのだから今度は上に来ているかもしれないと考えたのだ。結果的にそれは正解であつたし、確認も一瞬顔を出した程度だつたため高音たちの存在はネギたちに気付かれることはなかった。

高音は瀬流彦に連絡したが、それは好ましいものではなかった。先の電話の後にネギたちが旅館内に居ないと気付いたものの、状況から判断するに電話よりも先にネギたちが外に出ていたということだったからだ。つまり、瀬流彦たち旅館に居た魔法関係者は、全員出しぬかれた上にそれを追いかけていったネギたちのことにも気付いていなかったのだ。

現在、タクシーで帰ったネギたちを万が一のため飛んで追いつけ、旅館に入った事を確認後、旅館内部の警備体制を見直した瀬流彦と三人での会談中だった。

「つまり、彼らの目的は近衛さんである可能性が高いということかい？」

「はつきりとはわかりませんが、ネギ先生たちに聞いていただけませんか？」

「うん。ちょっと学園長に聞いてみるよ」

“学園長に聞く” 必要があるのは“立派な魔法使い”の修行制度の問題であった。修行の内容はともかくとして基本的には、魔法使いの力を借りず、一般人の中で生活をするというのが原則である。過度に魔法使いの力を借りないように最初の数力月は魔法使いの存在を教えないのが一般的であった。他の修行の場所と異なり、この学園は魔法関係者の数が多いため特に厳しく言い渡されていたのだ。ネギが十歳ということから特例で何人か魔法関係者を付けるべきだという話も出たが、修業後には“立派な魔法使い”となりこちらの世界で一般人に気付かれないように様々なことを為さなければならぬ以上、規定通りに行くこととなった。しかし、抜け道も存在しており、その為の美空であったのだが、残念ながら役に立たなかった。

「それはそちらで確認していただくとして、敵戦力は最低でも三人。月詠という女剣士に小太郎という子供、そして呪符使いである眼鏡の女ですね。追加にいる可能性もありますが、あそこで待ち伏せするつもりであった以上、最大戦力である可能性の方が高いと思います」

「そうかしら？他の場所でも待ち伏せしていた可能性もあるわよ」  
「でも、あの場所で何かあれば他に知らせる手段が有ったはずでしょう？援軍に來なかつたということは居ない可能性が高いということです。もちろん断定はできませんが。そこでこちらにも援軍を呼んでほしいのです」

「援軍かい。たしかに必要なだね。月詠って子がかかなり強いんだろ？」  
「彼女を倒せるレベルの人を最低一人と佐倉さんと呼んでください」  
「愛衣を？どうしてよ？」

「彼女の魔法はこういつたときに使えるからですよ」

佐倉愛衣、彼女は魔法使いの強さとしては低いものであり、麻帆良学園内の生徒では有数の使い手である高音とは較べものにならない。歳の違いはあるもののランクの見劣りは大きい。二人が出会ったのは麻帆良学園内であり、その時には高音クラスの使い手は他にもおり前衛である高音に合うレベルの後衛の魔法使いも複数人いた。しかし、そういった事情にもかかわらず、後衛としてはレベルの低い愛衣と高音が組んだのは、一部学園の意思が介在していた。あくまで一部であり二人の意思が無碍にされたわけではなかつたが。そもそも従者と魔法使い、従者が魔法使いを守るという本来の役割を二人は果たすことができない。魔法使いが従者を守る、それが二人の関係性であり、またそれこそが二人の組んだ理由だつた。

佐倉愛衣は希少能力の持ち主だつたのだ。ネギよりは劣るものの愛衣の希少価値は高い。愛衣は探査魔法の使い手なのだ。まだ、未熟であつたものの、学園の魔法使いの中では一、二を争う感知能力が

あり、将来を囑望されていた。探查魔法、これは生まれついでの特性に左右され、習得難易度がかなり高い。全魔法使いの中でも千人にも満たない。一方、系統は生まれによるものの、攻撃魔法はほぼ誰にでも使えた。

愛衣も身を守るため攻撃魔法始め他の魔法も学んでいるものの、まだまだ未熟であり、少しでも身を守る助けとするため、高音を主とする仮契約を結びアーティファクトを得た。

「わかった。巧くやっておくよ。君たち二人はもう休んでくれ。明日は奈良に先に行っていてくれ」

「危険手当もお願いしますね」

最後のケイの言葉に少々高音はむっとしたものの、瀬流彦は“相変わらずだな”と笑いその場はお流れとなった。高音は犯罪を防ぐために働くのは善意ですべきであって、お金も必要ではあることは認めつつも大っぴらに請求することではないという考えをもっていた。もともとケイがそんな人間であることは重々承知しており、いまさら口論する気にもならなかった。

## 第九話 修学旅行？（後書き）

学園祭前に世界樹での学園長の説明の際に最初に超の盗聴に気付いた愛衣は有能ってことでこの設定に。手元に二十巻以降なく、マガジン掲載時の記憶しかないため何か設定あったかもしれないけど、まあいいかってことで。

## 第十話 修学旅行？

「お姉さま！！」

ケイ達は先回りし、援軍としてやってきた刀子と愛衣と合流した。ネギの修行の関係上、魔法使いであることをできるだけばらさないようにという学園長の少々厄介な指令とともに二人はやってきた。一日様子を見、その後にもう一度判断するということも付記されていた。その為に年齢詐称薬を用意されており、学園の魔法使いであるとはれないように巧くやれということだった。

ケイとしては二人しか来なかったことに不満を覚えた。たしかに京都神鳴流の使い手であり、元関西呪術協会の刀子はこの任務に適任であったし、容易に月詠を抑えることは想像できた。しかし、多いに越したことはなかったのだ。たしかに、今学園に所属の魔法先生は修学旅行シーズンということで各地に一般の教師同様付き添っており、学園には少ない。そして足手まといにならない程度の腕の持ち主、認識障害が使えないため派手な魔法が使えないなどの制限の結果極少数の人間しか当てはまらないことは分かっていた。しかし、もう一人くらい、とケイは思う。前日に増援の有無について無理矢理にでもあると言いはるべきであったか、と後悔し出していた。

「刀子先生、費用に関しては何か言っていましたか？」

「多少の無理は許すと言わせたわ」

居ないのならこちらで用意すればよい。その方針の元、早速ケイは携帯を取り出した。費用を気にしなくて良い以上やるべきことは多い。

「おはよう、龍宮。修学旅行の方はどう？」

「おや、珍しいね。ケイか。修学旅行は実に楽しいよ」

「お楽しみのところ申し訳ないのだけど、依頼をしたいんだ。費用に関しては学園長が払ってくれるよ」

「……………大変魅力的なんだけど、私は折角の修学旅行を抜けるわけにはいかないな」

学園長が金を出す依頼ということは儲かると真名は経験上知っていたが、お金のために折角の旅行を抜け出すわけにはいかず、残念そう声を出していた。同時にその声は棒読み気味で真名の演技であり、修学旅行に関する依頼であることを理解していることをケイに伝えていた。

「そんな龍宮にも幸運なことに、今回の依頼は両立できるんだ」

「どんな依頼だい？」

「確定ではないのだけど、狙われているのは近衛さんらしくてね。ずっと付いている必要はないのだけど、それとなく注意してくれるといい。あと僕らが呼んだら手助けをしてほしい」

「わかった。頑張ってみる」

親書や敵戦力、こちらの状況についても情報を渡し、本日中は依頼を遂行してくれることとなった。ただし、三日目は楽しみにしている大阪へ向かうためその限りではないとのことであったが、ケイとしてはそれでも充分だった。

\*

「すみません。写真撮っていただいてよろしいですか？」

「ウチ？ああ、いいですよ」

ケイと愛衣は年齢詐称薬を使い二十歳前後の姿になって、一人になったこのかに近づいた。笑みを浮かべ写真を頼んだ愛衣に対し、二つ返事で答えカメラを受け取り、このかは写真を取った。

「Thank you」

外見上、海外旅行者っぽく見せかけることが可能なケイは手を差し出し、このかと感謝の意を伝え握手をし、それに続いて愛衣も感謝の言葉を続け、このかと握手した。  
ケイと愛衣は謝意を述べ終わるとその場を後にし、このかと別れ反対方向に向かった。

「ケイさん、あんなこととして良かったんですか？」

「当然です。愛衣ちゃんを呼んだ時点で学園長も察しているから大丈夫だよ」

「はあ」

愛衣が溜息を吐くのもやむを得ないことであった。愛衣がやった事は違法行為と言われても仕方ないマーキングであった。その為に接触が必要であったため、わかりやすい握手という手段を使った。愛衣の探查魔法を使えばマーキングをした人物の位置を好きな時に知ることができる。ただし、結界などの特殊な空間に入った場合や距離が離れ過ぎているなど使えないこともある。そしてマーキングも細心の注意を払わない限り見つからない様なものであり五日は有効であるため、修学旅行中は使用し続けることができた。このかが狙われている以上、万が一の時の位置確認が必要であるとケイは考えたのだった。

「ケイ!!」

中学生の姿ではなく、年齢詐称薬により成長し魅力的な姿をした愛衣と寄り添って歩いているケイに対して声が掛けられた。当然、このかに声を掛けるために認識障害や人払いなどの魔法は使っていなかった。

成長した愛衣の姿に周囲は釘付けなどということではなく、“お、綺麗な人だな”と男性が振り返る程度だった。何がいたいかといえば、目立つようなことを二人は行っていなかったし、周囲も注意を払うようなこともなく、気をひくようなこともしていなかったというのだ。

関係者ならともかく、一般人には年齢詐称薬により別人に見えるため知り合いに会っても心配する必要はなかった。また魔法関係者の中でも刹那とはあまり顔を合わせる機会はなかったし、ネギとは会ったことさえなかったため、そういった心配の必要はなかったのだ。

ただ、魔法を知っているものの年齢詐称薬を知らず、またそれを破るような手段を持たず、勘や感覚、経験だけの一般人の力で確信を抱いた人物が一人いた。実に偶然眼の端に映っただけであったものの、すぐに誰だか理解し、班員とそれとなく別れ、ケイ達に近づき、声を掛けたのだ。

まあ、つまり浮気を見つけたと思った千鶴が、ケイに声を掛けたという単純なことであった。

「はあ。愛衣ちゃん、先に戻っていてくれるかい？何かあったら連絡をよろしく」

「え、ええ。わかりました」

背後からの千鶴の言葉に確信していることを悟ると、ケイは彼女の威圧感に少々怯えている愛衣に連絡を頼み、逃がした。愛衣は千鶴

の笑顔が鬼の形相と信じてしまうような恐怖感から走るように去って行った。離れたところにいる刀子と高音にこのかに対するマーキングの成功を知らせるとともにケイが足止めを食らうことを説明するためのものでもあった。

「あら、あちらの子はどなただったのかしら？」

同室に暮らす夏美であれば恐怖に慄き、なんでも喋ってしまいそうな威圧感を放っている千鶴の言葉であったが、ケイに対してはさほど効果が見込めなかった。もっとも、そちらではなく浮気の嫌疑を晴らすために包み隠さず説明する必要があることをケイは悟っていた。

\*

「あら、そうだったの」

場所を移動し、二人になり今回の仕事について詳細に説明を行った。一応の誤解は解け、いざとなれば刀子と高音、そして愛衣のところにも連れていかなくてはならないと考えていたケイにとっては有り難かった。

「それで、このかさんが狙われているのならどうして京都の修学旅行を許可したの？」

「関西呪術協会と仲が悪いって言ったって戦時中や紛争中ならともかく今はなにも起きるはずがなかったんだ。魔法世界を含めた世界的にみれば大勢は西洋魔法使い側で、人口比で呪術協会側は1%にも満たないんだ。過去はともかくとして今の西の長もそのことは知

っているし、喧嘩を売るだけ無駄なことを知っている。戦力が違いすぎるからね。だから、互いにここ三十年は何もなく、特に今の長になってからの十年ほどは仲良くやって来ていたはずなんだ。最近では特に交流も深まっているはずさ」

「じゃあ、どうしてこんなことを？」

「うーん。規模が小さいからね。私怨の可能性もあるし動機まではわからないんだ。少なくともここ十年来、何度も魔法教師や魔法生徒もこちらに修学旅行などに来ているのだけど、一度もこんなことなかった。近衛さんと親書が関係するんだろうね」

「このかさんが、ね。それでちゃんと守ってくれるんでしょうね？」

「勿論だよ。今、僕は守りを、関西呪術協会の人たちには犯人探しを行ってもらっている。だから、すぐに捕まると思うんだけど」

\*

「女に守ってもらいやがって、だから西洋魔術師は嫌いなんや」

「小太郎、それはちゃうやろ。月詠はんと戦ってはったんやろ、その兄ちゃん」

「それが気に食わんねや。男やったら俺と戦えっちゅーねん」

小太郎の言葉に千草は溜息を吐いた。昨日の失敗を責める気はないものの、月詠にする小太郎にする戦闘狂の気持ちは千草には理解できなかつたのだ。天ヶ崎千草は戦闘が得意な術者ではない。後衛という意味でもなく、その持ち味を生かすのは後方支援や諜報活動であつた。

新幹線では警戒が薄かったものの、旅館において瀬流彦始め複数の魔法関係者がいる中、侵入しこのかを見事誘拐している。偶然刹那

に見つかってしまったものの、月詠と小太郎との待ち合わせ場所まで独り逃げて来ることができた。千草の予定ではここで二人に足止めさせ、このかを連れて逃げ切るつもりであった。しかし、不運にもその足止め要因二人が足止めをくらい、このかを取り戻されてしまったのだ。屋上での二人がいなければ成功だったと千草は確信していた。

相手はすぐに増援を寄越すであろうし、警戒も厳しくなる以上、戦力が足りないというのが千草の結論だった。だからこそ、父母の仇である西洋魔術の使い手を援軍に呼んだ。

千草は両親を早くに亡くし、その上魔法世界が混迷期であったため、人手不足になった関西呪術協会で幼いころから働いていた。戦場を回り、そこでは敵か味方かしかなく西洋魔術師か否か関係なく援けられ、援けた。十数年経ち、西洋魔術師の友人を持つに至っても根底には西洋魔術師への恨みは消えなかった。今回はその友人の一人に頼みこんで強い西洋魔術師の派遣を依頼した。

そもそもの目的は、関西呪術協会の掌握であり、千草が所属している派閥のトップはかつて最後まで今の長である詠春と次期長を争った人物であった。“親書”を奪えばその為役に立つということに任務を受けたのだった。

しかし、新幹線で見、音羽の滝で確認した“近衛木乃香”を誘拐することに独断で変更した。呪術に対する知識のない、ただ魔力が大きいのみのかか相手であれば操り人形にすることも可能だったのだ。より安易に掌握への道は開かれるのは確実だった。

今朝、千草は昨日のことについて依頼主に呼ばれ報告に向かった。

そこで千草は驚愕し、落胆した。

個室に通され、依頼主と二人きりになったものの、過去に数度会合において威厳に満ち派閥のトップとして君臨していた彼が焦りを浮

かべ落ち着きなく動き回っていた。一通りの報告を終えたところで激しい叱責をもらい、そして本来の目的について話された。そもそも掌握するとは建前に過ぎず、“親書”というものに対し、表情を変えることの少ない詠春が満面の笑みを隠すことなく喜んでいたため、“嫌がらせ”に行つたというのだ。“近衛木乃香”に関しても大それたことでそのようなことをすれば許されるはずがなく、自分は全く関係ないと言いだした。普段、過激な言葉を発し千草たちを勇気づけていた彼とは到底思えない言葉に千草は驚愕した。そして、千草が独断でやったこととするので謹慎している、という言葉に了解の意を伝えると少々の喜びを隠さず出ていった。止められることもなく屋敷を出た千草は落胆を隠すことはなかった。

「月詠はん。例のことやつといってくれはりました？」

「もちろんや〜」

自分が切り捨てられることを知った千草は関西呪術協会への未練を捨てることにした。そして、根底に存在した西洋魔術師への恨みや自分を見捨てた呪術協会への恨みを晴らすことにした。このまま捕まれば十数年は禁錮刑に処されるのは明白であり、千草は最期であると悟っていたのであった。

依頼主があちらに寝返る以上、隠れ家はすぐに見つかり、全力を拳げてこちらを捕まえに来る。だからこそ、逆にこちらから長に知らせ、依頼主を告発したのだ。少しでもそちらに力を振り分けられるなら、それに越したことはなく、京都を出て逃げ出したように見せかけるような工作もしておいた。

「でもよかつたんどすか〜」

「ええんよ。あんな小物」

月詠の問いに千草は吐き捨てるように答えた。フェイトという西洋

魔術師が来るのが明日の昼であり、それまでに準備を怠るわけには  
いかなかった。成功しても失敗しても結末は変わらないであろうが、  
せめて道連れにしなくては気が収まらない。死んでも死にきれない  
のだ、と千草は自身が現状可能な手段の内、最も被害の大きい、呪  
術協会にも西洋魔術師にも思い知らせることのできる方法を実行す  
ることにした。

リョウメンスクナノカミ、千六百年前に打ち倒された飛騨の大鬼神、  
かつて紅き翼によって封印されたものの当時ですら彼らにしか封印  
できなかったのだ。今紅き翼に匹敵する化け物級のものなど、ここ  
にはいない。“近衛木乃香”がいれば封印を解くことは可能である  
ためその儀式の準備をする。明日、来るフェイトとともにその“近  
衛木乃香”の奪取を成功させなければならなかった。

## 第十話 修学旅行？（後書き）

名前も出て来ないオリキャラにアンチ……………のはず。

この時点で原作六巻四五時間目の二頁目に出て来る千草のセリフと齟齬が……………。

「親書も渡ってしまたしーっ」というところです。拙作では既にこの時点で親書より私怨、それに役立つこのかへと比重を移していることになっています。

まあ、他にも山ほどあるでしょうけど筆者の眼は都合よくできているので映りませんでした。

## 第十一話 修学旅行？

修学旅行二日目は平穩無事に過ぎた。援軍を増員し、真名まで動かしたケイとしては少々不謹慎ではあったものの拍子抜けと違ってよかった。千鶴に見つかった事はあったが、あくまでケイ個人の問題であり、襲われることもなく旅館に戻る事ができた。

一般教師に後で教えられ、真名から聞きだすことで瀬流彦が知ることとなった“ネギ先生とラブラブキッズ大作戦”の顛末は学園長にだけ報告され、他の人間の知ることとならなかったため、別の旅館に泊まっているケイ達には知る由もなかった。

二日目が平穩無事に過ぎ、関西呪術協会の報告によれば首謀者を捕縛、実行犯も既に逃亡済みとのことであった。

「瀬流彦先生、どうしましょうか？」

早朝、ケイ・高音・刀子・愛衣の四人は瀬流彦とともに本日の打ち合わせを行っていた。昨日に引き続き、首謀者の証言に基づき関西呪術協会は実行犯の追跡に全力を尽くしている。そのため、ケイ達の任務を一応の終わりを見せたと言ってもよかったのであった。

「そうですね。刀子先生は今回のことどう思いますか？」

「実行犯といっても首謀者である彼に依頼されたにすぎないのでしよう？もうこちらを狙う理由はないはずだわ」

「でしたら、もう終わりということではいいのでしょうか？」

瀬流彦と刀子の話にケイが割り込んでそう提案した。基本的にやる気のないケイとしては終わりの兆しが見えた以上さっさと自由の身になりたかったのである。

「待ちなさい、ケイ。実行犯が捕まっていない以上安心できませんわ。私たちは最後まで面倒を見ないといけません」

やる気の欠片も見当たらないケイに高音はそう嗜めた。高音からすれば京都観光を楽しみにしていたものの、あくまでそれは任務とは別の話で、特に今回の件は悪質であると見ており彼女なりの正義感からすれば当然許されるものではなかった。

「ええ。一応最後まで護衛に徹するべきですわ。理由がなくても襲つて来る者はいますしね」

「そうですね。では今日のところは四人で見てもらえますか。何もなければ明日からは二交代で良いでしょう」

最後に瀬流彦はそうまとめ、打ち合わせを終えた。

\*

ケイと高音、不真面目と生真面目、ケイには高音の生真面目さが、高音にはケイの不真面目ともいうべき肩の力を抜くことが足りない、と刀子は考えている。学園としても高音を見張りとしてのみケイと組みしているのではなく、良い意味での影響を高音に与えるようにとの配慮からだった。肩肘の張った高音を見るたびに刀子も足して二で割ると行き過ぎだが少々は見習った方がいいと常々思っていた。関西呪術協会は刀子にとって古巣であり、結婚を機に関東に移ったものの今でも連絡を取り合う知人も多い。だからこそ、今回の件を最初に聞いた時、学園長に何度も聞き返したのだ。しかし、首謀者の男が捕まってみれば刀子としても理解できる犯行だった。彼は思慮美深く鷹揚で誰にでもわけ隔てなく接する素晴らしい男だという

噂があつた。しかし、一度彼と一緒に任務になつたときに、狼狽した無様な姿はどう見ても小心者で短慮な姿だつた。既に現役を退いている彼が任務に出ることもなく、そういった姿を見せないため噂しか知らない若い世代の中には支持するものもいたのだ。

「ゲームセンターね。どうして京都まで来て。もつと素晴らしいところがあるのにな」

「そうですね。お姉さま」

早朝の打ち合わせを終え、四人はネギとこのかを追いかけていた。ネギは一般人三人と魔法を知らないこのか、そして護衛である刹那パートナーであるアスナを連れゲームセンターに入っていた。

「あんなもの背負つて出回るのは学園内だけにしてくれと言いたいところですね」

「……………そうですね」

大きな杖を背中に歩きまわるネギの姿を見て“ですが、今回は事態が事態だけに何も言えませぬね”というケイの言外の意見に刀子は賛成しつつ護衛を継続していた。

「うん？ネギ先生とそのパートナーさんが離れるようです。……………」

……………親書ですか」

「……………そうですね」

「僕はそのことを今の今まで忘れていたのですが、どうしますか？僕としては彼らの無事を祈りつつ近衛さんの護衛を続けるのが良いと思います」

「けれど、それじゃあネギ先生の方が」

襲撃の危険性も低くなっており、また奪われるものの違い、既にい

る護衛の戦力などから考えてケイの案は妥当であると刀子は考えた。最悪、親書は奪われてよく、襲われる場所によつては関西呪術協会の本山に逃げ込める以上こちらの戦力の充実の方が大事であるという考えだった。

「そうね」

「あ、待って下さい。一般生徒がネギ先生の方に着いて行くとうしています」

「え？」

走っていくネギ・アスナの少し離れた背後に一般生徒が付いて行っていた。もしものときに危険であるので止めなければならなかった。

「刀子先生、行って来てください」

「ケイ、ちやっと」

「そうね。私が行くわ。すぐに戻ってくるから、巧くやっつけてね」

記憶を消去したりすれば問題が有り、見知らぬケイや高音、愛衣が誘導するのは無理がある。その点、教師として面識がある刀子であれば巧く誤魔化せる筈で、後で工作がしやすい。であればこそ、遠くへと離れる前にと刀子は急ぎ追い掛けていった。

\*

「遅くないか？」

「そうね」

「電車に乗っちゃったんじゃないですか。駅がすぐそこですし」

「……………愛衣ちゃん。マーキングしといたよね。刀子先生どこに居

る？」

「ええつと。……………本山に近づいていますね」

ケイはその言葉に頭を抱えなくなった。最大戦力の刀子を差し向けるのではなく自分が行くべきであった、と。少々やりづらいし、よろしくない方法になるが魔法を使えば巧くやれるし、他の方法だつてあつたのだ。一番問題なくやれるはずの教師である刀子が時間を掛けるということ想定していなかったのが痛い。昨日の成果につられ、全員油断していたと言つたところだつた。

「へ？」

「どうしたの、愛衣？」

「刀子先生が消えました」

「は？」

愛衣のマーキングに気付けば消せるものであるが、気付くのは難しいはずであつた。また刀子が消す理由もない以上、考えられるのは彼女に何かあつたということだ。消える可能性として強力な結界に入つたことから殺されたことまで様々考えられた。

「愛衣ちゃん。僕が見に行くから場所を教えてください」

「はい。ええつと……………」

「待ちなさい。あの屋根の上にいるのは一昨日の女じゃない」

「……………月詠だつたか。……………最悪だ」

“最悪だ”ケイはその言葉を小声で呟いたのであつたが高音には聞こえていた。愛衣は探查魔法に意識を使い、ケイは思考に落ちていたため高音が周囲を警戒していたのだ。月詠を発見し、ケイの呟きを聞いた高音はこれまで以上に周囲を警戒していた。愛衣程ではなくとも同年代の中で実力派である高音はもし誰かが襲つてきても先

に発見する自信はあったのだ。しかし、無情にもその自信は脆くも崩れ去った。

「きゃっ」

高音はまったく油断せずに警戒を怠っていないにもかかわらず、その一声だけしか上げることができなかったのだ。気付いた時には首に衝撃を受け、力が入らず地面へと視界が近づいて行くのを感じていた。この記憶も後でこのことを聞いて作り出したのかも知れないほど鮮明なものであった。一番の探査魔法の使い手が機能していないとはいえ、全く気配を感じさせず、高音を気絶させたのだ。

高音よりもケイは一瞬先に気付いたが、どちらにしろ声を上げる間もなかったのは変わらなかった。それはケイが高音たちと違い襲われることに慣れていたため、直感的に危険を察知しそちらを確認したからだ。高音がやられることを察したケイは、まだ探査魔法を使っている愛衣を無理やり持ち、ゆっくりと地面に倒れこんでいく高音とその背後に立つ襲撃者から距離を取った。

「へっ」

荒事に慣れていない愛衣は突然のケイの行動に驚き、魔法を切ったものの異常であることに気付き、体勢を立て直しケイの背後に立った。

「悪くない反応だね」

高音を一瞬で倒した白髪の少年はそう呟いた。ケイは化け物と長く付き合ってきたことから感覚的に相手の力量がわかった。眼の前の少年は少なくとも高畑級である、と。

「逃げる」

ケイは愛衣にそう命令した。愛衣は一瞬倒れ伏す高音に眼をやるもケイからの通告が足手まといという意味であることを察し、全力で逃げた。自身の無力さを嘆きつつも現在できる最良の手で有ると信じて。

「君は確かレイくんだったかな？……いや偽名か」

「……………」

「まあ、いい。女性を逃がすのは良い心がけだね」

「御褒めに与り光栄ですね」

母親・学園長・高畑と並ぶ化け物を相手に、高音を逃がすことは無理だと悟っていた。そして瀬流彦たちでもどうにもならない相手であり、ここで時間を稼ぐ意味があるかもわからなかった。

人目に付くこの場では、派手な魔法を使ってこないことを祈りつつ、ケイは対峙していた。刀子もやられたであろうことを想像しつつ、意味が有るかはわからないものの限界まで時間を稼ぐことにした。月詠の時のように“戦闘”では時間を稼げないが、“逃亡”なら絶対的な自信が有った。

「少年こそ何という名前なんだい？」

「フェイトだよ」

「嘘だな」

ケイは間髪いれず断定した。

「……………何を言ってる」

「嘘だと断定した時にその人形のような顔が一瞬怒りに変わりましたね。名前にコンプレックスでもあるのですか？」

「……………」

「今度は“人形”という言葉に反応しました」

ケイは最後まで言い切ることができずフェイトに襲われた。圧倒的なスピードで迫りくるフェイトに対しケイはかろうじて避けることに成功する。そして、そのまま高く跳躍し既に月詠のいなくなった屋根へと飛び移った。

「おやおや。その程度のことでお怒りになるとは随分と……………」

フェイトは屋根の上のケイをジッと見つめると踵を返し、声を掛ける間もなく移動していった。

安い挑発行為によりフェイトを乗せ、走り回って逃げるからこそ時間稼ぎができるのであって、追撃による足止めなどケイには不可能なことであった。また、高音の回収もできたことで一定の成果と云えた。もつとも、本来の任務であるこのかの護衛は、既に月詠の襲撃を受け刹那とともに移動しており、及第点も与えることができないものであった。

ケイは愛衣と瀬流彦に連絡をし、高音を回収しその場を去った。

\*

高音を愛衣に引き渡し、その場で愛衣によりこのかがシネマ村に居ることを聞いたケイは援軍へと一人そちらに向かわされた。シネマ村の一番近くに居る魔法使いであり、愛衣は後衛で前衛がない以上、守る術がないため一人で行くこと自体に不満はなかった。また、一人であればアーティファクトで撤退ができるため、むしろ有り難かったのだ。ただ、京都に来てから働き詰めであり、超過勤務と言

わざるを得ず、敵のフェイトも化け物クラスであり不満だらけであるということが問題だった。

もっともシネマ村に付くと、殆どやることはなかった。既に刹那がこのかを連れて逃げ出したところであり、追手であるフェイトたちはそれを見送っていた。刹那たちが本山へと向かって行くことを確認すると、ケイはフェイトたちを監視していた。追おうとしなかったこともあったが、化け物を監視するためかなりの距離をあけてのものとなり、三十分と経たないうちに撒かれてしまった。

「瀬流彦先生。撒かれてしまいました」

「わかったよ。ありがとう。もう大丈夫だから帰って休んでいてくれ」

瀬流彦は愛衣からの第一報を聞き、前日に聞いておいた詠春との直通電話を使い援軍を要請した。現在、呪術協会の本山では千草たち実行犯を追うため戦力を分散しており、また本来の業務も行っていないためほとんど戦力というものはいなかった。それでも詠春始め数人の戦力を準備し、出発しようとしたところで、このことから危険が去った事を知った。万が一に備え遠巻きに護衛はしていたものの本山に入ったため瀬流彦のいう“大丈夫”な状態になったのだ。

本山には、ケイのいうところの化け物級の高畑以上である詠春とその部下たち呪術協会の戦力もあり、また本山を囲う巨大な結界があり、それを動作させればよほどのものでない限り侵入は不可能であった。

瀬流彦も戦力をかき集めようとしたものの、正規の教員としても働いており少々離れたところにいたため戦力を集める前に事件が収束へと向かっていた。瀬流彦ができることは学園長へその日何度目かの連絡をし、更なる増援として今日日本に居ない高畑を無理やりにも来させるように要請し翌日にはできるといふ確約を貰うのみであった。

## 第十一話 修学旅行？（後書き）

魔法使いの間でのどかのアーティファクトのようなものが当然想定され、名前っていうのは重い存在だと思います。小太郎と月詠はそこまで考えておらず、実力者は対抗手段が有ると妄想。フェイトにのどかのアーティファクトが効いた時点であり得ませんが。当然、小心者ケイは偽名を名乗ります。前にこのことを書くのを忘れてました。

フェイトとケイの件は、ケイが純粹に見破ったのとブラフであり確信を持って話しているわけではありません。

## 第一二話 修学旅行？

失敗、千草にとってそれが大きく押し掛かっていた。

上を首謀者として売り、自分たちも逃げたと見せかけたことで警戒を緩まそうとした。しかし思っていたほどの効果は見られず、千草から見れば殆ど変わっていなかったのだ。

実際には全員の危機感が下がり、ケイ達の緊張感の低下や彼ら中心メンバー以外の魔法先生の所在をばらけさせおり、また呪術協会では千草たちを追うために外に戦力を分散させていた。そして何より呪術協会・関東魔法協会ともに平常運転に近くなり増援を遅らせることとなっていた。一度呼び戻そうとしていた高畑を海外にとどめたことは大きかった。

昼間にフェイトとの合流を済まし、千草たちがどう仕掛けようかと頭を捻っていたところ、ネギたちが先に動いた。親書を届けるためにネギとアスナが、このかから離れたため千草たちも二手に分かれた。ネギとアスナの足止めに千草と小太郎が当たり、月詠とフェイトが残り、護衛の刹那を抜きこのかを誘拐する手はずだった。フェイトの強さは正確にはわからないものの月詠程度はあると千草は踏んでおり、このか誘拐の方に戦力を集中した形だった。

千草はネギとアスナを無限方処の呪法で閉じ込めることで足止めを成功したため、万が一のために小太郎を残し、月詠達への援護へと向かった。

一方、月詠たちは二人と別れた後に、本山方向に向かう刀子を発見したためフェイトがそちらに向かった。月詠が京都神鳴流の先輩である刹那との戦いを欲しており、離れる気がなかったためだ。フェイトは刀子に少々苦戦を強いられるも石化に成功し、月詠の元に戻

るところでケイ達を発見し奇襲を掛けたのだった。月詠が攻撃を仕掛けつつ、このかをその場から離れたところで、フェイトは時間を必要とするケイとの戦いを諦め、そちらへと向かった。途中合流した千草とフェイトはともにシネマ村へと着いた時には、何故か月詠と刹那が決闘を演じることとなっていた。

決闘から逃れてきたこのかを二人で襲うも、まんまと逃げられてしまった。追撃するには既に時間がかかり過ぎていたことと、ケイ達の足止めを見事成功したことで千草の内心評価を上げていたフェイトによる提案で追撃を取りやめたのだった。

「それでどうせえいんや？」

「夜まで待つてくれればどうにかできるよ」

自身の問いにそう言って去って行ったフェイトに千草は賭けることにした。策というにはおこがましいものであったがそれも既に破れ、本山に入られた以上千草にそれを破り侵入することや、長く潜伏し続け出て来るのを待つほどの余裕はなかった。京都の外に居ると見せかけたことも今回の襲撃で無効となり、遠からず追手が迫ってくることは容易に想像できた。

捕まれば大罪、逃げても重犯罪者としての指名手配が待っており、復讐を遂げるにしろ、呪術協会を乗っ取るにしろ今以上のチャンスはないと千草は考えていた。フェイトの言葉を信じるしか千草に残された手段は存在しなかったのだ。

\*

「この辺りかい？」

「いえ、もう少し東です」

暫しの休息を得、現在ケイは一人であった。本山に入り狙われていたこのかは安全だとはいえ、あまり戦力を分散するわけにいかず、現在ケイは愛衣と連絡を取りつつ一人鬱蒼とした森の中にいた。

「ここかい？」

「はい、そうです」

「わかった。また連絡するよ」

そういつて連絡を切ったケイは刀子を探していた。刀子の反応が消えた位置に、ケイのマーキングを案内するように旅館で探査魔法を使い、愛衣のナビゲートが行われていたのだ。このか達は本山に入り安全が保証され、襲われる可能性は限りなくゼロに近いものの、他の生徒やケイ達の安全は保証されたわけではなかった。そのため愛衣や瀬流彦達は旅館に缶詰めになっている。また高音もフェイトにやられた負傷が大きく回復に勤しんでいた。

一人ケイだけが、この彼に適した任務を与えられたのだった。自力で戻ってこなかった以上、最悪死体になっており愛衣や高音にはきつい任務であることもケイが一人で行っている理由でもあった。本山に近い場所であるとはいえ、既に暗くなつた森の中であり、ケイは充分警戒しながら刀子の探索に当たっていた。

かなりの時間を費やし時刻も遅くなつてきた頃、周囲とは浮いた存在を発見し、近づいて行った。それは石像であり、よく見れば刀子の姿をしていた。魔法で石にされ、放置されていたのだ。ケイは回復可能な状態であることに、安堵を覚え連絡をしようと携帯を取り出した。

「石の息吹」

フエイトがそこに居合わせたのは偶然だった。本山への侵入の準備を整え結界を越えようと向かっていたところだったのだ。道選びも特になくどこからでも良かったため偶然に過ぎなかった。

昼間は態々追いかけてまで相手をするほどでもなかった小物であったため、刀子と異なりケイを石化することはしなかった。しかし、今騒ぎ立てられ、本山や詠春にまで警戒を強くされると面倒になることは考えるまでもないことであった。強力な結界の存在に、ある程度の慢心を予想しており、態々難易度を上げる趣味を持たないフエイトは眼に映った存在であるケイに対して躊躇なく“石の息吹”を使ったのだった。

「くっ」

ケイはギリギリのところ、何者かに狙われていることをその直感により察知し、考えるというより身体が反射的に動き避けようとした。しかし、完全には避けることは叶わず、携帯を持っていた左腕に石化を食らってしまった。そして、徐々に石化が進行して行っており何れこのまま看過しておくとなると全身にいきわたることは確実だった。

片腕の石化は致命的であり、その場の治癒も進行を止めることもできない。またケイにとってフエイトは化け物であり、万全な状態であっても相手にしたくない存在であった。だからこそ、ケイは迷うことがなかった。

避けようとした時に眼の端にフエイトを捉えたケイは流れるように発動させた。こんなこともあるのかと、既に携帯していたアーティファクトを使い転移したのだった。流石にフエイトもそこまでは予想しておらず、また“石の息吹”を使った直後で、次の攻撃も間に合わず、ケイの転移は成功した。

「へえ。面白いアーティファクトを持っているな」

フェイトは一人そう呟くと、本山へとこのかを捕まえるために向かった。

\*

「くそ、やられた!」

「ふえ?」

ケイは珍しく大声を上げ、同時に部屋へと転移した。昼のことで既に瀬流彦達と同じ旅館に拠点を移し、そこに転移のポイントを作っておいたのだ。

部屋では、ケイへのナビゲートのために携帯を握りしめ待機している愛衣と、未だに戦闘するほどには回復していない高音が眠っていた。そして、眼の前に突然現れたケイに愛衣は驚きの声を上げた。

「治癒」

ケイは説明する前に石化を止める必要があり、詠唱を行った。愛衣も混乱をすぐに収めケイの左腕をみることで石化の進行を止めるための治癒だとすぐに察し、集中力を乱さない様に押し黙った。

「瀬流彦先生に本山がフェイトってやつに襲われるかもしれないこと、そいつは石化の呪文を使えること、刀子先生は石にされていたと伝えてくれ」

「わかりました」

愛衣に連絡事項を伝え、再びケイは治癒へと集中した。魔力のあま

りないケイからすれば、あまり時間のないことであつたが、瀬流彦が誰か連れて来てくれることを期待していた。他にも石化を止める手段として、左腕を切り落とすことでその進行を止める方法もあった。その場合、後に石化を解くとともに腕を付けるといふものであつたが、流石にそのような勇気をケイは持てなかつた。

\*

「瀬流彦先生。実は」

旅館内程度であれば愛衣に掛れば、集中をすることで見知つた人物がどこに居るか程度なら把握することができた。将来的には旅館内程度の動きなら全て把握する程度に成長し、マーキングをしていれば学園を覆う程度の距離を探索できるようになると思われていた。当然、顔見知りである瀬流彦がどこにいるかなどすぐにわかり、電話するよりも早いとそこに急ぎ向かつた。瀬流彦をすぐに捉まえることができた愛衣は事情を説明した。

「……うん。通じないな」

説明を受けた瀬流彦は何度もいくつもの手段を使い本山に連絡を取ろうとした。まずは詠春との直接電話、裏用に設けられた連絡先、表向きの連絡先など瀬流彦の知る限り、直接行く以外のすべての手段を試したものの通じることはなかつた。本山に何かあつたのは確実であり、侵入されたとは信じがたいものの受け入れざるを得なかつた。そのため、瀬流彦は学園長へと指示を仰ごうと連絡を取ろうとした。

「すまない。瀬流彦先生。急ぎ外出許可を頂けないか？」

「龍宮君、本山のことがい？」

「そつだよ」

学園長との連絡をしようとしていた瀬流彦に対し真名が声を掛けてきた。魔法関係者である真名がこのタイミングでやってきたことに瀬流彦は嫌な予感がさらに増し、まさかとは思いつつも本山の件であるか聞き、肯定の返事をもらった。他に問題がなくよかったと考える一方、真名はケイよりも深刻で新しい情報を持ってきた。既に本山内に侵入を許し、一般人に被害が出ているというのだ。一般人に被害が出ているということは既に主だった戦力はやられた後である可能性が高いものの、大戦の英雄“紅き翼”の“サムライマスタ―”近衛詠春がやられたとは瀬流彦は考えたくもなかった。

既に自分の許容範囲を越えていたが、前代未聞と言っているほどの本山に敵の侵入を許し、長までやられたといえば大事件である。自分の許容範囲はもちろん権限でもどうしようもないと瀬流彦は頭を抱えた。

真名が本山にいるネギの援軍として連れていこうとしている二人は一般人であり、本来こんなことに巻き込むべきではないことは瀬流彦としても分かっていた。しかし、猫の手も借りたい時であり、刀子がやられ高音が回復していない今、この京都において急ぎ差し向けられる戦力の中で一番といって良かった。

元来、真名が連れていこうとしている二人は、一般人の中では彼女と刹那に並び称されるほどの強さを持っており、それは並みの魔法使い以上の力であり、瀬流彦は頷くことにした。

「すまない。行って来てくれ」

「わかった。報酬は頼んだよ」

先発隊として真名を向かわせ、学園長への報告後、後発部隊として立つかそれとも……。瀬流彦は学園長への報告を急いだ。

\*

「ふむ。聞いておる。先ほどネギくんからも同様の報告があった」

「龍宮君に向かつてもらいましたが、僕たちはどうしましょうか？」

「……………これほどのことを仕出かす相手じゃ。周囲の住民を避難させる必要があるかもしれん。そちらの対策をしておいてくれ」

「しかし、微々たる力でも僕たちも向かった方が良いではありませんか？」

「いや、援軍はこちらから送る」

「……………それは。学園長がそこを動かれるのは…」

「安心せい。ワシじゃない。とにかくやっておいてくれ」

瀬流彦には黙っていたが学園長は最悪の事態を想定していた。

本山を破るレベルの力の持ち主が何故今まで大した手出しをしてこなかったのか。そのレベルの使い手で有ればいつでもこのかを誘拐することができたはずであった。態々、本山にそれも力を見せつけるかのように誇示したその力が如何なる意味を持つか学園長は未だ計り知れなかった。

最悪の事態、瀬流彦は若く呪術協会のことを詳しく知らなかったためわからなかっただろうが、いくつか想定された。首謀者を捕縛しその証言と実行犯の人と為りを聞く限り既に関西呪術協会の乗っ取りなど考えているとは思えず、純粹なる破壊が目的である、と学園長は考えた。

そのため的手段としてこのかの誘拐を考えれば、東洋一の魔力量を

誇る彼女の魔力を利用するということであり、それによっていくつかの封印を破ることは可能だった。最大のものは京には存在しないものの、関西呪術協会で管理している中でその危険性から敢えて本山の近くで管理し、封印されている鬼がいた。リヨウメンスクナノカミであり、京で封印されているものの中では最強と言って良い化け物だった。

万が一そんな鬼を解き放つたとして、このかの魔力が永続するわけではないためコントロールすることができるとは思えず、縦横無尽に暴れ出す可能性が高かった。瀬流彦の報告を聞いているときには既にそのことまでも頭によぎっており、学園長はエヴァの派遣を決定していた。自身が動くことは世界樹との関係上できず、図書館島にいる魔法使いも動けない。現在動ける中で最強の駒は目の前にいたエヴァだったのだ。

エヴァが動けるといふのは、停電後、片手間に彼女の封印の調査をしていた図書館島の魔法使いからリスクが大きいものの、一時的に彼女の呪いを無効にする方法を提示してきたからだ。そのうちエヴァにも話そうと思っていたことであつたが、それしか手段がなく使わざるを得なかつた。

現状できる手段は打つべきであり、エヴァに協力を申し込むことにしたのだ。

「エヴァよ。たしか京都に行きたがつておつたな」

「ふん。行けないところの話をしたところで意味がない」

「行けるとしたらどうする？」

実に厭らしい笑みを浮かべた学園長に対し、エヴァは食ってかかるのであつた。

### 第十三話 修学旅行？

こういうことをいってしまえば身も蓋もないが、それを見たケイの感想は“見慣れたものだ”だった。

瀬流彦に報告を終え、待機の指示をもらった愛衣はすぐに治癒魔法使いを連れケイの元に赴いた。魔力の少ないケイであったが、この程度の時間で有れば余裕でもっており、いざとなれば眼の前で眠り回復を図っている高音から魔力を勝手に借りることを考えていたが実行に移されることはなかった。

偵察役として最も役に立つケイは治療が済み次第、瀬流彦によって再び仕事を任された。愛衣によりこのかの位置は明確であり、ケイが向かうこととなったのだ。瀬流彦としては現場の情勢を知らなければ、学園長から任された周囲の住民の避難等もできず、魔力の少ないケイはそちらではあまり役に立たないため、偵察役となったのだった。

幸運にも時間の関係上、既にアーティファクトは使えるようになっており、体調は万全とはいえないものの逃げることは可能となっていた。ケイとしては超過どころの騒ぎではなく、今日だけでも二度フェイトにより命の危機にさらされ、朝から出ずっぱりだった。い加減嚴重な抗議をしたかったが、流石に一方的であるものの顔を知っている人たちの危機であり、また下手をすれば死人が出ることを呑気に部屋で見過ごすほどの凶太さは持ち合わせていなかった。どんな報酬を貰おうかとそればかり考え、ケイはこのかのいる湖、知らされていないもののリョウメンスクナノカミの元へと向かったのだった。

「良く見た光景だな」

「何がダ？」

ケイの立つ湖を見渡す高い木の下から、ケイの呟きに対し返事が来た。ケイも既にそこに居ることはわかっており、目視したことで相手は誰だかを知っていたため襲われることはないと放置していたのだ。

「“闇の福音”の第一の従者チャチャゼロでしたか？」

「良く知ッテンジヤネエカ」

ケイは形式的な言葉で声を掛けた。チャチャゼロはそう言うと、下から飛びあがりケイの隣へと腰掛けた。

「デ、何が“良く見夕光景”ナンダ？」

「圧倒的な魔力での広範囲攻撃で相手を倒すことですよ。子供の頃良く見ていましたが、久しぶりに見て懐かしく思いました」

「ヘエ、御主人ト同等ノレベルナノカ？ テメエノ母親ッテ奴ハサ？」

ケイは母親のことをチャチャゼロが知っていることに少々驚いていた。あの人の悪評はこんなところにも届いているのか、と。

「知りませんよ。あのレベルの人たちは僕からすれば全部同じ括りです。高畑先生くらいから化け物って呼んでいますね。当然、母もマクダウエル嬢も同じ括りですよ」

「ソウカ。タカミチカラッテノハチヨット広イナ」

「僕としてはそれ以上知りたいとも思いませんし」

「ケッケッケッ」

何が面白いのかケイには解らなかったが、チャチャゼロは笑いだした。

「ソウイヤ。テメエノ母親ハ“ブラッディー・メアリー” ツテ呼バ  
レテタソウダナ。ソノ子供ニシテハ、随分ト弱ソウダナ」

「“ブラッディー・メアリー” ですか、知りませんね。“盗賊殺し  
”と渾名されていたのは知っていました。そんなものもあつたと  
は。しかし、血溜まりはよく作り出していました。血塗られた姿  
をみたことはありませんでしたけどね。比喩的な意味では当たって  
いますけど」

「へエ。ソウイヤ、ドンナ魔法ガ得意ダツタンダ？」

「うん。母はいい加減で直感的な人でしたから、適当に唱えてい  
ましたね。僕には到底理解できませんでしたが、呪文の文言自体に  
意味はなくそこに魔力を如何に乗せるかだ、とかなんとか。“火よ  
灯れ”と言いつつ辺りを凍らせていましたね」

「無茶苦茶ナ奴ダナ」

湖の方に眼を向ければ、リョウメンスクナを倒したエヴァがネギを  
かばい、フェイトの攻撃を食らっているところであった。

“甘い”とチャチャゼロは断じた。昔に較べエヴァは学園での生活  
により丸くなつており、自分としては詰まらないものの、エヴァに  
は良い傾向だとチャチャゼロは考えていた。殺戮人形であり、そう  
いった目的のために作りだされた自分と異なりエヴァは元々人間な  
のだから、“まとも”になつて行くことを歓迎していた。一線を越  
えて、“まとも”になり過ぎると危ないものの、そこまでの心配は  
未だしていなかった。

「オイ着イテ来イ」

「はあ」

ケイは事の顛末を瀬流彦に報告し終え、帰りがかったものの、また  
新しい任務を任されたため溜息を吐かざるを得なかった。隣の殺戮

人形はやる気満々であり、ケイも着いて行かざるを得ない。運悪く、大変可哀想なことにケイ達の居る方向へと逃げ出している実行犯天ヶ崎千草の捕縛が次の任務だった。

\*

千草の今回の逃亡は自身の腕を掛けて完璧に近いできであった。諜報や潜入を得意としていた千草には当然逃亡もそのカテゴリーに入っていたため得意中の得意だったのだ。

そんな千草は“あり得ない”と繰り返し呟きながら道を急いでいた。リヨウメンスクナノカミの復活前ならともかく、復活後にやられることなど想定していなかったのだ。それも一撃で、突然現れた金髪の子供にやられたのである。

本山の結界を破ったフェイトまでやられてしまったては、千草は逃げるしか手段は残されていなかった。湖周辺の森で一度襲撃されたが、鬼や符術を全て使い逃げる事ができた。既に手持ちの符は使い果たし、無防備に近いものの、湖から遠く離れ、誰も後を追って来ない。逃げ切れれば重犯罪者として指名手配されることは確実としても、生き延びることはできるはず。その思いからひたすら前へ前へと眼を逃れるため急いでいた。

しかし、残念ながら湖から逃亡数時間、明け方チャチャゼロにより捕縛された。

「才前、本当二手ヲ出サナカッタナ」

「当り前でしよう。僕は逃げる事が本分で、捕まえることなどよほどのことがない限りしません」

「シカシ、一度見失ツタノヲ良ク見ツケラレタナ」

「経験と勘ですよ。逃げる側の心理には詳しいものですから」

ケイはチャチャゼロとともに襲撃を掛けたものの、見事に千草の符により足止めをくらい行方を掴めなくなった。しかし、チャチャゼロを連れ逃走ルートを予想し、待ち伏せし成功したのだった。手出しもせず、千草が来るまでの二時間、チャチャゼロに見張りをさせ森の中で睡眠を取り、捕まえさせた。あとは千草を引き渡すだけであつた。

チャチャゼロがエヴァに連絡を取るとともにケイは瀬流彦に連絡し、引き渡しを比較的近い呪術協会で行うこととなり、チャチャゼロを頭に乗せ移動を開始した。

「テムエノ頭ノ座リ心地ハ中々悪クナイゾ」  
「そうですか」

\*

「ふむ。来たか」

鳥居を潜り、屋敷の方に向かったところ縁側で偉そうに両手を腰に当て胸を逸らし、待っているエヴァがいた。つい先程、ネギたちは本山を降り旅館へと向かつて行き、入れ違いの形でケイとチャチャゼロがやってきたのだ。

「チャチャゼロ、良くやった」  
「御主人二八悪イガ、ドツチカツツトコイツノ手柄ダゼ。一度逃ガシタ上ニ、見ツケタノハコイツダツタシヨ」

「……もう引き渡したということで早急に帰らせていただいてよろしいですか？」

チャチャゼロの言葉に、エヴァは顔をケイへと向け、眼光を鋭くした。チャチャゼロが余計なことを口にしたため、エヴァの興味が自身へと向かうことを察知したケイは、早々に用事を済ませ帰還しなかった。寝不足で疲れていたのも事実であり、早急に休みたかったのだ。

「……ふん。相変わらずだな。聞いたところによると、あのガキから二度逃げ切ったそうだな。どうだった？」

「フェイトでしたか、そう名乗っておいででしたけど、冷静な方でしたね。一度目は益がないと対峙しただけで済みまし、二度目は油断してくれていたから逃げられただけです」

「それで？」

「次会ったら、やられますね」

質問というより尋問するかのようにはエヴァはケイを睨みつけていた。いくら慣れているとはいえ、前回に会った時と異なり、魔力を復活させているエヴァに対しケイは少々の威圧感には覚えていた。ケイとしては母やエヴァに対しては事前に情報を集めており、どんな戦い方をするかを知っていた。だからこそ、逃げる準備もできるものであるが、残念ながらフェイトの情報は未だ少なく、逃げ切れる可能性は少なかった。

「まあ、いい。今は貴様よりも面白い玩具がいるからな」

「……では、失礼します」

\*

「お姉さま。大丈夫ですよね？」  
「大丈夫だって言っているでしょ、愛衣。全く何度聞けば気が済むのよ」

愛衣による刀子の回収も夜の間に終わっていた。石化から回復した当初、外見上子供であるフェイトにやられたことで酷く自尊心を傷つけられていたようであった。瀬流彦からの話を聞き、多少マシに思えたようであるが、既に危機は去りエヴァが護衛として動くことを知ると、修行をしながら息巻き学園に向けて発っていた。

高音としてもケイの称するところの化け物に手も足も出さずやられたことは仕方ないにしろ、それで片付ける気はなかった。本来の高音であれば、刀子とともに学園に戻り修行を再開したいところであったが、今は彼女の憧れの京都に居たためそうしなかった。また、フェイトに一撃でやられた際、魔力をゼロにされていたため修行できるほどの体調までは回復していないことも戻らないことへの後押しとなっていた。

愛衣が何度も確認しているのは万全でない高音のことを気づかっていたことである。

「まあ、次は慈照寺ね」

「慈照寺？」

「そうね、解りやすく言えば銀閣よ。その歴史は確か

」

興奮気味で蘊蓄を話し出す高音に対して密かに愛衣は溜息を漏らした。ケイが居る時以外は冷静な高音には珍しく、居ないにも拘らず興奮している様は少々驚きに値した。これが“ヲタク”とか“マニア”とか呼ばれるものなのだろうかと思いつつも、こういったことを覚えておけば高音の役に立てるかもしれないと、脳内にメモしていた。

昨日の昼、フェイトの接近に気付かず、一瞬で高音がやられてしまったことは愛衣にとってショックなことだった。周囲の気配を探知することには絶対の自信が有ったからだ。たとえ、それが探索魔法の最中であつたとしても自身に油断と奢りが有った事を素直に認めただのだ。

多くの魔法使いが平均以上でレベルの高い学園において、探査魔法や察知能力に関しては一、二を争うほどの腕を既に持っている愛衣には奇襲されることは無縁のはずだった。それが奇襲された上で、察知能力では自身に劣るケイに救われた。鍛えなければならぬ課題として愛衣の頭には刻みつけられていた。

同時に、ケイに“逃げる”と命令され高音を見捨て逃げることでしかできなかった自分を嫌悪した。攻撃魔法より探査魔法を優先して覚えていたため、成績優秀な愛衣であってもそちらは周囲より劣っている。探査魔法に学習を集中していたことに不満はないし、今後もそれを変えるつもりはなかった。

ケイによる説明で、高音のレベルでも一撃でやられる以上、愛衣があの場合で攻撃魔法を多少覚えていたところで焼け石に水であることはわかっていた。しかし、理性で理解できても感情では納得できなかった。

探査魔法と攻撃魔法、ともに頑張るといったありきたりな結論に落ち着いてしまったが、愛衣としては本気であり、今後の課題として心に刻んだ。

「　　　つと、ちょっと愛衣聞いているの？」

「　　……あ、はい」

「　　全く、着いたわよ」

心ここに在らず、といったような愛衣を見つつ高音は苦笑いをした。浮かれたように蘊蓄など垂れていたが、愛衣の表情で何を考えているか、読めたからだ。

「愛衣、今は楽しみなさい。それは帰ってからよ」

「へっ？」

「昨日のことを悩んでいるんですよ。ごめんなさいね、守ってあげられなくて」

「ち、違います。それに私が接近に気付いていれば……」

「ふふふ、あれは仕方ないわよ。相手が相手だしね」

「でも……」

「まあ、どちらにしろ、帰ってからでしょ。今日悩んだって何もできないのだから、ゆっくり学園に帰ってから考えましょう」

「は、はい」

今までも人一倍努力してきた高音と愛衣は学園に帰ってからより一層の努力をし、修行への時間と質の向上を行った。担当の魔法先生に掛け合い教えを請い、必要であれば他の教師の元へとも赴いた。学園の魔法先生たちもそれを歓迎し、彼女たちの成長に一役買うのであった。

ただ一人、同じ事件に遭遇していながらケイだけは相も変わらず、サボるスタイルを貫き、魔法関係者の間でさらなる悪評が流され、今回のプラス評価が打ち消され周囲からの評価が向上することはなかった。

## 第一四話 修学旅行？

四月二十四日、修学旅行三日目、初めて千鶴がケイに対して怒りを覚えた日だった。

十歳にしか過ぎないネギが教師をし、同時に魔法使いの修行だとして他の魔法使いたちは手助けをしない、と聞いた時でさえ何故とは思ったが、怒りには至らなかった。

ケイの説明によると魔法使いの世界では成人年齢が低く魔法学院を卒業したネギは一年間の修行を経て一人前と看做されるようになる。だからこそ、その一年間に様々なことを覚えさせる必要があり、まず一人で動けるかがその一つだった。もちろんそれは教師としてではなく、魔法使いとしてのそれである。

郷に入れば郷に従え、魔法使いの世界と一般人の世界の間には決定的な違いが有ることを悟り、千鶴もそれに従った。もちろん当初はネギが無理矢理やらされているのではないか、自分の眼で確認しようとした。結果は、少なくともネギは笑顔でいたし、直接話を聞いてもそういつたことを感じさせなかった。そして、授業においても及第点をあげられる程度には行っていたため止めることはしなかった。最も重要な点は、ネギが自分で判断しそのルールにおいて修行を行っているという点であり、そのことが事実であると千鶴が判断したため、口出ししないという結論に至った。

それでも教師としてのネギに対しては援助の手を差し伸べた。焚きつける意味はあまりなかったものの委員長であるあやかにもそれとなく手助けするように言っておいた。部屋での食事中にそのことをあやかに伝えたところ、“まさか千鶴さんまでネギ先生の魅力に……”などと口にしていたが、少々威圧感を帯びた笑顔で黙らせた。その際、夏美が怯えていたことはいうまでもない。

魔法使いとしてのネギに対する援助の手をどうやって差し伸べれば良いかわからない千鶴は、ケイにネギの様子がおかしい度に報告し指示を仰いだ。やり方もわからずどの程度かもわからない自身による判断よりは、ケイの指示に従った方が結果的にネギのためになると判断したためだ。

緊急性があったのは千雨の時のみであったが、期末テストの時もエヴァの時も時間をおいて相談はしていた。その度にケイは手を打つように約束し、大丈夫だから数日待つようにいわれ、現に言われた通りとなった。

だからこそ、恋人として信頼をしているのはもちろん、魔法使いに關しては絶対的な信頼をケイに対して千鶴は持っていた。

修学旅行二日目に奈良にて偶然ケイを見つけ、その際に今回の力エールやお酒の騒動についての話を聞いていた。そして、千鶴は今までと同じようにケイにこのかを守ってくれるようにいい、ケイもこのかを守ると約束したのだ。当然、千鶴は今までのようにケイを信じた。

しかし三日目、シネマ村にて千鶴の眼前にある橋の上で真剣を使い命のやり取りをする刹那と月詠の戦い、そして少し離れた天守閣の屋根の上ではこのかが危機に瀕し、刹那が助けに向かいこのかを庇い矢が受け、そのまま屋根から落ちていった。何かしらの力で助かったものの、それは一歩間違えば命を落とすようなことであると千鶴は理解した。

最初、班別行動の時間に刹那とこのかしかおらず戸惑ったものの、千鶴としてはケイ達が巧くやっているだろうからと危険など考えもしなかった。月詠が何かの劇のように刹那に対し決闘を挑む由を通

知した時も周囲と同様に何かのショーのようなものだと思っていた。

しかしながら、決闘の場所である橋に着き、それが始まると見たこともない生き物、月詠のペットである百鬼夜行が登場し一緒に居たあやか達に危害を加えてきた。それを見たことで漸く魔法関係であることを知り、同時に刹那と月詠の決闘を見て相当危険なものであるが、百鬼夜行は危害といっても大したものではなく足止めに過ぎなかった。

即座に千鶴は最も信頼しているケイへと連絡を取ろうとした。しかし、それは不通に終わり周囲を見渡しても刹那を助けようとする魔法使いは存在しなかった。そして、いつの間にか現れたネギと近くに居たはずのこのかが、天守閣の屋上で襲われ、このかとそれを庇った刹那が落ちていく姿を見て憤りを覚えた。

ケイの他にも魔法使いがいたはずであり何故誰も援けに来ないのかと。偶然なのか、このかと刹那が助かり逃げていったことで千鶴は人心地ついた。

憤りを覚え、通じなかったケイに数度連絡を取ったがそれでも通じなかった。折り返しの連絡が来たのは既にそれから三十分以上過ぎた頃だった。

このかに起きた危険を目の当たりにした千鶴としては興奮しており、その憤りを言葉に乗せ、つい強い口調で言ってしまった。“どうしてよ”と。その言葉一つでケイは用件を悟った様子で“シネマ村のことか”と聞き返してきた。

知っていながら放置し、援けに来ない。このかを助けると言ったのに、と千鶴は少々頭に血が上っており冷静さを欠いていた。“どうして助けにこないのか”そう尋ねた千鶴に対し“もう大丈夫なはずだ”とだけ言い、電話を切られた。

ケイとしては既に本山に逃げ込んだから大丈夫だと言ったが、千鶴に通じるはずもなく既にシネマ村でのことは終わった事だから大丈夫だと取った。ケイも疲労困憊しており余裕がなく、千鶴も憤り冷静ではなかったのだ。

直後に、再度掛けるがケイには通じなかった。ケイの今までの言葉は嘘だったのではないかとまで考え、少々深刻に捉えつつあった千鶴であったが、あやかや夏美の前で落ち込んだ姿を見せるわけにいかず気丈に振る舞っていた。しかし、あやか達に見つからない様子を隙を見てはケイへと連絡を取ろうとし不通に終わるといふ繰り返しをその日遅くまで繰り返して、結局一日連絡が取れることはなかった。

子供相手に遊ぶことは多く、演技で怒ることには慣れていたが、心底怒りを覚えたのは数年ぶりといって良かった。ケイに対して今まで不満を覚えることはあっても怒りを覚えることはなかったのだが、今回絶対的に信頼を寄せていたケイが、結果的に嘘を吐いただけでなく、いやむしろその後の対応が悪かったと言わざるを得ない。連絡が取れないのは良いにしても、取れたときに誠意ある対応をしてくれれば、千鶴としては不満を覚えても怒りを覚えることはなかった。それも今回のように友人が目の前で危ぶまれる件でなければ、千鶴の方が冷静にいられたであろうが、残念ながら目の前でのか達が天守閣から落ちる姿を見ておりそれは千鶴から冷静さを奪っていた。

千鶴もいくら外見年齢が高くとも、あくまで中学生に過ぎず、友人の命の危機を目撃した上で冷静に居られなかったのだ。

「高音さん」

千鶴は夜遅くまで何度も連絡を取ろうとしたが無駄に終わったため、

朝早く起き幾度目かの連絡を取ろうとしていた。あやか達を起こさないようにという配慮と聞かれては困る内容であったため外に出ようとロビーにきてみれば、落ち着かない様子の高音がいた。高音とは魔法使いであるとしてケイに紹介され面識があったため声を掛けたのであった。

「あ、ええっと。千鶴さんでしたっけ？」

「はい。どうしたんですか。落ち着かない様子でしたけど？」

「いえ、ちよっと迷っていました」

「何をですか？」

「……実は」

高音は実力不足を自覚しており、一日でも多く修行し一日でも早く実力不足を補いたい。けれども目の前には憧れの京都観光がある。しかし、刀子が学園に戻り修行すると言っている以上それに乗り先に自分の実力不足を補うべきではないか、といったものだった。非常に持って回った迂遠な言い回しであり、高音が京都観光をするために最後のひと押しがほしいことを千鶴は察した。

「……簡単なことですよ、高音さん。今日と明日思いつきり楽しんで、その後修行すればよいのです。リフレッシュすることで修行も捗るでしょうし、何より楽しまないといいのは損ですわ。うじうじ考えるより思いつきり満喫された方が良いでしょう」

「……そうですか？」

「そうですよ。それに高音さんは堅く考え過ぎです。そういうのは先生方に任せて今はゆっくりと満喫された方がいいですわ。肩の力を抜いてね」

「……そうですわね」

「うふふ。よかったですわ」

「ありがとうございます」

「いいえ」

高音としては言ってほしかった言葉であり、それを巧く述べてくれた千鶴に感謝した。修行するほど回復していかないものの、観光に現を抜かすのではなく回復に努めるべきことや、魔力は回復してないが、修行といっても知識方面のものもあり、やり様はいくらでもあった。修行できないからといって休むのではなく今後の修行の間を捻出するために今の時間を使ったり、計画を立てたり、先生にアドバイスを貰いにいたり、修行自体はできなくてもやるべきこと、やれることはたくさんあったのだ。

だからこそ、修行ができないのではなく、修行をしないという選択をしなければ京都観光ができず高音としては思い悩んでいた。

「あ、そうでしたわ、高音さん。ケイのこと知りませんか。昨日から連絡を取ることができないのですが」

「彼なら、先ほど連絡がありました、あと一時間程度でこちらに戻ってきますわ」

「……一時間ですか」

「ただ、休ませてあげてくださいね。瀬流彦先生に昨日の朝からほとんど休みなしで働かされていたみたいですから、相当疲れていると思いますし」

「昨日の朝からですか？」

高音が詳細までは把握しているわけではなかったものの、大体のことを知っていた。ただ、どこまで話していいのか判断が付かなかった。そのため千鶴から話を聞き、少なくとも、ケイ自身はずっと忙しく、このかも危なかったが守られたことだけは伝えた。

「……そうですか。では夕方にでも訪ねてみます」

\*

修学旅行の三日目に昼のことが有ってから急遽瀬流彦が工作を行い、無理やり部屋を空けさせ、旅館にケイや高音たちの部屋を設けていた。守る場所に戦力を集中するためであり、その時点では本山とこの旅館に集中したのだった。

その為、千鶴と同じ旅館にケイは泊っており、部屋を訪ねるのも容易だった。

「起こしてしまつてごめんなさい」

千鶴は夕方旅館に戻ってきた後、ケイの元を訪れていた。高音は夜遅くまで戻ってくる予定はなかったため千鶴に鍵を貸していた。もう起きているだろうと思いつつも気を使いゆっくりと音を立てない様に部屋に入ったが、襖や扉の音にかそれとも自身の気配にかは千鶴にはわからなかったが、ケイは布団から起き上がったところだった。

「気にしないでいいよ。そろそろ起きる予定だったし」

「……それに昨日、怒鳴りつけたりしてごめんなさい」

「いいよ。僕も気が立っていたしね。こちらこそ悪かったよ」

自身の悪戯がばれて怒られる子供のように、俯きしおらしい姿を見せた千鶴は珍しくケイとしても即答で許した。もっともケイからすれば、フェイトとの接触とシネマ村での監視の後での千鶴との連絡の時のことなど怒つてもいなかった。

ただ、自身が監視できる最長の距離を取っていたものの、絶対的な自信がなく神経を研ぎ澄ませ、数十分とはいえ過ぎたケイは直後

の千鶴との連絡時に少々余裕がなく、“どうしてよ”と電話先で怒鳴っていた千鶴を相手にすることはできなかったのだ。雑な言葉とともに電話を切ることで、少ないながらの休憩をとった。しかし、休憩を無理やり終わらされ、本山周辺での刀子の搜索へと向かったため千鶴が来るまでそのこと自体を忘れていた。

刀子の搜索は最初、本山側に頼んでいたのが見つからず、戦力になり難いケイが急遽搜索に駆り出されたため、大した休息も取れず千鶴のことを思い出すほどの余裕もなかったのだ。

「高音さんに聞いたわ。大変だったみたいね」

「そうだね。でも終わった事だし」

既に高音により誤解は解かれ怒りを収めていた千鶴は、ケイの無事な姿だけ確認しようとして訪れていた。その為長時間部屋を空ける気もなく、あやか達を誤魔化すこともできないため、短時間で帰ることとなった。

「……………ありがとう」

そろそろ誤魔化すにしても危ない時間となったため千鶴は立ち上がり、ケイにお礼の言葉を告げた。このかの件で結局のところこのかは守られ、ケイはその為に一日走り回っていたのだ。だからこそ、ケイに謝り、最後に感謝を伝えるべきだと千鶴は考えていた。

短い時間だったが、元気なケイの姿を見たことで千鶴にとって満足のいく時間であり、後日に会う約束を再確認し、その場を後にするのだった。

## 第一四話 修学旅行？（後書き）

シネマ村で千鶴がいたことをすっかり忘れていました。ヒロイン候補を選別する際に深く考えず、読み返さなかったことがまずかった模様。危なかった。

## 第一五話 ヘルマン卿？

「それで、最近ネギ先生が古菲さんにコーチをしてもらっているみたいなのよ」  
「へえ」

修学旅行において自らの力不足を思い知った人たちは各々修行に勤しんでいた。当然、高音・愛衣もその中に入り、今日も訓練場で担当の先生とともに熱心に指導してもらっている。先生の中でも刀子はもちろん、若手の中でも期待されている瀬流彦も今までは修行に對し熱心とはいえなかったが、修学旅行を終えてからは暇さえあれば実力を付けようと努力している。

千鶴が話に聞いたネギのことも同様だった。ネギは年齢の割には充分の実力を持っていた。だからこそ、今はまだ一般人の世界のことを多く学んでもらいたいというのが学園の判断だった。といっても夏に入ればみっちりと魔法使いの修行も並行させるつもりではいたが。

学園の計画では、ネギの修行は最初の数カ月で一般人の世界を知り、教師としての仕事に慣れてきたであろう夏前頃から魔法使い関係の話に持つていく気であった。

だから、学園長の個人的な計画であったエヴァと戦いのことも、夏に入る頃に予定していた。月に一度の満月に血を吸う程度ではエヴァの力はそう多くは取り戻せないはずであったから、夏までになる目算だったのだ。そして、ネギが勝っても負けてもエヴァと交渉してネギの修行を見させる気であった。師としてのエヴァの実力は未知数で有ったが、その類まれなる知識と経験は学園で並ぶものがなく、前途多難だと予想されるネギには良い師になるだろうと考えていた

のだ。

しかし、エヴァが早く仕掛け、その上魔力に関する結果に気付いたことで学園長の思惑は前倒しになった。そして、ネギがエヴァを師に仰ぎうとしていることを、エヴァとの茶飲み話で学園長は知った。

学園長が自身にネギの修行を見させる気があることをそれとなく察していたエヴァは、その玩具に対する遊びとして弟子入り試験を課すことにしていた。合格すれば見る甲斐があるということであったし、落ちれば学園長に対しても断る理由づけや実力不足を理由に報酬を多く請求できると考えていた。具体的には外出権を認めさせることであった。

合格すれば骨のある暇つぶし要員ができ、不合格では面倒がないか観光ができる。エヴァにとってはどちらに転んでも良いことであったのだ。

「ところで、高音さんは修行とかしているのですよ」

「そうだよ。入り浸りだけど、まだ一週間も経っていないからね。」

もしこのまま続けるようなら止められると思うけど、今は様子見だな」

「ケイはそういうのはしなくていいの？あんまり強くないんでしょ」  
的を射る嫌な質問に、ケイは苦笑いを返し、答えた。

「僕は魔法使いとして生きる気はないからね。平々凡々とした日々を送りたいのさ。それに身体は一応鍛えているからそれで充分だよ」  
魔法使いの中でも落ちこぼれや魔法に魅力を感じないものも当然居り、魔法使いではなく一般人として生きようとする人が多数いた。中には魔法を悪用するものもいるため、登録義務などの面倒事はあつるものの、魔法協会等も一般人として生きること自体を止めようと

はしていない。魔力量の低いケイはいつてしまえば、落ちこぼれに属しており、また本人も魔法を使い何かをしたいとも考えておらず、一般的な生活を望んでいた。それは嫌というほど魔法の怖さを思い知らされた母親の存在が大きかったのかもしれない。

千鶴としてもケイのそういった望みを知っており、返事はわかっていただけだから、あくまで一応聞いたに過ぎない。

「そう言えば、魔法使いの修行ってどういうことをするの？」

「普通は使いたい魔法の反復的な練習だね。適性もあるけど、呪文を覚えたからと言って魔法を使えるわけではないんだ。呪文と一緒に魔力の扱いも巧くやらないといけない。それぞれの魔法によって魔力の込め方が違うからね。ネギ先生の父親は、カンペで魔法を使っていたってという噂があるけどもし本当なら余程の天才だな」

“サウザントマスター” 千の呪文を使ったというネギの父親ナギには様々な噂があった。カンペで魔法を行使していたというのもその一つで、千の呪文など嘘だというネガティブな噂であり、誰も信じていない。

反復し練習するから呪文も覚え、魔力の込め方も巧くなっていくのであり、もし噂が本当であれば余程のアホで呪文が記憶できなかったか、全く練習を必要としなかったかである。後者であれば、才能あふれる存在であり、さらに呪文さえ唱えれば如何なる魔法も発動するのであれば、天才と言わざるを得ない存在である。

「ケイもそんなことをしていたの？」

「まあ、人並みにはね」

「今では想像もできないけど、やっぱり子供の頃は魔法に憧れを抱いていたの？」

「憧れ、ではないね。正義感に燃えていた。子供だったんだろう」

ケイにとってその思い出は苦いものでしかなく、思い出したくないものであったため、そのことを表情に出していた。

きっかけは“盗賊殺し”が悪いことではないのかと疑問に思いだしたことだった。だから、強力な広域殲滅魔法で全滅させるのを辞め、せめて殺さない様にすべきではないのかと提案したのだった。しかし、無碍もなく拒否された。曰く、面倒であり手加減する必要がない相手であり、ゴキブリのようにしぶといのだから大丈夫だということだった。

盗賊たちをも死なせないという正義感からケイは魔法を教えるように申し出た。ケイが殺さない様に退治すれば死なないだろうし、また止めるためでもあった。

問題は修行を開始すると今まで盗賊へと向かっていた破壊がケイに注がれたたことであった。死ぬ思いを日常的に経験するようになり、治せばよいとの考えからありとあらゆる魔法を使い、常に実戦での修行になっていった。

倫理観も変わり盗賊のことを忘れ、いつの間にか自身に降りかかる恐ろしい修行から逃げることはかり考えるようになっていたケイは“転移”を身に着けるに至った。ポイント作成という本来ならいらない事象を必要とした欠陥魔法で有ったものの、それにより一気に広域殲滅魔法の範囲外に逃れるようになったことは大きかった。その虐待ともとれるような修行からケイは結局逃れることはできず、最後には母親の方が飽きたという形で終わりを告げられた。

「苦い顔ね」

「……嫌な思い出だ」

雨の日、担任のネギがフラフラで倒れそうな姿を見ながら授業を終え、その日は帰りの途に着いていた。懸案事項であるネギのことはアスナたちが巧くやると千鶴は信じていたし、修学旅行のようなことが頻繁に起こるわけもなく、まだ心配していなかった。当然、翌日も同じようであれば、何かしなくてはいけないとの思いは持っていた。ネギのことを心底心配していたあやかはクラブ活動があったため、夏美と二人連れだつて帰宅していた。

いつもの帰り道を、二人で歩いていると雨の中道の真ん中で倒れ怪我をしている犬を見つけた。千鶴は当然と躊躇することなど欠片も見せず抱き上げ、夏美とともに寮の自室へと連れ帰ることにした。千鶴からすれば当たり前前の行為であり、一般的なことでもあったため、それを為したのだった。しかし、千鶴が予期しなかったことにそれは魔法関係の出来事の始まりだった。

その犬の手当てをしようとして夏美がした時、男の子へと変化したのだ。動揺したものの、夏美に対しては誤魔化しつつ、何をすべきかを千鶴なりに考えた。

まず男の子の治療であり同時に夏美への誤魔化し、そしてケイへの連絡という結論に至ったのだった。千鶴はその通りに医務室への連絡を為そうとしたが、男の子により止められた。“誰にも連絡するな”と医務室への連絡は止められたものの、四十度近くの熱であり、気絶してしまった。

迷いはあったが千鶴はその子の言葉通りに誰にも連絡することなく、甲斐甲斐しく看病をした。そのお陰かどうかは千鶴にはわからなかったが、ひと眠りし食事をしたその子はすっかり熱を治めていた。

記憶を失い、自身の名前しか記憶していなかった小太郎。後で帰宅したあやかに対し、夏美の弟の村上小太郎だと誤魔化したものの、長く続けられるわけもなく、一端誰にも連絡しないと約束したものの、ケイに連絡しようと思いついた。

「小太郎君、いつまでもここに居てくれてもよいのだけど、ちょっと聞いてくれないかしら？」

「なんや？」

「名前以外思い出せないのよね。私の彼なのだけど、そういったことに詳しいから呼んでみたいんだけどいいかな？」

「……………」

千鶴に嘘はなかった。魔法関係に詳しいケイであればこの純粹に人間と言えない小太郎のことは調べられるであろうし、また記憶を取り戻すきっかけになるかもしれないからだ。魔法関係者ではない夏美を前にしていたため、そういった言い方しかできなかった。

「大丈夫よ。彼は口が堅いから決して誰にも漏らさないし、いつまでも記憶がないままっていうわけにもいかないでしょ？」

「そやけど」

「ケイさん、そんなことにも詳しいんだ。小太郎君、ケイさんなら大丈夫だよ、私も会った事あるし。ちづ姉にベタ惚れだから、言うこときいてくれるに決まっているよ」

夏美は記憶障害に関して詳しいと勘違いしていたものの、自身の印象からケイのことを話し出した。小太郎としても、あやかも言っていた通り、あまり長居することも良しとしていなかったため、条件付きで賛成した。

用件を告げずに呼びだすことと、小太郎自身が会ってから診てもらうか決めることだった。小太郎は、いざとなれば自身の足で逃げれ

ば良いと考えていたのだ。

\*

ケイは千鶴に用件も告げられず呼びだされた。

用件を告げられず、と言つても会つて話がしたいから自室に来てくれといったものだった。ケイは嫌な予感がしていた。もっとも、自身が陥っている状況から逃れられるのであればどんなものでも歓迎していたし、なにより千鶴からのことである以上よほどのことがない限り断るといふ選択肢はケイには存在していなかったのだ。つまり、目の前の高音から逃げ出せる口実が生まれたことを意味していた。

学校を終え、帰宅しようとしていたところ、珍しく高音から呼び出しが有った。学園に来た当初、不真面目であるケイに対しそれを更生するようにと呼びだし説教したことも何度となくあった高音だったが、既に諦め最近はそのちら方面では口を出さなくなっていた。もっとも、会えば別であるし、その時は模擬戦を望むなどケイにとつての面倒事を持ちかけて来る。

そのため最近呼び出されることもなかったが、珍しい呼び出しのためそれに応じた。待ち合わせの喫茶店の奥まった席で、一人待っていた高音が切りだしたのは相談という名を借りた、ただの愚痴であつた。

内容は実にケイには理解しがたい“修行をもつとしたいがどうすればよいか”というものだった。三週間前の修学旅行での騒動以降、高音は修行場に入り浸っていた。そのため身体を壊してはいけなさと心配した担当の先生が、修行禁止日を設けたのだ。実戦に勝る訓

練はなく、座学などの大切さは高音としても知っているつもりであったが、修行場を使った訓練をもっとしたかったのだ。正攻法でその決定を覆す術を持たなかった高音はケイに相談をしたのだった。

「どうにかできないかしら？」

「無理だな。それに休むのも修行の内だと思っただが」

「でも！！」

つい気持ちが先行し高音は少々大声をあげてしまった。人がいない場所ではなく周囲に客もいる喫茶店であり、いくら端とはいえ大声を上げれば周囲に注目される。高音もそのことは声をあげた直後にわかり、次は必要以上に小声になった。

「でも、全然足りないわ。ネギ先生だってあんなに小さいのに頑張っているそうじゃない。私も頑張らなければいけないわ」

「……はあ」

ケイは溜息を吐いた。高音の主張は既に理解しており、結論は無理だとわかっているからだ。そして、高音の愚痴に付き合わされることになることを察した。

「愛衣だって最近、今まで以上にやる気を出しているみたいなのよ。だから私もそれ以上に頑張らないといけないわ」

「けど、愛衣ちゃんの身体を壊さないか心配なんだろう？」

「当然よ。あの子はまだ中学生なのだし、私のように特別身体を鍛えてきたわけじゃないのだから、いきなり根を詰め過ぎると身体を壊してしまうわ。だから、先生が愛衣の修行時間を制限してくれたことは良いことだったわ」

「そうだな。それに愛衣ちゃんだけでなく、先生は高音の身体も心配したからこそ、高音の修行時間も制限したんだろ？」

「わかってるわよ。でも、私は大丈夫なの」

高音としても、そのことは重々承知していた。しかし、自身の修行には譲れなかったのだ。愛衣とは違って体を鍛えているのだから、そんなに柔な身体ではないと高音は自負していた。

「と言われてもなあ。結局、打つ手はないのだからおとなしく休んでいた方がいいだろ。それに高音が制限なく修行していたら愛衣ちゃんも心配するんじゃないか？」

「それはそうだけど……。愛衣はわかってくれるわよ。あの子を守るためでもあるのだから」

「でもなあ……。諦めて他のことをしといた方がいいぞ」

「そういうわけにはいかないわ。実戦を想定した訓練が足りないのからもつとそちらに力を入れないと……。ちょっとケイもつとしっかりと考えてください」

ケイからすれば既に二時間近く同じような話のループに陥っていた。結局のところ高音の愚痴に付き合わされているだけであったのだ。このループから逃げ出すのは、高音が是とする修行に関する案をだすか、どちらかに用事ができる、もしくは時間が過ぎるのを待つしかなかったのだ。

「それにね」

「あ、待ってくれ」

だからこそ、ケイは自分の携帯が鳴った事に感謝した。用件は伝えられず、ただ部屋に来てほしいということであったが、一も二もなくケイは飛び着いた。

「……すまない、高音。ちょっと千鶴に呼び出されたから行くわ」

「……千鶴さんなら仕方ありませんわね」

先日の件で高音は千鶴に好印象を持っており、ケイとの話し合いを終えることに同意した。ケイとしてはあまりにすんなり進んだことに驚いたが、都合のよいことだったため良しとした。

「それと、今度会う時までには何か考えておいてくださいね」

高音のその言葉を聞き、再度の招集がかかることを想像し頭を痛めつつもケイは席を立った。ただ一つ、先ほどと違い千鶴の言葉に嫌な予感を覚えながらであったが。

## 第一六話 ヘルマン卿？

ケイが女子寮に着いた時、遠く空の上ではネギと小太郎が杖に乗り、ステージへと向かって行くところであった。しかし、すぐに視界から外れたため、ケイはそのことには気付かなかった。

千鶴の電話自体には嫌な予感があったものの懐疑的であり、状況を理解していなかったのである。そのため、ケイはいつも通り女子寮を訪れただけであり、当然のように千鶴の部屋へと呼び出しを掛けた。

しかし、呼び出しに返答はなく、おかしさを感じながら千鶴の携帯へと相手を変えた。それでも返答はなく嫌な予感を増大させながら同室でありケイとも仲が良いほうの夏美へと連絡を取った。そちらは、待ち時間少なく電話にでたが、切羽詰まった声であり、要領を得なかったため、女子寮に入り夏美が待つ部屋へと向かった。

基本的に、女子と一緒になければ女子寮に入れないことになっているが、夏美の切羽詰まった声と嫌な予感に押され、ケイは急ぎ上層階に走ったのだった。

ケイが部屋に着き、鍵が開いていたため声を掛け入ったところ、茫然とした夏美とソファで寝かせられているあやかがいた。

「あ……ケイさん」

「何があつた？」

夢見心地のような心ここに非ずといった感じの夏美がケイを出迎えた。先ほどまでこの部屋で起きたことを夏美は現実と思えなかったのだ。そして、なにより千鶴が誘拐されるなどあり得ないことであり信じられなかったのである。

「夢、だよな？」

「……どんな内容の夢を見たんだい？」

「えっと……えっとね……」

夢ではないことをケイはわかってはいたが、今はそちらより何があったのか、そして何故かいない千鶴のことが気になり先を促した。夏美はどのようにどこから話していいかわからず、頭の中で整理し出していた。そして、最も重要なことに行きあたり勢いよく話した。

「そ、そうなんだよ、ケイさん。ちづ姉が攫われちゃったんだ。……それでね、ネギ先生と小太郎君が助けにいくって行っちゃったんだ」

「……千鶴が……誰にだ？」

「えっと……伯爵とか言ってたような。それに外人の……ヘルマンって名乗っていた気がする」

その後もいくつかの質問をケイは重ねたが、夏美はヘルマンが来てからの一連の行動に混乱して殆ど話を聞いていなかった。そのため、ケイの発する質問に答えられたものは少なかった。

夏美から取れた情報は、ヘルマンという男が、千鶴を攫いネギと小太郎という少年がそれを助けに行っただけのことのみであった。どこに向かったかというものは欠けていたものの、それに関しては別の方法が有りケイとしては十分な情報だった。

学園内であれば、愛衣や他の術者によって異常な場所や戦闘が行われている場所ということで、すぐに探索し見つけられるはずであったため、ケイはすぐに教員への連絡を取ろうとした。

この状況下においてケイの選択肢は一手目として即行動出来ここに一番早く来れそうな真名を呼びだすことが有り得た。しかし、ケイの考えでは未だに駆けつけて来ない時点で真名はこの女子寮に居ら

ず、また他に戦力となり得る高音も同様であるとした。居ないとしてもネギたちを追い掛けていった可能性もあり、二手目として連絡を取ることは決めていたが、最優先で学園側に連絡を取ることにしたのだった。だからこそ、桜通りでケイがエヴァとやり合った日の真名同様に教員への連絡を行おうとした。しかし、それは叶うことはなかった。なぜなら、連絡を取ろうと携帯を取り出した直後、ケイは直感による最大限の警告により飛び退こうとしたところ、その間なく一撃で意識を刈り取られたのだった。

\*

ヘルマンはネギと小太郎により倒され、人質であった千鶴たちは救出された。ただ、そのことにより三つの問題があった。

一つ目は、侵入に気付かなかったことである。学園では、関西呪術協会の本山にある結界が侵入者を拒むものであるのとは異なり、侵入者を探知するためのものであった。それは人の出入りが激しい学園と術者しか来ない様な本山との役割の違いから来るものだった。学園の結界は魔力に反応し、人間の魔力であれば一定以上の大きさに反応し、そのほかの妖精や悪魔など人間でないものには過敏に反応するようにできていた。

人間、それも魔力が微少なものが何かをしたのであれば侵入に気付かなくても仕方のないことであった。微少な魔力にも反応するように結界を作ってしまうと一般人も侵入者として通知されてしまい、日常的にその対応に追われることになるためである。

しかし、今回の侵入者は悪魔であり爵位までもつ高位なものだったのだ。高位の、それも悪魔の侵入自体も学園設立以来、非常に稀有なことであったが、理論上その探知に問題はないはずであった。悪魔が人間の皮を被ったとしても探知でき、また如何なる隠行魔法も

意味を為さないとはいえずであった。また、転移なども探知は可能であるため、これを探知できなかったのは、何故かを早急に究明する必要があり、そしてその点に関して急ぎ改善しなくてはならなかったのである。

二つ目はヘルマンの協力者が内部に居たことである。短時間で駆けつけネギが勝ったものの、人払いの結果をヘルマンが張っていたとはいえ魔法関係者がそのことに気付かないわけがなかった。

教員に連絡しようとしていたケイを始め、人払いの結果に気付き内部の様子を窺おうとしていた魔法関係者数人も気絶させられた姿で見つかった。各自の証言からヘルマン自身にはそのことは時間的に不可能であり、他の協力者がいたことが明白だったのだ。

その中ではケイが一番の実力者であるという未熟なものしかいなかったが、ケイが為す術なく奇襲での一撃で倒れたことが問題だったのだ。高畑とは言わないもののそのレベルのものか、もしくは余程の隠行の使い手でなければケイを奇襲することは難しいというのが学園としての認識であった。だからこそ協力者の搜索はすぐに開始された。

そして最後の一つは、前の二つに較べれば大したことのない話といえる一方、最も重大な問題ともいえた。人質となってヘルマンに捕えられていたネギのクラスの新入生たちのことである。

学園が把握している修学旅行を終えた時点で、ネギの周囲での魔法を知っている人間は千鶴を除けば、アスナ、このか、楓、古菲であった。当然、刹那などの魔法関係者は他にもいたが、この人質として捕えられた中で、学園も把握しておらず、魔法まで覚えようとしているものが数人いたのだ。宮崎のどか、綾瀬夕映、朝倉和美がそうであった。

修学旅行時にネギによって魔法のことをばらされた三人であったが、学園側はそれを把握していなかったのだ。楓と古菲に関しては瀬流

彦と真名が魔法を知られることに関連しており、瀬流彦が上に報告を上げ、二人を呼び出し、説明を行っていた。このかに関しても詠春が直々に話をしたということとなっている。しかし、のどか・夕映・和美に関してはそれを行っていなかったのだ。

これは、詠春としては当然把握しているものと思いきや、学園長に伝えておらず、また協会内のその後のごたごたで忙しかったこと、またそれは学園長も同様で、エヴァの封印を一時的に誤魔化したことや、詠春への協力と忙しかったため、東西間のそのことに対する意思疎通が遅れていたことが一因であった。

しかし、最大の問題はネギと学園側との魔法がばれたことへの重大さの認識の違いであった。学園側が、魔法を知ることが重大なことであり今後の人生にも大きな影響を及ぼす可能性が有るため、きちんと事情を説明したうえで選択をさせるということが必要だと考えていた。

一方でネギは、その説明は受けていたが魔法使いばかりのところでは育ったため、魔法を知ることが大したことではなく、黙ってもらえればよいというものであったのだ。そして、子供であるネギにとって修行を中止されオコジョにされることへの恐怖が勝ち、報告もしていなかった。アスナに関してはネギを介さず学園長が呼び出して行ったため、ネギの知るところとはならなかったのだ。

これはネギが一方的に悪い問題ではなく、学園側がその認識の違いを早期に発見すべきことであったし、修学旅行時の行動などをもっと詳しく調査すべきであったのだ。

「それで那波さん、何があったか説明してくれるかい？」

「はい」

千鶴が目を覚ました時には既に全て終わり、学園の回収班によりネギたちとともに回収され、保健室にいた。その後、ネギと小太郎の

証言により、夏美を迎えに行つた瀬流彦により連れられてきたケイとともに瀬流彦に話をする事となつた。

これは、事件の証言を終えたネギたちに対し、のどかや夕映、和美のために魔法に関する話を学園長がしており、時間の都合上目覚めた千鶴の話とケイの話を瀬流彦が聞く事になつたためであつた。

「長くなりますが

」

千鶴はケイを呼びだした後、食事中にヘルマンが訪ねてきたことを話した。小太郎が殴りかかったものの、最終的には小太郎がやられたこと、その後ヘルマンから千鶴へと魔法を使うような動作をしてから記憶がないということだつた。

千鶴は気丈にもヘルマンに対し、気押されずビンタをしていたがそのことは関係ないと話さなかつた。エヴァとの桜通りでの遭遇、その際にケイに庇われ威圧が和らいだことを思い出し、気押されず、そして夏美と小太郎を守ろうと自分に注意を惹きつけようとしての行為でもあつたのだ。

ケイから“危険なことをするな”と一喝されることは明白であり、それを避けようとしたのだ。理性ではヘルマンと多少なりとも戦っていた小太郎を心配するよりも戦う術を持たない千鶴自身や夏美を心配すべきであり、気をひくような行為をすべきでないことはわかつていた。

けれども、合理的に判断し子供を放置するほど千鶴にはできることではなかつたし、むしろ感情のままに動いたことを自分自身後悔するどころか称賛していた。

「ふむ。そうか」

「それで、瀬流彦先生、そいつはどうやって侵入したんですか？」

「うん。今のところわかっていない。それにケイクンを襲った相手もね」

「……………そうですか」

夏美とあやかに関して記憶を消す必要もなかったため、千鶴と二人を送りケイはその日帰宅した。

「……………マクダウエル嬢か」

\*

ネギたちの他に早い段階でヘルマンの侵入に気付いたものは二人いた。エヴァと楓である。エヴァの方が早く気づき、楓はその後となり、また楓の気配にもエヴァは即気付いた。

新しい玩具であるネギの修行をつけていたエヴァは、ヘルマンの侵入と捕捉後に放置しネギと戦わせることにしたのだった。かつて学園長がエヴァを使いネギに実戦を積ませようとしたときとやや異なり、実戦を通しどの程度の力をネギが持っているか見極めるためであった。

ネギには遠慮が有り修行の際にいくら追い詰めても全力を出すことはないように思っていた。それはエヴァの察するところエヴァ自身の子供、それも女の子という容姿に起因するところと同時にネギ自身性格によるものだったが、悪魔が相手であれば全力を出すかもしれないと期待していた。

女子寮でのヘルマンの行動を黙認していたエヴァにとってネギ以外の闖入者は邪魔でしかなかった。闖入者がいると、折角のネギの実

力を見る機会が台無しになる可能性があったからだ。残念ながら小太郎という想定外の戦力が参戦していたが、楓に関しては先にエヴァが気付き、止めることに成功していた。楓は実戦に勝る訓練はないと忍者としての修行経験からエヴァを反対することはなく、万が一の時のために待機することにした。

エヴァはさらなる邪魔ものが現れない様に周囲を確認していたが、ケイ以外には大したものも来なかった。高音・愛衣、真名始め実力あり、異常に気付きそうなものは寮内に戻っておらず、教員も未だ校内に残っている状況だったため、エヴァが直接手を降さなくてはならなかったのはケイのみであった。

人払いの結界は一般人を通さないが魔法関係者であれば、人払いの結界に気付き異常を知る。実力のないものであれば、ネギの足を引っ張りネギ自身の实力を見ることができなくなり、実力が有るものであればネギが戦わない可能性が有り実力が測ることができない。結果的にエヴァはヘルマンに協力することとなっていたが、エヴァからすればヘルマンを利用したに過ぎなかった。

桜通りで不覚を取った相手であったものの、今はネギから多大な魔力を含んだ血を供給されており、その修行の相手を勤めていたため勘もかつてほどでないにしろ取り戻しつつあった。

派手にやり合うわけにもいかず、時間を掛けるわけにもいかなかったため、一撃で決める必要が有ったのだ。隠行は数百年前の非力であったエヴァならばともかく、既になく必要としていなかったため難しかったものの、影を使ったゲートとの合わせ技でどうにか奇襲での一撃で成功させた。

エヴァが突然現れケイを気絶させたことに、悲鳴を上げた夏美も同様に気絶させ、自身のことかばれないようにと記憶を消しておいた。

「あそこまでしていいのでござるか？」  
「……アレは那波の男だ。無謀にも取り返しに行くかもしれん。だから、そのような無謀なことをせぬ様に気絶させることで助けてやったのだ」

嘗て桜通りの件でケイと千鶴に手を出さない様にする事となっていた。エヴァとしては今回ケイを気絶させたのを責められれば、楓に対してと同様の言葉を口にするつもりであった。そうすれば、手を出さないという約束を破った事にはならないというエヴァなりの理屈であった。

エヴァもケイの性格を少しは知っており、石橋を叩いて渡りたがるケイが蛮勇を發揮し、ヘルマンの元に向かうことはないと思っていた。止めた理由はケイ自身が向かうからではなく、高畑始め実力者を呼びだすことを止めるためであった。折角のネギの実力を見る機会を壊されないために。

「ネギ坊主は凄いでござるなあ」

「あの程度できて当たり前だ。私が教えているのだから、な」

高位の悪魔であるヘルマンを小太郎という手助けはあったものの、打ち倒したネギに対する評だった。エヴァは内心では自身の工作により、学園側が手を出してくる前に終わり、ネギの実力を測れ、そしてなによりネギが勝利したことを喜んでいた。

## 第一六話 ヘルマン卿？（後書き）

エヴァがケイを妨害したのは、せつかくのネギの実力を見る機会を壊されたくなかったからです。実力を見る機会と述べましたが、訓練では見れない実戦でのという意味で、ましてや相手が悪魔であれば、遠慮というものが無くなり全力で戦う可能性があると見たからです。

ケイとか他の魔法関係者を放置しておく、無謀にも参戦して、ネギの力を測れなくなったり、逆にケイの場合は高畑などの強力な助っ人を呼ぶ可能性があり、そうするとネギ自体が戦わない可能性が有ったためです。

この作品ではエヴァがネギのことを玩具と表現していますが、悠久の時を生きてきたエヴァにとって暇は大敵であり、暇を潰してくれるネギは貴重です。エヴァは年齢と実力から上から目線ですので、この程度の表現であればよいかなあと思って採用させていただいております。

## 第十七話 ヘルマン卿？

「先輩、久しぶりっス」

「久しぶりだな、美空」

逃げる間もなくひょっこりと姿を現した美空にケイは、やむを得ず応じた。幸運にも今回の遭遇では、美空がケイに面倒事を押し付けるためではなかった。

「最近、先輩大変だったそうじゃないっスか」

「まあ、な」

ケイだけが大変というわけではなかったものの、美空はケイを労わった。少なくとも今のところ美空にまでは噂程度しか回ってこず面倒事には巻き込まれずにすんでいたのだ。

現在、学園祭を半月後に控え、その準備のために学園は喧騒に包まれた。もつとも、上層部始め魔法関係者間では別の作業に掛りきりだった。

ヘルマンの侵入時に浮き出た問題のうち二つが未解決だったからだ。如何に探知されずに結界を潜ったのか未だ確定はしていないものの、いくつか候補が上がリその対策のため結界の強化を行っている。

直後から警戒を強化するため、警備員の巡回を強化していたが、二週間何もなかったため今は平常に戻りつつある。もつとも例年通り学園祭前ということもあり、騒ぐ生徒たちのために普段よりは警備員の巡回は多い。結界の強化の用途が立ったため、完全に例年通りになりつつあったのだ。

そして二つ目の協力者の捜索について一向に進んでいなかった。ケ

イに奇襲できるものは中々おらず、そのレベルのものがヘルマンの目的が果たされた以上留まるとは思えず、逃げたと考えられた。また、内部協力者の可能性から調査が進められ、それとは関係ない横領犯が見つかり嬉しい誤算といったところだった。

「美空はこれからシスターと見回りか？」

「うっ、言わないでほしいスよ。でも、学園祭中はあんまり仕事が無くて楽っスよ。ケイさんは今年世界樹の警備っスか？」

「いや、学園祭中はなにもないよ」

「ちよ、ちよっと待って下さい。いくらなんでも学園祭中の警備をサボるのは無理でしょ。それに今年は二十二年に一度の云々で警備が強化されているじゃないっスか？」

例年であつても学園祭中は、普段の警備員だけでなく魔法関係者が一堂に会し交代で巡回に当たる時期であつた。現にケイはこちらに来てから毎年学園祭中は警備員として参加させられていた。

しかし、今年は違った。修学旅行時の活躍で学園長と交渉し報酬の他にこの時期の休みを勝ち取つたのだ。もつとも、何かあれば話は別で呼び出される可能性はあつたが。

「美空の修学旅行で色々あつたからな」

「……ああ、聞いてるっス。ネギ先生が活躍したらしいっスね」

美空は修学旅行時普通に楽しんでいた。少なくとも三日目の夕方から夜中までを除けば、であるが。

美空は戦う力が余りないため、瀬流彦が何も知らせていなかった。けれど三日目の昼ヤバさが一気に上がり、ネギたちが本山に逃げ込んだため一応の納まりを見せていたものの、万が一のために猫の手でも借りようと夕方頃に帰ってきたところを徴発された。

その日の夜中には終結し、また用心のためにエヴァが京都に居続け

たため美空も朝にはお役御免となった。

そのため実際には弊害がほとんどなかったものの、他の魔法関係者よりは詳しい情報を持っていた。

「それなら高音さんたちも休暇になるんスか？」

「いや、高音たちがそんな要求するわけがないだろ。僕だけだよ、そんなことをしたのはね」

「ですよね」

高音たちはむしろ修行の充実を図ろうとしていた。当然、社会奉仕の一環ともいえる警備に関して並行して続けつつである。その交渉であまりに無茶な修行時間を要求したため断られ、またそれでも多くの時間を修行に費やしていたため教員に止められたのだった。

二週間前にケイが相談されていたのも、高音なりに抗議したが無駄であつたためであつた。その相談以来、高音とは理由を付けて会わないようにしていたが、それも時間の問題と言って良く、ケイは何か案を考えなければならなかつた。

「先輩、そういえば最近修行場を借りていたみたいですけど、どうしたんスか？まさか真面目に修行し出したんスか」

「少しはな」

「どうしたんスか。信じられません。先輩が真面目に修行だなんて！！」

美空がケイに声を掛けた最大の理由はケイが修行に勤しんでいるという噂を聞いたためであつた。別にケイが真面目になろうと修行しようとして、どんな心境の変化があつたとしても美空としてはどうでも良かった。いやむしろケイにとって良いことなのであれば、多少の恩返しとして手助けもしていただろう。けれども、これには実害が存在した。

今まで師であるシャークテイに対し、ケイも不真面目なのだからという言い訳をして逃げるが多々あった美空であったが、最近逆にケイが真面目になったのだから美空も真面目にやれという風に変わりつつあったのだ。その上、シャークテイは不真面目な生徒が努力次第で更生したという実例だとして、美空により厳しい修行を課してきていた。

学園内でケイが少し真面目に修行しただけで被害を被ったのは美空くらいのもものだったが、被害者である美空にとっては放置できないことであつたのだ。

「まあ、もうすぐ終わるから安心しろ」

「へ？本当っスか。よかつたっス。そしたら私の生活も元に戻るっス」

ケイは自身の伸び代は既にないと学園に来る前から結論付けていた。それは母に尋ね、はっきりと通告されていたからだ。我武者羅にやり続けていれば何時か道が開けるといふような幻想を持っていなかったケイはそこで自身の才能に見切りをつけていた。必要なかつたこともあるが、それがケイのあまり修行を行わない理由の一つであつた。

が、残念ながら状況が変わってしまった。先のヘルマンの侵入時にケイは千鶴を助けに行くことができなかつたのだ。ネギが助けに行つたと聞いた時点でケイは自身が行く必要が無いことを悟っていた。それは戦力としてネギの方が遙かに上であり足手まといになる可能性はないものの、手助けするほどの力をケイが有していなかつたからだ。だからこそ、ケイは即援軍を呼ぶという形での手助けを行おうとした。しかし、エヴァの妨害という形でそれすらもできなかつたのだ。

修行して強くなるうとはケイは結論付けなかった。意味が無い、と修行での伸び代は既になく、十年単位での努力によってのみしか道は切り開かれなないとケイは考えていた。そして十年努力する気はケイには毛頭なかったのだ。

修行で強くなれないのであれば、道具で強くなればよい。かつてその結論に至ったケイは母との契約を行い、アーティファクトを手に入れた。実にケイに合った逃げるための、そして逃がすための道具であった。

その時と異なり既に仮契約という形での強化はできないため、魔法具に手を出すべきだった。当時もそのことに至り、今でも捕縛結界始め様々な道具を使いこなすことができる。しかし、今必要なものは根本的なものであった。つまり、ケイにとって最大のネックは魔力の少なさであり、それを補えるものだった。

そして、補える物の可能性をケイは知っていた。昔調べて諦めた品の一つであったのだから。

その一つの持ち主は“悪の福音”エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、今では“賢者の石”とも呼ばれる魔力を貯めることができる魔法具である。正確にいえば持っているというより作ることができるというところだった。

失われた技術の一つであり、今ではエヴァにしか作ることができないとも言われている。そして、ケイの知る限り、それを証明するものを目にしたことがあった。

茶々丸である。茶々丸はネジを巻く際に魔力を充填することで活動を可能にしている。エヴァに縛られ常にエヴァからの魔力の供給を必要としているチャチャゼロなどと異なり独立行動可能な存在である。茶々丸の心臓部、動力部こそが“賢者の石”なのである。

自身に足りない魔力量をケイはそれで補うことにしたのだ。だから

こそ修行場を借り“賢者の石”を扱う訓練を行っていた。

\*

ヘルマンの件から数日、美空と会う十日ほど前、ケイはエヴァの元を訪れていた。

「会うのは修学旅行以来か？」

「いえ、つい先日お会いしたところでしょう。千鶴の部屋で」

エヴァはケイの言葉に驚愕した。そのことを表情に出さない様子を気をつけながら言葉を続けた。

「ふむ。何の話かわからんな。そんなことを言いに来たのか？」

「いいえ。ほしいものが有りまして」

もし見つかった時の言い訳は考えてはいたものの、絶対的なものはなかった。むしろ、ケイであろうと見つからずに倒せる自信があったのだ。そして、現に倒せたのだから問題ないと思いきにしていなかった。が、既に一度ヘルマンのことは気付かなかったと学園長に伝えておりその言い訳も通らなくなっていた。

「貴様にものをやる理由はないが聞くだけ聞いてやる」

現在、ヘルマンの協力者は見つかっていない。しかし、ピンポイントに周囲にいた魔法関係者を気絶させたことから内部に詳しいものとされ、またケイを気付かれずに倒したことから腕前はかなりのものとみられていた。もしここでケイがその話をすればエヴァの不利

益となることは確実だった。だからこそ、多少のものであれば目を瞑るつもりだったのだ。

「賢者の石」などほしいのですが」

「バカなそんなものあるわけがない」

“賢者の石”それは遙か昔に発見された高魔力を産み出すものであり、後に錬金術師と呼ばれる人々の間で再現され、作りだされたのはその劣化板であくまで産み出すのではなく貯めこむのみの物質であった。時代が変わり本物の“賢者の石”は既になく、今はその劣化版すらも希少になりつつあった。そのため、二つ両方合わせて“賢者の石”と俗に呼ばれているのだ。

「あなたがお造りになられる方ですよ」

「どちらにしろ、ないに決まっております」

「しかし、あそこにはあるようですが」

ケイが目線をエヴァから外し、茶々丸の方を見た。当然、茶々丸に使っているものを外せと言っているわけではない。

「あれは昔作ったものを流用したにすぎん」

「……明石教授の娘さんに検査を受けさせればどうなるでしょうか？」

吸血鬼にされたものは、治療することはできる。当然、先の停電の夜の際に吸血鬼化したクラスメイトの治療は済んでいる。しかし、後遺症はないものの、検査すれば過去に吸血鬼化されたことが有るかならわかるのである。そして、先の停電の際の事象は暗黙の了解としては知られているものの、細部までつまりクラスメイトを吸血鬼化したことまでは知られていなかった。学園長がその点工作して

いたが、その証拠までは消せないでいた。そして、明石はそのことをしらない。

「……無理だ。材料がない」

材料の最も希少なものは竜の心臓であり、現在市場で取引されているものでもない。エヴァには狩りに行くこともできないため、手に入らないものだったのだ。

「材料さえあれば作っていただけるということでしょうか？」

「いいだろう。ただし、その事を忘れるんだぞ」

エヴァにとって“賢者の石”を作り出す手間に較べれば、遙かに大事になりかねないことであり、ケイの申し出を受けることにした。下手をすれば、ヘルマンに協力していたとして処罰されかねないし、さらに吸血と異なり吸血鬼化までしたことがばれば大問題になりかねない。後者のことが証明されれば、前者を行ったと見做されかねないのだ。

停電の日、学園長が後始末することと久しぶりに解放されたことからテンションが上がり雰囲気作りのために行ったことと、ネギに肩入れするばかり少々危ない橋を渡ったことを反省した。

「ではこれを」

エヴァはケイが早速荷物の中から竜の心臓を始め“賢者の石”を作成する材料を取り出したことに驚愕していた。竜の心臓は今では手に入るものではないが、学園長に聞いたケイの母親の話からそこに泣きつけば手にいれることは可能だろうとは踏んでいた。しかし、この数日間ですら送られてくるわけはなく、前もって準備していたと考えざるを得ない。

「二日間掛るからその後取りに來い」

本来なら一月以上かかるものであったが、別荘が有るエヴァにとつてはその程度の日数で作成が可能であった。

ケイは前に自身の魔力量を増やすことはできないため他から持つてくる案として“賢者の石”を考えていた。母が竜を狩った際にケイは心臓を貰い保管しておいたのだった。

まだ上を目指していた頃であり、学園に來た頃には既にその気はなくそのうち売ろうと考えていたが、今回の件で改めて必要となったため押入れからとりだしてきたのだった。

## 第十七話 ヘルマン卿？（後書き）

美空が久々に登場。口調は一応敬語っぽく『〜っス』とつけとけば、わかりやすいので採用しております。

ケイとエヴァの取引。『賢者の石』といっても劣化版。大した容量はありません。でも、どれくらいにするかは今から考えます。

## 第一八話　メアリー

メアリーは、辺境の村に生まれた。当時から既に帝国と連合の仲は悪く、その関係もきな臭くなりつつあった。正確には有史以来帝国と連合は何度となく和平と戦争を繰り返しており、当時も戦争期に入りつつあったというべきである。戦争前後の混乱期が訪れれば治安が悪くなるのは変わらぬことであった。そして辺境の村の治安など特にその犠牲になった。

当時であれそれまでであれ、魔法世界においては戦争前後の混乱期においてはよくある話であったのだが、山賊に村が襲われた。少々の珍しさが有ったとすれば、その中で奇跡的に生き残ったのは一人の子供だけであった。後に残虐非道の限りを尽くしたと盗賊に恐れられた、『盗賊殺し』の名で呼ばれるメアリーの原点もここにあったのである。つまり、その襲撃で逃げ延びたのはメアリーだけだったのだ。

メアリーがさらなる幸運に恵まれていたのは遠くに住んでいた親類であるお爺さんに引き取られることができたことだった。その彼との山での隠棲生活は短いものであったかもしれないがメアリーにとってはおそらく幸せな時間で有ったものと思われる。彼は魔法使いとしての素養は低かったが、教師としてのそれは優秀だったのだろう。その短い間にメアリーは一人前以上に成長し魔法を使いこなすに至った。

しかし、メアリーが十代半ばに差し掛かった頃、戦争が始まる寸前に彼はなくなりメアリーは一人になった。戦争により様々なものが徴用されることとなるが、まだ戦争初期であり、またメアリーの實力を知るものがいなかったためそういったことに煩わされることはなかった。しかし、隠棲先ということもありメアリーにこれといった知り合いはおらず、既にそこに居る理由を失っており一人旅に出

ることにした。

メアリーは復讐を誓っていた。自身の住んでいた村を壊滅させた山賊はもちろん、ありとあらゆる盗賊に対する憎しみを持っていたのだ。だからこそ、戦争が始まった頃辺境において略奪を働こうとする盗賊などは次々とメアリーの餌食になって行った。

自身の村を襲った山賊が既に別の山賊に敗れ殺されており、復讐を遂げることができなかったメアリーにとってそれは八つ当たりにも過ぎないものだった。いつしか虚しさに近いものを持ち、半年も経たないうちに積極的に狩るのを止めた。既にこのころには十二分に實力を身に着け、近隣にメアリーを止められるものなど存在していなかった。

目に着いたものや気分を害するものに関しては当然別であり、そういったものを狩るのは止まなかった。いつの間にか『ブラッティ・メアリー』などと呼ばれており特定の人間達から勧誘される度に奇立ち八つ当たりを行う日々だった。戦争などという面倒なことに参加する気もなく、食べ歩きなど気ままに生活していた。

\*

戦争から数年、魔法世界の治安は回復していなかった。オステイアの難民問題が一因であったがもう一つ大きな問題が有った。両国の停戦も中途半端な戦力を残してのこととなり、それは警戒をしなければならぬ隣国の存在が常にあるということであり防衛戦力に多大な力を入れつつの復興ということとなったのだ。つまり、国の立て直しに全力を注げなかったこともその一因だったのだ。治安が回復したといわれるのは、戦争から十年以上の時を必要としていた。そんな中、メアリーは運命の出会いを果たしていた。

ある晴天の日、どこに行こうかと相変わらずメアリーは目的を定めずフラフラと旅をしていた。ヘラス帝国を越え、アリアドネーに行くのも良いかもしれないと考えていた頃だった。学問の都市であったが、きちんとした勉強をしていないメアリーには新鮮であり興味を持つかもしれないからだ。

が、その考えを中断せざる得ないことが目の前で起きたのだ。遠くから馬に乗った、いや乗せられた血まみれの男がやってきたのだ。ぐったりした男は既に意識がないのか辛うじて落ちないだけでいつ落ちても不思議ではなかった。

それを見たメアリーは当然のように無視をした。血塗られた男などメアリーには珍しいことではなく、また人助けをするような倫理観などメアリーは持ち合わせていなかった。利点が無い以上助ける気も起きなかったのだ。しかし、残念ながらその進路を馬によって遮られた。

「ヒヒーン」

「はぁ、なんなのよ。全く」

気絶した男の意思ではなく、馬の意思による遮りだった。それを避けて進むうとしても、移動し進路を塞いできた。メアリーは大きく溜息を吐き、男を降ろしてやった。背中に矢が刺さり、他にも多くの傷を負っている男は既に死を待つばかりであり治癒をする意味もなかった。また目覚めることなく死を待つばかりの男を前にメアリーは何ら措置を施さなかった。

「う………うっは……」

「…えっ」

メアリーは治癒魔法を修めた、いわば医者ではなかったものの、多くの死体を見ており目覚めることはないかと断定していた。しかし、自身の考えを覆し男が目を覚ましたことに驚いたのだ。

「お願いします、村を……村を救ってください」

声に反応したのだろう男はメアリーの方に顔を向けそう途切れ途切りに繰り返し返した。目は光を失っており、メアリーを認識していないのは確実だった。おそらく男は村を襲われ一人救援を呼ぶため街に向かうところだったのだろう。馬はその主人の意を汲み、本能的に強者であると悟ったメアリーに対し助けを求めたのだろうか。

心を打たれたわけではなかったものの、死の淵においても村の助けを求める男に好感を持った。そして幼少期自身の村を山賊により失ったメアリーは手助けすることにしたのだった。

「わかったわ」

ありがとう、そう言い遣し男は死んだ。

馬を自由にさせ、メアリーは村に向かった。男が来た方向、傷の具合から距離を計った結果候補は一つの村に絞られたからだ。そして、その程度の距離であればメアリーにしてみれば存在しないに等しい距離だった。

\*

「勇敢な村だった」

山賊に所属する一人の男の言葉だった。勇敢、単純で口にすればたった一単語に過ぎなかったが男は万感を込めていた。目に着いた村だったから襲ったものの、逃げた男は一人、おそらく女子供を逃がす時間稼ぎだったのだらう、全員が最後まで戦った。その逃げた一人として救援を求めてのことだらう、致命傷を負わせたがそれでも馬を走らせ街の方向へと向かって行った。

捕まった者は一人としていなかった。全員が狂戦士のように戦い、全滅した。足手纏いにならないためか辱めを受けないためか自決した者もいたようだった。しかし、充分に時間を稼ぎこちらに損害を与えたため、おそらく逃がしたであろう女子供を追うことはできない。奴隷という収入はなく損害に対してあまりに少ない利益だった。割に合わないことだったのだ。

「お頭、金目のものは全て回収しました」

「よし、では帰るか」

「……………」

男の背後では、山賊の頭目たちが帰還の話をしていた。そもそも、この村を襲ったのは近場に襲うべき村が無くなったため遠出してきたところ村を偶然発見したためだった。だからこそ、村側はこちらに不意を突かれ迎撃の準備もできなかったのだらう。それでもよく敢闘したものだとして称賛を贈った。

男は元連合兵だったが、気に入らない上官を殺し追われる身となっていた。戦争はまだ継続すると踏んで、帝国に雇われようとしていたところ戦争が終わり雇用されることがなかった。多くの時間を戦争に費やしてきた男には普通の仕事に満足できず、また連合から追われる身であるためまともな職に着くことはできなかった。

生きるためとはいえ、このような稼業に着くことを男は快くは思っていないかったが、心のどこかで殺し合いを望んでいた。いや、戦場

で死ぬことを望んでいるのだろう。誰かが、風の噂である『盗賊殺し』の異名を持つ化け物が、殺してくれるのを望んでいるのかもしれない。

その姿を見たもので生きているものは居らず、山を吹き飛ばし地形を変えるような化け物である、と。話し半分に聞いても恐ろしい化物だが、おそらく傭兵団か何かだろうと男は推測していた。北のケルベロスという巨大山賊団も潰されたと聞いており、少なくとも十数人規模のかなりレベルの高い魔法使いを擁する団体だと踏んでいた。

頭目達から離れ一人村を巡回していた時、何かに呼ばれた気がした男はある家の中に入った。そこは既に荒らされており金目のものもなくなっていた。だが、男の直感は優れていたのだろう、板の間のある場所を歩いたところ、音の違いに気付き板を剥がした。地下へ続く通路が存在していたのだ。男は放置することも考えたが、行くべきであると直感はいっていた。何度となく戦場で、直感により救われてきた男はそれに従った。

階段を降り、一本道を進んだ先に有ったのは大広間だった。そこには一人の女が子供を抱き眠っていた。いや、女の方は死んでいた。おそらく産気づいていたため、逃避行に耐えられないと思われ隠されたのだろう。そして、女は村での戦いの最中、子を産んだ。しかし、それに耐えきれない身体だったのか女は死んでいた。

「……………殺すべきか」

「……………」

子供を眼の前に男は迷った。このまま連れて帰ればこの子供には巧く行っても奴隷としての人生が待っているであろうことは容易に想像できた。が、自分たちは戦いを終え気が立っている。その上目当ての利益をほとんど得られず機嫌が悪い。殺されるのが関の山だと

男は考えた。

そして、このまま放置しておけば誰かがここに来る前に死ぬ、と。同時に声一つ上げず睨みつけて来るかのような表情をしている子に興味を覚えた。

どれくらい経っただろうか、睨みつけるような赤子に対し自身も睨み返していた。微かな声だった。空耳と片付けるところだったが、男には悲鳴だと思えた。そして、直感はここを離れるなといった。ここを出れば殺されるということが男には理解できていた。

「……………」

目を瞑り、数瞬経て男は笑った。そして、赤ん坊をそこにおき、その場を去った。それは殺されるために、望みを叶えるために。

\*

赤ん坊の前に再び人が現れたのはそれから十数分を要した。頬に傷を負った女、メアリーだった。

「ふむ。これが赤子か」

「……………」

「一丁前に睨みつけてくる、か。気に入った。お前の名はケイだ」

男は相当な手練だった。メアリーに傷を負わしたのだから。強力な魔法障壁を抜き、ただの剣でそれを為した男にメアリーは敬意を払い、名を聞いた。ケイ、それが剣士の名であった。メアリーが知ることはなかったが、剣士でケイと言えば連合では『剣聖』と讃えら

れた男だった。

死ぬ間際この事だけを話し、ケイは満足気な表情で逝った。軍隊を相手にしても傷を負ったことのないメアリーはその望みを聞き、そして会った赤ん坊を気に入ったことで自身が育てることにした。それは当時においては気紛れであり、ただの暇つぶしであったが

\*

という話じゃ

「ほう、そんなことがあったのか」

エヴァは学園長を見なおした。メアリーの性格は知らないものの、過去の話をするといいことは親しくしているのだろう、と。茶飲み話にケイがその素養から考えればとてもメアリーの子供とは思えない由を伝えたところ、話した事だった。

素養に比べ、実力はその限界まで高められていることを鑑みればケイは相当の訓練を積んでいることが窺えた。余程、師に恵まれているのだろうとエヴァは考えていた。

「ふむ。その後、子煩悩になり、あっちより治安の良いこちらに移ってきたらしい。ケイクんの為じゃろうな」

「だろうな」

「今でも連絡を取りおつておるようじゃいな。子煩悩じゃて」

子煩悩、エヴァにも隣に立つ茶々丸や最近修行を見ているネギのことを考えれば似たような感情を持っているのではないだろうかと学園長は思ったが、同時にエヴァ自身がそのことを認めることが無いことも知っていた。

「お、そろそろ時間だな。じじい、タカミチ、じゃあな」

エヴァはネギとの修行の時間が近づいてきたことで、部屋を出て行った。少し遅れて茶々丸が丁寧に頭を下げそれにつき従って行った。

「……よろしかったのですか？」

エヴァが出て行って少し経った部屋で、高畑が口を開いた。

「かまわんじやろっ」

「しかし……調べればすぐわかることですし、ばれたらエヴァが何と言うか」

「フォツフォツフォツ、それも一興じゃて」

悪趣味な。口には出さなかったものの、高畑の率直な感想だった。

帝国の事までは知らなかったが、少なくとも『剣聖』と呼ばれる剣士は連合にはいなかった。

戦争から数年と言えば『紅き翼』として各地を巡っていた頃だと高畑は記憶している。当時の魔法世界で村が壊滅し女子供だけ助かったなどという話は聞かなかったし、そこまでの悲惨な状況であれば確実に情報網に引掛かったはずである。

つまり、高畑の結論ではこの話は嘘なのだ。おそらくエヴァをから

かう為の。ケイの年齢を考えれば、当時エヴァはナギの追っかけをしていた頃。高畑は別行動で多くの時間を魔法世界で過ごしていたが、旧世界にいたエヴァはそうだった情勢を知らない。

そして、この話をした目的はケイの背後にはメアリーがいるため、手を出すなという警告だ。ケイは捨てられてここにいるのではなく、今でも連絡を取り合っていることを述べているのだ。

現に夏期には、長期の休暇が申請され通っている。魔法生徒であるため、一応申請を出すようになってはいるが基本的には素通り。高音たちとともに魔法世界に訪問させる話も出ていたが、それで立ち消えた。

「はあ」

そんな嘘話などせず、ただ最後の事実のみを話せば事足りることを実に遠回りに話し、時間を要したものだ。高畑は溜息を吐いた。学園長の道楽も付き合いきれないと高畑は再度の溜息を吐くのであった。

第一八話　メアリー（後書き）

メアリー分が足りないと思ったので書きました。

## 第一九話 麻帆良祭？

「ふむ。それで良いんだね？」

「はい、もちろんです」

「……待ってえな。ちづ姉ちゃん。俺は姉ちゃん達のところに世話になる気はないって」

「あら、ダメよ。もう夏美ちゃんにもあやかにも言っちゃったしね。小太郎君はもう夏美ちゃんの弟の村上小太郎よ」

「でもさあ……」

ヘルマンの侵入直後、式集院を前に小太郎の処遇について話し合われていた。あの時から小太郎は千鶴の部屋に住んでおり、そのままなし崩し的に住まわせようと千鶴は考えていた。しかし、昨日呼び出しが有り正式な場がこうしてもたらされたのだった。

千鶴は知らなかったがこの間、小太郎の取り扱いについて関西呪術協会と話し合いがもたれ関東側で暫らく預かることとなっていた。

ヘルマン侵入時の功績と小太郎自身の希望によるものだった。

その話し合いの間にも小太郎の住居問題は出ていたが、何だかんだいって小太郎が千鶴を説得できなかったため式集院が連れて来られる形での話し合いとなったのだった。

千鶴としては半ば孤児である小太郎に対して姉代わりのようにその間の交渉にも多少なりとも関わっており事情も理解していた。結果的には小太郎は転校という形で麻帆良の初等部に所属することは決まっていた。

問題は住居に関する問題だけで初等部の寮で部屋を用意することを提案したが、千鶴が一蹴したのだった。

「……しかしねえ、小太郎君は魔法生徒になるのだから部屋を用意した方が、良いと思うんだ。一般生徒も君の部屋に住んでいるのだ

るう？」

「あら、式集院先生。ネギ先生の件は放置しておいてこちらはダメなのですか？」

「うっ……」

式集院としては痛いところを突かれた形だった。教師と生徒で異なることや魔法学校を卒業していることを理由に挙げたいところだったが、千鶴がどのように反論するか目に見えており、式集院としてもそれに再反論する術を持っていなかったのだ。

「……でも本人も嫌がっているしね」

「そうやで姉ちゃん」

「…小太郎君は私と暮らすのがそんなに嫌なの？」

「……そ、そんなことないよ」

式集院の別の角度からの攻めに対し小太郎も乗ったが直ぐにそれは萎んだ。千鶴は言葉とともに泣き顔を作り、顔を伏せたことで、小太郎としても強く言えなくなったのだ。途端に弱腰に為らざるを得ず、それは式集院も同様だった。泣き落としが最も有効であることを千鶴は知っていたのだ。

「千鶴、その辺でいいだろ」

今まで黙っていたケイが漸く口を開いた。式集院に困った顔で見つめられ、促される形での発言であり、本人としては止めるのは不本意だった。千鶴が望むのだからそれもよし、と小太郎の同居にケイは反対しなかったのだ。

夏美やあやかに魔法がばれる心配は千鶴が居る限りないだろうし、さらに小太郎は魔法を使わないタイプのため全く心配していなかった。孤児であり、家庭を知らない小太郎に疑似的とはいえ自分が姉

になり夏美達とともに家庭の温かさを教えたいという千鶴の考えに反対するほどケイは非情ではなかった。

「式集院先生、一先ず様子を見ましようよ。先生方もこれから忙しくなりますし、麻帆良祭が終わってからもう一度聞くというのはどうでしょうか？」

「……しかしねえ」

「その時だったら、千鶴も小太郎くんの言う通りに従うよな」

「はあ、仕方ないわね。わかったわよ」

妥協点として期限を延長することを申し出たケイに対して千鶴は不満を表に出しながら肯定を示した。

「……一カ月だけやからな」

「では式集院先生、そのようお願いします」

「……わかったよ。ケイクン、今回だけだからね」

千鶴と同様仕方なくと言わんばかりの表情を見せた小太郎の同意により、式集院も折れ、一カ月後に持ち越しとなった。もっともそう思っているのは小太郎だけで、他三人は別の結論に至っていた。

千鶴は当然なし崩しの既成事実とするつもりであり、このまま小太郎を居座らせることにしていた。当初反対していたあやかに対しても既に説得済みであり後は時間を掛けて小太郎の気持ちを変えるだけであったのだ。“家族の団欒ってカンジでなんやうれしーわ”、そう口にした小太郎の寂しそうな目やそれからの数日間以小太郎に同情心を膨らませている千鶴としては今さら独り暮らしをさせるといふ選択肢は存在していなかった。

ケイは当然として式集院も実は千鶴達と暮らすことに賛成だった。問題は魔法の秘匿だったが、小太郎は魔法を使うタイプではないため心配ない。また、後一年にも満たない時間であり、侵入騒動な

どは現在魔法先生を総動員して対策に当たっているため今後二度と起きることはないと踏んでいた。さらに、式集院の知る限り小太郎が狙われる事情はなく、また千鶴も同様であり危険という意味での反対理由は存在しなかったのである。

“暖かい家族の団欒を”という千鶴の考えも同意でき、小太郎が強いといってもまだ子供、そういったことも必要だろうと判断したのだ。また、小太郎も不満を口に出しているが、それほど嫌がっているようには式集院からは見えなかった。

だから、この話し合いは小太郎を説得する話し合いであり、学園との妥協点の探り合いではない。当然、一カ月後にはよほどのことが無い限り、小太郎の住居が変わることはない。その為、小太郎が密かに一人で住居を探そうとしたところでそれは無駄に終わることだった。

\*

「あんなん卑怯やわ。道具に頼るなんて男らしゅうない。男やったら拳で勝負せんか!!」

「小太郎くんも氣を使っているんだからおあいこだろ」

「俺は自分だけの力で戦うとる。兄ちゃんは道具使つとおるやんけ！」

「剣士に剣を使うなっついていっているのか？剣士が剣を使い、銃使いが銃を使う。僕も道具を使う、何の問題もないだろ？」

「剣士の剣とはまたちゃうやん、それはさ」

「違わないよ。どちらにしる、一度の勝負の約束だったからね。次からしつこく言い寄って来ない様にな」

小太郎が千鶴たちの部屋に住むようになって二週間。学園の案内や

説明などを不本意ながら任せられたケイは小太郎と何度か会うこととなった。会う度に京都での恨み事とケイとの勝負を口にする小太郎に対しケイは当然断っていた。

“俺に負けるのが怖いんやな” “うん、そうなんだよ。だから、勝負するまでもなく小太郎くんの勝ちだ” という子供じみた小太郎の挑発に対しケイはさらっと流すことで対応していたが、それもまた小太郎の怒りに油を注いでいたことは言うまでも無い。

しかし、何度目かの案内時、千鶴が同行した際、小太郎が千鶴に泣きつきケイも厭々勝負することになったのだ。丁度、エヴァからの品も出来上がり扱いに慣れてきたところであり、そろそろ高音にでも相手をしてもらおうかと考えていたケイにとっては相手を変更しただけに過ぎない。

もちろん、厭々ながらという態度を見せたのは、複数回を必要としていないため一回だけで文句を言わないという条件にするためであった。

「男だったら約束を守って文句を言うな」

「……くっ」

苦虫を噛み潰したような表情の小太郎は、一人再戦を誓った。

そもそも小太郎はそれほど強くはない。パワーもあり接近戦になれば力を発揮するものの、何分子供であり思考が単純だった。そのため畏やブラフなどに気持ちいいほど引っ掛かる。小太郎はその境遇から幼いころから仕事を行っていたが、実戦経験は然程豊富ではない。敵とみれば突っ込むような子供に実戦を踏ませなければならぬほど、呪術協会始め裏関係の仕事が人手不足に陥っているわけではないのだ。

「今度は必ず勝つからな!!」

「今度はないって。……どうしてもっていうなら高音に勝ったら考

えるよ」

「高音？」

「京都で戦った影使いの」

「……女やんけ。女を殴るのは趣味やない」

「だろうな。じゃあ、殴らず勝てるようになったらいいだろ」

「そういう意味やない。女と戦うこと自体を」

最後まで聞く気のないケイはその場を後にし、一人小太郎がその場に残されることとなった。一応、今のところ観察対象でもある小太郎はむやみやたらと戦うことを禁止されていた。特にネギに対しての挑戦は禁止されていたのだ。だから、小太郎としては手近なケイに挑んだのだということもあった。

ただ、ケイは一枚のチラシを渡し小太郎を諭していた。格闘大会にネギと出れば、学園側も何も言わないから戦えるよ、と。

\*

「はあ、相変わらずケイは……」

高音は一人溜息を吐き独り言を呟いた。世界樹前広場、十五人の魔法関係者が揃っていた。学園長や高畑始めとする教師陣、高音や愛衣、美空、そしてこの度一時的に魔法生徒となった犬上小太郎だった。あとは少々遅れているネギと刹那を待つばかりだった。

高音が溜息を吐くには事情がいくつかある。ここで麻帆良祭のシフトが言い渡されるため気落ちしている事がその一つだった。解っていたことであつたし逃れる方法が有つたものの高音なりの正義感が逃げることを許さなかつた。しかし、一般人である友人たちと会う時間が減るのは少々の溜息程度なら許されるはずである。

次に集まりの悪さだった。特に男子学生系の魔法生徒が小太郎のみというのはどうなのだろうか、と。祭りを前に準備に忙しいことも理解できるが、こちらでも大事なことだろうとこれもまた高音の溜息の原因となった。

そして最後はケイである。他の魔法関係者は一応理由あつての、用事が有つての欠席だったがケイだけは積極的にサボっていた。麻帆良祭の警備の集会なのだから、来る必要はないとのこと。確かにそれは正しいのだが、小太郎とネギの顔合わせと今までは半分外部要員扱いだった刹那も正式に参加するのだ。顔見せ程度に来るべきだったのではないだろうか。欠席した関係者の中では、折角英雄ナギの息子に会える機会だったのにと嘆いていたものもいるにもかかわらず、だ。何度目かの溜息を高音は吐く。今度は今までより大きな溜息であつたように思えた。

「姉ちゃんが高音やつけ？」

「そうですね」

「姉ちゃん、俺に負けたつてことにしてくれん？」

「はい？」

小太郎の少々突飛な言動に高音は驚いた。が、事情説明を受け、またケイ関連の面倒事かと解ると少々顔を顰めざるを得なかった。

「……………つまり、ケイと勝負するために私に勝つ必要があるけど、女相手だと戦いたくない、と」

「そうなんや。女と戦うんは趣味やないんや。だから頼むわ、姉ちゃん」

両の手を合わせ、頭を下げて来る小太郎に対し高音は溜息を吐いた。別に子供相手に勝負にこだわる気はない。また、高音からすれば女だから戦わないというのはあまり好ましいことではないが、そうい

う部類の魔法関係者を何人も知っていたため、それだけで小太郎に苛立つたりしない。その上、ケイにそのあたりの話題で散々弄られてきた高音からすれば、純粋な気持ちでそのような考えを持っている小太郎に少々の好感を覚えはした。

しかし、負けを表明することはできない。内々のことであるだろうし周囲の評価などあまり気にしていないためそれだけなら問題は無い。ただ、相手がケイであるという事だけが問題だった。

ケイは決して認めないだろうし遠慮願いたいと思っただろうが、高音にとってケイは越えるべき壁の一つである。奇をてらい、正面からやり合わず逃げることを第一義的に考えているケイのやり方は好きになれないものの、必要な行動であるし認めてもいる。だからこそ、正面から戦うことの多い高音が倒すべき越えるべき壁なのだった。

高音が考えるに、ケイの事だから小太郎に負けたことを理由に高音との戦いを行わなくなることは火を見るより明らかだった。雪辱の機会が減ることは到底高音としては看過することはできないのだが、一方ここで断った場合にどうなるかが問題だった。京都での一件の時の実力から察するに小太郎は高音には及ぶ力を身につけてはいない。おそらくケイの考えは二人が切磋琢磨し戦い合って自身への興味を薄れさせることにあると高音は察した。その考えに乗ることは非常に癪なことであるが、小太郎の近接戦闘には見るものがあり、影を操る練習にも使えるかもしれない。女を相手にとっても自身で無く影に相手をさせれば問題ないのではなかるうか。

「おう、来たようじゃな」

学園長のその声にネギたちが来たことが皆に知らされる。小太郎の興味もあちらに移ったようであるし、今返事することもなさそうだった。思考の海から漸く戻った高音は頭の片隅にその話を追いやり、学園長の話に耳を傾け出した。

## 第二十話 麻帆良祭？

「よろしかったのですか、高畑先生」

「貳集院先生、僕が責任を取るから大丈夫ですよ」

「……………嬉しそうですね」

「ネギくんにアスナ君、僕にとっては特別ですからね。特定の子に肩入れするのは教師失格です」

高畑は苦笑いを浮かべながらそう呟いた。あの祭りから一週間で過ぎようとしていた今、漸くネギたちが見つかった。

この一週間の間に世界は大きく変革を遂げつつあった。無血で行われた革命、いやテロにより全てが変わってしまったのだ。超鈴音による強制認識魔法により魔法の事が世界にばらされたのだ。見事としか言いようが無く、高畑はその手際の良さに感心をしていた。もともと、他の手段や方法を取ることはできなかったのかとも思っていたが。

既にルールが変わったのだ。高畑たちもそちらに対応せざるを得ず、他の魔法先生達とともにこの一週間殆ど寝ずに処理に当たっていた。本国も混乱していたのだから三日前になって漸く指示がやってきた。遅すぎる指示にもかかわらず内容は実にシンプルなものだった。学園関係者をオコジヨの刑に処するとの通知のみだったのだ。

偶々、その通知を受け取った時に傍にいた高畑は学園長の“馬鹿どもが、深刻さを何も理解し取らん”という吐き捨てるような呟きを耳にした。誰に向けられた言葉かは言うまでも無い。

「まあ、貴方にとっては娘や息子みたいなものなんでしょう？仕方ないんじゃないですか。僕もこの娘のことは特別視してますしね。けど、どうするんですかね、これから」

「タイムマシーンを使って過去に戻るのでしょうか」

「そんな話、僕にはとても信じられないのですが……」

「ハハハ……、僕もネギくんの話じゃなきゃ信じませんでしたよ。」

それに……」

「それに？」

「彼も同じことを言っていましたからね。信じざるを得ません」

ケイはネギの行方不明に対し一週間後に帰ってくる由を述べていた。曰くタイムマシーンだと。それを聞いた式集院、高畑両名は信じる事ができなかつたし、忙しさにかまけて報告をしなかつた。荒唐無稽だと思っていたし、直後にオコジヨの刑の通知が来たためでもあつた。

「ケイくん……ですか。これは彼への疑いも晴れますかね」

「無理でしょう。むしろ深まるのではないですか？」

ケイには疑いが掛けられていた。超鈴音に協力したのではないかというものである。魔法関係者の中で超に飛ばされなかつた者は何人かいたが、その中でもケイの行動は他の魔法関係者に疑われても止むを得ないものだった。あの強制認識魔法が発動するまでの行動が不明の者も多いが、発動後も所在に関しての裏がとれていないのは彼だけだったのだ。今のところ、魔法関係者の間で話に上がる程度であつたし、先生方は忙しいため取り調べも一度きりしか行っていない。その時にネギの行方についても話が及んだが、ネギの今回の証言と一致したのは拙かつた。そのことが知らればより嫌疑が深くなる。

「さて、いつ僕らはオコジヨにされるんでしょうね？」

「……パパ」

娘を抱きしめる手についつい力を入れてしまうもおどけた表情を浮

かべつつ式集院は高畑へと尋ねた。娘との別れは辛いものであるが、それは仕方のないものであるという諦めを式集院は抱いていた。

「それなんですけど、どうにかなるかも知れません。僕はネギくん  
のことで問題になるかもしれないませんが、学園長があれからかなり動  
いていますから」

「……これからなにが起きるか解らない混乱期になるのだから有用  
な人材を閉じ込める余裕はないはず、ですか。おっしゃることはわ  
かっているのですが、本国が現状を認識していると思えませんし、  
一度決定したことを覆すのは難しいと……」

\*

麻帆良祭初日、昼を過ぎ夕方になり差し掛かろうとしていた頃ケイは千  
鶴と待ち合わせをしていた。毎年恒例であった魔法関係者による警  
備関係の巡回も今年特別にある世界樹関連のパトロールもケイは免  
除されていた。一応、何かあれば呼びだされることはあるが、例年  
それほど大きな事件など起きておらず、そんな事態に陥ることはな  
かろうとケイは考えていた。

ケイはクラスの出し物、千鶴はクラスと天文部のプラネタリウムに  
時間を割いていたため、待ち合わせが夕方近くとなったのだった。  
初日は夕方からのみとなってしまうが、二日目と三日目はそれよ

り多く時間を割ける予定であり、夕方ともなれば出し物なども少なくなつて来ておりそちらを回るのは後日となるのは請け合ひだった。

「あら、先に来ていたのね？」

「今回は僕の方が時間を余らせているからな」

「…………… そうだったわね。去年はクラス以外の時間で会えない時間があつたからちよつと浮気を疑つたわね」

「…………… あちら関係で動員されていたからな。その上、運悪く高音と一緒にいたところを目撃されたしね」

「そういえばあの時の女性は高音さんだったの。ケイの方に目が行つて女性の事は覚えてなかつたわ」

付き合ひだして半年ほどの時期の事であつたが、千鶴は大幅にそちらに時間を割くケイに理解を示さなかつたし、ケイ自身も理解を求める努力を怠つていた。さらに、この広い麻帆良において不運にも高音と組まされて巡回しているところを千鶴に見つかつてしまったのだった。それも高音がケイの手を引いて歩いている姿を目撃したのだった。ケイが逃げようとしたところ見つかり無理矢理連れられていられるところだったが、千鶴は少々遠くから見ているため表情までは読み取れず仲良く手を引いているように勘違いをしたのだ。千鶴としては祭りという特別な日であつたが、ケイからすれば巡回させられる面倒な日でしかなく特別な日と捉えていながつたのも大きかつた。

翌日、暗い笑顔を浮かべる千鶴に怯えながら同室の二人が声を掛けケイが呼び出されることとなつた。その際、ケイは初めてあやかと夏美に知り合うこととなる。大騒動となりかけたところ、偶々通りかかつた千鶴達の担任である高畑により収められることとなつた。ケイの普段の行動と高音の為人を知っており、またクラスの担任として千鶴達から一定の信頼を得ていた高畑だからこそできたことだった。

主因は警備関係者であることを普段何もしないため言わなかったこと、祭りの時の活動に参加させられることも説明していなかった事があった。もつとも、ケイからすれば尋ねられなかったからだといったところだが、全面的にケイが悪い事に違いはなかった。

「じゃあ、いこうか」

「ええ」

その意味で今回の祭りでは警備などを逃れたのは面倒事を避けたというより、昨年の嫌な思い出を繰り返したくなかったからなのかもしれない。既にあの頃から一年が過ぎ大きな信頼を互いに寄せており、魔法関係の話までできるようになった今となっては起きえないことであつたが。

\*

「あら、あれは……」

世界樹前広場へと繋がる大階段を登りきろうとした時、階下にあるベンチの方を見て千鶴は呟いた。ケイも声によりそちらをみれば、ベンチに座つたあやかのお膝枕でネギが眠り、その向こうの花壇のレンガ部分に寝転んだ小太郎が眠つていた。

「……あー、どうする？」

「うーん、そうね。まあ、いいんじゃないかしら」

ケイからすれば子供二人の面倒を見ているお姉さんであるあやかの手助けをするか、という問いだった。おそらく、ケイがより詳しく

あやかのことを知っていたり彼女の今の緩んだ笑顔をみれば別の問いになったであろう。しかし、今のところそこまで詳しくも無く下を向いているあやかの表情まで見えないケイは純粹に手助けをするか、という意味で問うたのだった。

しかし、千鶴からすればそれは違った。あやかのことを詳しく知っている千鶴からすれば彼女が今どんな表情をし、どのくらい喜んでるか想像に難くない。そのため、小太郎をこちらで引き取るなりして二人きりにさせてあげるかが問題だった。二人きりにしたところで、あやかが理性を失い問題を起こすとは到底思わなかった。しかし、同時に現状でも充分であるがさらに小太郎とあやかの仲が良くなるに越したことはなく、ネギを緩衝材としてそうなるかもしれないとの期待を抱いたのだった。

また、ケイも千鶴も互いに折角の二人きりなのだから態々合流する必要はないと思っており、当然と言えば当然の帰結である見なかつた事にしてその場を後にすることとなったのだった。

「じゃあ、いこ」

ケイが世界樹広場方面に向かおうと声を掛けたところ、その言葉を口にし終わる前に異変を察した。世界樹付近で光の柱が登ったのだった。その意味をケイは理解することができ、また目に着いた何人かの魔法関係者の動きが変わったことでそれを確信した。

世界樹の魔力により現在その周辺では告白すればそれが成就しやすくなっている。二十二年に一度の問題であり、さらに来年だと予測されていたものだった。しかし、今年に世界樹の魔力が問題となる事が解つたのは既に麻帆良祭の日取りの変更ができないタイミングであったこともあり、秘密裏に阻止するという決定が下った。

ケイとしてはそのことに批判的であるものの、基本的に自身に被害がない時点でどうでもよかった。パトロールの役割を免除された時点でケイにとっては意味のないことだったのだ。

光の柱が登ったということは誰かがそれを意思の有無にかかわらず利用したということだった。だからこそ、早急に対応しようとするところへと魔法関係者は向かって行ったのだ。

「どっしたの？」

光の柱、今は祭りの最中であり花火なども飛び交う。その中でのことであり一般人は綺麗な程度に思っていたが、千鶴はケイがそれを見て沈黙したことで何かあると踏んだ。

「……気にしなくていいよ。この間話した事さ。何人が向かったみたいだから大丈夫だよ」

告白の成功、まだ成功率の大幅な上昇程度であるが、三日目になれば絶対に成功となる。それは魔力による洗脳であり、非常に強い意志が周囲の魔力によって叶えられるものだった。しかし、同時にそれは魔力により為される魔法に過ぎない。魔法である以上魔法により解除できるのだ。特に今は周囲に魔力が充満しており、一般人よりその恩恵を受けやすい魔法使いが解除できないわけがない。

だから、何人かの魔法使いが向かった以上、ケイのやるべきことはないのだった。非番である以上、誰も向かわなくても行く気はなかったが。

しかし、今回はネギがその告白を受けたため問題は大きくなっていった。並みの魔法使いであれば抑えきれないのだ。そのことを当然知る由もないケイはお気楽なものだった。

「話は聞いているけど、行かなくていいの？」

「もう何人が向かったからね。僕がすべきことはないさ」

\*

「あら、まほら武道会？名前が変わっているわね」

「そうみたいだ」

「小太郎くんは予選は通過したみたいね。それじゃあ、ケイ。私はこのあとクラスの打ち上げに行くから」

「じゃあ、また明日」

まほら武道会の予選会場、小太郎が出場するということで来てみればネギ・高畑・アスナ・刹那・エヴァ・楓・真名・古菲と新旧担任とクラスメイトに高音に愛衣と予選通過者の名前をみれば知り合いばかりで千鶴は少々驚いた。

翌日の昼過ぎまでの予定はこれで埋まる事が確定したところで、各々の用事のためケイと千鶴はその場で別れることとなったのだった。「……………で、どうしてこんな大会に出ているんだ？」

千鶴がネギたちの元に向かって行くのを見つつ、ケイはそう背後の人物に声を掛けた。

「そ、それはネギ先生の眼に余る行動を見かねて……………」

「ほつとけばいいじゃないか。それに愛衣ちゃんはこのというのは苦手だろ」

「それはそうですね。愛衣も修学旅行以来修行を欠かさず行っています。特に戦闘訓練を重点的に行っていますからそこそこは行くと思いますわ」

「相手は小太郎くんだろ？」

「それでもです」

大会ということであり愛衣のような引込み思案な性格の持ち主は実力の半分も出せないとケイは思っていた。修学旅行以来見る機会が無かったため愛衣の実力は知らないが小太郎に勝つほどでないことは確かだった。その上、実力の半分も出せないとなれば下手をすれば……。

愛衣の様子をみればそれは一目瞭然で、少々涙目であった。高音に半強制的に参加させられたのであることは自明だった。

「それでネギ先生のどんな行動が眼に余ったんだ？」

「世界樹の件でミイラ取りがミイラになったのですわ。その上、反省すると先ほど言ったにもかかわらずこのような大会に参加するなど言語道断です」

「それはいつの話だ？」

愛衣のことを言われているときは弱気だった高音はネギの話になった途端に元気を取り戻し、強気に話した。ミイラ取りがミイラになる、この言葉の意味は告白を取り締まるべきネギが告白をしたかされたかを意味していた。

ケイの知る限り告白が成功したのは千鶴とみた一度だけであり、あるときネギはあやかの手の上で眠っていたのを目撃していた。

「そうですね。取り押さえるのに時間が掛りましたから二時間ほど前かしら。今日のところ阻止に失敗したのはその一度きりですわ」  
つまり、ネギは同時に二人いた事を意味した。しかし、魔法使いが二人いることはそう珍しい現象ではない。呪術による簡易的な符に始まり、高度な西洋魔法までピンきりではあるが方法は存在するのだ。

どちらが本物かと言えばおそらく高音が見た方であろうとケイは推測した。洗脳が掛るのは本体だけだろうし、また高音が近くまで行

き気付かないほどの高度な分身を作りだせるほどの技術をネギが持っているとは思えなかったからだ。  
だが、同時に本体ではないにもかかわらず眠る必要があったのかが気になるところだった。

## 第二一話 麻帆良祭？

学園で最も強い魔法使いを挙げれば、学園長・エヴァ・高畑の名を多くの関係者は異口同音に口にしている。超もそれには同意であり反対する理由はなかった。他の魔法関係者に比較すればその三人は確かに隔絶した実力を持っているのだ。

ただ、付け加えることがあるとすれば学園長とエヴァの二人と高畑では大きな隔たりが有るという事だけであつた。それでもその三人は全世界の魔法使いでも上位に位置することは確かである。さらに言えばエヴァは学園結界と登校地獄により力を押さえられており、学園長も同様に制約が存在する。そのような制約を持たない高畑が現状、学園で最強と言われればその通りともいえるのである。

学園祭から半年前、超は学園より遥かに早く世界樹の発光の時期が今年となる可能性が高い事を知つた。超の計画の要であり学園よりもずっと注意深く観察していたためであつた。超は来年の学園祭に向け準備を進めており、ただでさえ短かつた準備期間が一年も前倒しになつたことにより準備不足による失敗の可能性を多大に含有するようになつたのだ。

目的を果たすためにそれだけは避けなければならなかつた超は自身に課していた条件を一つ緩和することにした。当日表舞台に立ち計画を遂行する人間を自分のみにし、計画の成否に拘らず独力で為したことにするつもりだつたのだ。できる限り責任を負わされる人間を少なくしたかつた。しかし、その条件は目的を果たすために既に障害でしかなく、協力を依頼することにしたのである。

既に裏方として葉加瀬聡美の協力は得ていた。全てを話した上での

協力であり聡美の存在が無ければ計画の準備すらままならないことは確実だった。しかし、次に必要だったのは戦力である。矢面に立ち戦う、危険も伴うし計画の成否に拘らず罪を背負わされ罰せられることは確定的なもの、そんな協力者に超は真名を選んだ。

真名を選んだ理由はいくつもあったが、その一つは万が一話をした上で賛成されなくても傭兵である真名は情報漏洩をしないと踏んでいたからだ。計画に賛同を得られずとも金銭で協力を得られる可能性を秘めていたこともその理由の一つだった。

真名との交渉が成功で終わったことは超の肩の荷を多少なりとも降ろすこととなった。その上で情報の整理の為当日のシミュレーションを行った。ほとんど茶々丸からの情報であったが、ただ一つ真名が意外な言葉を口にしたのを超は覚えていた。

「私とその弾を使って倒せない可能性が高いのは学園長に闇の福音、高畑先生、楓そしてケイ。あとは……」

早くに学園最強と謳われる三人に次いで楓を挙げたのも少々意外であったが、ケイの名前が挙がったのは完全に予想外であった。問い詰めれば倒せないというより逃げられるという意味であり戦闘員として優秀とは言い難いケイはすぐに超の頭の中から消えた。

しかし、それから幾月も経たず、茶々丸からエヴァとケイの話聞いた時、真名からの話と合わせ危険性を増加させた。だからこそ、ケイに対する情報を洗うことにしたのだ。

しかし、学園の情報でも自身に次いで怪しい経歴の持ち主であること、そしてそのアーティファクトのみが解った。超の知る凶悪なアーティファクトに較べればどうということのないアーティファクトではあったものの、自身も対象に為り得ることを考えると厄介な代

物だった。ケイの魔力量以下の人を一人だけ強制転移させる、ケイの魔力量が少ないといってもあくまで魔法使いとしてのものであり、一般人程度の魔力しか持たない超自身は対象である可能性が高いのだ。

万が一高畑の攻撃を食らっても一、二撃であれば耐える自信はあったが、問答無用で飛ばされるケイは厄介なのだ。距離を離されれば、転移などの魔法を使用できない自身は計画遂行に支障を来すことになる。

\*

「ガチガチだったな、愛衣ちゃん」

「え、ケイさん。あの娘と知り合いなんですか？」

「少しね」

「それにしてもよわ……………いえ何でもないです」

千鶴、夏美とともに第一試合の小太郎と愛衣の試合を見たケイ達の感想だった。夏美の疑問である“あんなに弱いのにどうやって予選を通過したのか”は当然のものだったといって良い。愛衣は実力の欠片すらも見せることができず、小太郎の一撃で負けた上、対戦相手である小太郎に助けられていたのだから。

愛衣は出てきた当初から緊張していることは見え見えであり、全く普段の動きができていなかった。速攻で決着したが、普段の愛衣は数撃であれば小太郎の瞬動を避けることもできたであろうとケイは考えた。結局のところ負けるのだから変わらないのだが、心構えがなっていないといわざるを得ない。“立派な魔法使い”になれば、こ

こまでとは言わないまでも人払いの結果が間に合わず、人前で魔法を隠しながら戦う可能性も想定され、その為にこの程度で緊張してもらっては困るのだ。

「まあ、愛衣ちゃんが余り強くないのは夏美ちゃんの言う通りだけど、小太郎くんが強いってのもあるんだよ」

「やっぱり、小太郎くんは強いんですね!!」

ケイの小太郎に対する評を聞いた夏美は自分が褒められたかのように嬉しそうな声を上げた。

「ケイは小太郎くんがどこまでいけると思う?」

「うーん。次の対戦相手であるクーネル・サンダーズの動きは相手との力の差が有り過ぎて見れなかったんだけど、かなりの実力者だね」

「それは小太郎くんが負けるといふことかしら?」

「さあ。あんなふざけた名前を出ているからどこまで本気を出すのかもわからないしね。ただ、僕や小太郎くんとは文字通りレベルが違う。あくまで勘に過ぎないけど」

クウネルの強さがどのレベルかと言われればケイは困る。星の大きさの違いを地上に立つ人間が裸眼で理解することができない様に、遙か遠くに存在するクウネルに対する尺度をケイは持っていないのだ。高畑も学園長も母であるメアリーもケイからすれば星のようなものであり遙か遠くの存在。高畑からすれば当然メアリーや学園長と並べられぬなどあり得ないと考えるかもしれないがケイからすれば全員“化け物”であり、それ以外の表現ができるはずもなかった。そして、ケイが見るにクウネルはそちら側の住人である。

\*

「くくくく」

「あらあら」

少々困り顔の千鶴と顔を赤くしている夏美の隣でケイは笑いを堪え切れなかった。ロボットの田中を相手に高音が演じた喜劇に対する反応である。ロボットである田中はビームを武器に戦ったが、一般人であれば直撃すれば大火傷をしかねないものであった。相手が高音であり魔法使いであったため使用したのであるうその装備に魔法使いに大きなダメージを与えるほどの威力はなかった。ただ、魔法使いの服を燃やす程度の事は為せたのである。

服が燃え、少し服の布切れが残ったものの全裸に近い格好になったのは高音の油断によるものだったといつてよい。元来あの程度のビームの威力で有れば魔法障壁を展開すれば防げるものであった。それを証明するように素肌には火傷の跡一つない。おそらく、直撃した後無意識に魔法障壁を展開させたため服が燃えているのにも気付かなかったのであろう。影使いとして影を身に纏つての戦闘に慣れていたのであるう服が燃えていることに意識を向けていなかったのだ。

高音はその姿を白日の下に晒したあと、魔力を拳に込め全力で田中を殴ることで勝利は手にした。

これでさらに負けていればもっとからかう材料ができたものを、とケイはさらに笑みを漏らす。

「ケイ、このことで高音さんをからかったらダメよ」

「……考えておくよ」

笑みを浮かべながらのその言葉はからかうことが当然のことと言わ

んばかりだった。千鶴としてはあまり好ましい行動ではないため、一応注意したがケイと高音には自身とケイとの間の信頼と違った関係が有ることを感じており、強く言うことはしなかった。高音は一方的に言われる人ではないのだから二人なりのコミュニケーションがあるのだろうと千鶴は考えているのだ。

「ケイさん。そんなことしたらダメだよ!!」

「ははは、そうだね」

夏美の注意にも到底従う気が無いかのようにケイは答えた。今回の事は仕方ないと片付けられないのだ。高音はかなり精神が弱い。修学旅行でもかなり凹んでいたし、それをバネに強くなるうとする事は良いのであるが、それは後日の話である。立ち直るまでに時間が掛り過ぎるのだ。だからこそ、未だに口撃に引掛かるのだとケイは考える。“立派な魔法使い”になるうというのだから動じない強い精神を持たなくてはやっていけない。嘗て大戦期の野放し状態に較べれば危険な世界ではなくなっているものの、“立派な魔法使い”は危険な場所に赴くのが商売のようなものだ。それを鑑みればケイの口撃如きに一夕腹を立てているようでは勤まるわけがないのだ。そのことを考えているからこそケイは態とからかっているのだと自身を正当化している。実際にはからかうと反応が面白いからなのだ。

\*

美空は緊張していた。今までも仕事としてネギの監視や警備員としての巡回などを行ったことは何度となくあったのだ。けれど、今回の戦闘行為が含まれるかもしれない仕事は初めてのことだった。

魔法に関して知ったのは最近だった。中学に上がる際に親に説明されたのだ。そして半ば強制的にシャークティールへと預けられた。それがもつと幼い子供の頃であれば無邪気に喜び取り組んでいただろうし、大人であればはつきりと断り魔法の世界に踏み込まなかったかもしれない。ただ、親の意向に対し美空は中途半端だった。未だ中学生に過ぎない美空にはあまり親の意向に逆らうほどの勇氣を持って、同時に魔法に対する少々の憧れを捨てきれなかった。

そうこうしているうちに、才能が有ったのだらう美空はトントン拍子にその力を伸ばしていった。だからこそ、妹分ともいえるココネ・ファティマ・ローザと仮契約を結ぶこととなったのだ。親の意向と魔法に対する少々の憧れのみで続けていた美空にココネという妹分ができたのである。魔法関係に力を傾けざるを得なかった。それが極最近のことである。

「ココネ。勘違いってことはあり得るよね？」

「それはないと思う」

美空もそれは理解していた。ココネが間違っはすも嘘を言うはずもない。あり得るとすれば高畑側の問題であったがそれはないだろう。しかし一縷の希望を持たざるを得ない。戦闘が有り得る、いわばちゃんとした任務をこんなに早く与えられるとは思ってもみなかったのだ。

相手はクラスメイトの超であるということ。シャークティールも同行することと安心できる材料はあったが、不安を払拭できるわけはなかった。師であるシャークティールには悪いがケイと二人であればここまで不安になることはなかったらうと美空は思う。シャークティールの強さは身をもって知ってはいるものの、周囲に較べどの程度強いのかを未だ美空は判断できない。一方、ケイのやる気の無さと

危険を嗅ぎわける嗅覚、その逃走に関する能力には美空の中では絶対の信頼を置いていたためである。

「それじゃあ、行くわよ、美空・ココネ」

「シスター・シャークティー。そうだ、ケイ先輩を呼んだらいいんじゃないスか？確か先輩はサボっていたはずス。それだったら私たちが行かなくても」

「彼は別ルートから潜入させられるみたいよ」

\*

小太郎とクウネルの試合を終えたところでケイの携帯が鳴った。相手の名から面倒事であることを察せざるを得なかったケイは千鶴に対し小太郎の事で二、三アドバイスを残しその場で別れた。夏美は既に公演のために席をはずしており、千鶴は小太郎の様子を見に医務室に、ケイは面倒な電話を取るために外に出て行った。

ケイは口惜しくてならなかった。もつと面白いことが起こる予感を感じていたのだ。高音とネギの組み合わせに対して。

「それでどうしました、式集院先生」

「ごめんね。非番のところ。実は高畑先生が捕まったみたいなんだ」

「……………は？」

式集院に電話を掛け返したケイが言葉は失ったのも止むを得ないことだった。その実力・名声共に学園トップといえる高畑が捕まることなど到底想像できなかったからだ。

「実は人手不足でね。君に救出に行ってもらいたいんだけど」

「無理でしょう。高畑先生を捕えられるような人間を相手にどうにかできる術は僕にはありませんよ」

「大凡の場所はココネくんのお陰で特定できているから、二手に別れて向かってもらおうと思っている。もう一方はシスター・シャークティーが行ってくれることになっている」

「……つまり、僕は囷というわけですね。いざとなれば確実に撤退できる僕が選ばれた、と」

「すまないね」

一応ケイはそう口にしたが頭の中での結論は別だった。本命が他のルートからいくか、もしくは共に威力偵察に過ぎない、と。どちらにしる危なくなったら逃げて良い許可がある以上やらざるを得ないとケイは自身に言い聞かせた。

## 第二十二話 麻帆良祭？

超鈴音は麻帆良学園の魔法使いを甘い者たちの集まりだと断ずる。如何にも怪しい自身を外に追いやることもせず、監視をつけているわけではない。行動に制限もなく、研究会などはむしろ他の生徒よりも自由に振る舞っていたはずである。田中に関する資材の調達を様々な名義を使用し手にいれたのだが、疑えばすぐに自身を捕まえることは可能だったはずだ。

そして、魔法に関することも警告を二度無視することを許容し三度目で漸く処置に動こうとしていた。三度目の警告無視の際の処置もネギの一言で覆ったが、それもネギでなくとも同じ結果になっただろうと超は思う。ネギがそれほど重要視されていたのではなく、その程度の裁量判断に任されるほどに甘いのだ。つまり、例えば問題児扱いを受けているケイが超を庇ったとしても同じ結果になっただろうと。

その場でガンドルフィーニはエヴァのことを持ちだしたが、それも内心は怪しいものだった。敢えて解りやすい事例を挙げたにすぎないのだ。超の問題はエヴァとの事などほとんど関係ないことであり、ガンドルフィーニもエヴァとの付き合いもあり憎からず思っている。さらに付け加えるなら、今までの傾向から記憶消去などの強力な罰則を与えられることもなかったと超は想定された。しかし、麻帆良祭での計画には支障が出る事だけは確実だった。

実に甘い、砂糖のように甘い魔法使いたちの集まりだった。厳しい大地で環境で時代で世界で生きていた自身にとっては甘すぎるものだった。むしろ毒ともなり得るものだったといっている。このまま、

この生活をこの学園で続けるのもいいのではないかと、と。事前にあのような魔法世界が崩壊する前に手を打たなかった魔法使い達を憎んだ。自分達をあのような厳しい環境に放り出した魔法使い達を憎んだ。このような手段しか打てない様な状況に追いやって魔法使い達を憎んだ。

最初はこの学園の甘さが魔法使いの全体のものであり、だからこそそのわきの甘さが楽観主義が魔法世界の崩壊を見逃したのではないかと怒りを抱いた。けれど、それが心地よくなってしまった自分が居た。

学園に来て対等に話ができる存在として聡美と科学の話をするのが好きだった。親友とも拳法のライバルともいえる古菲と切磋琢磨し戦うのが好きだった。最初は取引相手であり、その後も何だかんだと眼を掛けてくれるエヴァに時に諫められることが好きだった。エヴァと聡美と三人で造り出した、娘ともいえる茶々丸の成長を見守るのが好きだった。時には母のように慈愛の心で接してくれる四葉五月と料理をするのが好きだった。良き相談相手となってくれた真名の昔話を聞くことが好きだった。手段としてしか見ていなかったはずの研究会の面々に頼られるのが好きだった。

どれもこれも麻帆良の甘さのお陰で味わえたものだった。何度このぬるま湯のような心地よい生活を続けようと思ったことか……。しかし、計画を遂行しなくてはいけない。目的を果たすために。

「超さん、来ましたよ」

「ム……ハカセもう来たか。明日菜サン、美空、高音サン、佐倉サン、あとは……」

「ちよつと待って下さいね」

外の警備に真名を送っていたものの、見逃したということはよほど

の強者が現れたか、相手にするほど無いほどの弱者。シャーケティーは強者であり、美空は後者ということ。もっともシャーケティーに真名が手を取られている以上、戦力はロボットを除けば超しかない。そして、ここの撤収もしなくてはならない。

「超さん、もう一人はココネ・ファティマ・ローザというそうですよ」

「……もう一人来たようネ」

「うん？研究所方面から来ていますね。え」と……」

「ケイさんネ」

高畑の侵入がそもそも想定外であった。既にその時田中さんの保管庫が見つかる事は自明のこととなった。計画の実行を明日に控え切り捨てるわけにいかず、真名と超は侵入者である高畑と対峙し時間を稼ぐことにした。その間撤収を完了するつもりだったのだ。しかし、予想外にも高畑はその場で戦うことなく降参した。いわばタイムマシーンであるカシオペアを使用した戦いを行うには十分な魔力が満ちておらず、勝てるか怪しいものであり嬉しい誤算だった。

問題は捕まえた高畑をどうするかだった。高畑という大きな戦力を相手にせずに三日目の計画を実行できれば成功確率は上がるものの、マイナス面も大きい。侵入者の面子からまだ偵察の段階で有るものの、高畑の位置は特定され続けることが予想され常に守り続けなければならぬのだ。そんな戦力も時間も無い。

結局のところ当初の予定通り、撤収する時間に終始せざるを得ない。しかし、高畑という大魚を捕まえたにも拘らず逃がさざるを得ないのは口惜しい。

「ハカセ、そっちは任せるネ。ワタシはこっちに行くネ」

「わかりました。私がアスナさん達の方の時間稼ぎをしておきます」  
「撤収の続きも頼むネ」  
「わかってますよ」

ケイが来たのは予想外であったものの、超にとっては幸運だった。高畑とは別の意味で厄介なケイの実力を見ることができからだつた。

\*

「……はあ」

ケイは眉を顰め溜息を吐いた。高畑の居場所はおよそであるが特定されている。少々遠いものの超が頻繁に出入りしている場所として研究室が挙げられており、そちらからの侵入を任されたのだった。見つけなければ良いと思っていたものの、簡単に見つけてしまい時間を稼ぐ事が出来なくなつたのだ。できることなら見つけられず、その間にシャークティールからの救出報告を聞いたかつたケイからすれば不運そのものだった。

「ここに閉じ込められないでしょうか」

ケイは発見した地下へと続くエレベーターに乗りながら少々大きめに独り言を呟いた。確実に監視されていることを想定しており、あえて相手に聞かせるための言葉だった。閉じ込められれば、それを言い訳に転移し離脱するつもりだった。切欠さえあればなんでもよかつたのだ。

ただ、何事も無く地下に辿りつき開いたドアの先には広く巨大な空

間が広がっていた。そして正面には独り超が待ち受けていた。

「……はあ」

「女性を眼の前にいきなり溜息を吐くのはどうかと思うネ」

「貴女は囚われの姫を横に、勇者が来るまで陰謀論でも語っているというのが筋ではないですか？」

「どこの魔王力。姫が高畑先生ということは勇者が明日菜サン、…  
…悪くない配役ネ」

「あれ、シスター・シャークティーではないのですか？」

「彼女はチケツトを持っていないから入場できなかつたネ」

地下の巨大空間に入った時点で念話は切られていた。流石に携帯での連絡を取る余裕はなく、情報が入って来ない。だからこそ、ケイにはこの時点で選択に迫られていた。速倒して進むか逃げを打つ、時間稼ぎに終始する、である。超の実力は倒せるかもしれない、そんな同程度の力だと予想していた。根っからの臆病者であると自負しているケイはその時点で最初の選択肢を消すこととなった。

次に時間稼ぎをする意味があるのか、だった。超の言葉を信じればシャークティーは侵入に失敗しているものの、他のメンツが侵入している。そうであれば超の相手をする意味はあるのだが、敵である超からの情報である以上単純に信じるわけにはいかない。

「それで決めた力？」

「最後に一つ、高音の試合は一回戦同様愉快なものでしたか？」

「趣味が悪い。けど、ワタシには愉快なものであつたネ」

ニヤリとケイは笑った。自分の勘はまだまだ冴えている、と。高音の試合が如何なる愉快さがあつたかは超は口にしなかつたものの、ケイは予想通りであつたと考えた。

「ワタシも聞きたいことが一つあったネ。さつきワタシを魔王に喩えたけど、どうしてワタシが悪人だと言い切れるネ？」

「つまり、学園こそが悪であり、貴女が正義である、と？」

「そうは言わないネ」

「では世に正義も悪はなく百の正義があるのみ、ですか？」

「そこまでは言わないヨ」

「簡単です。そんなことは知りません」

「は？」

言いきったケイに対し、啞然とした表情を超は浮かべた。

「先ほどの喩えにもありましたが、僕は勇者でもそのパーティーでもありませんので、自分の赴くままに動きます。そういった高尚なことを勇者に任せます」

ケイはそれに続く“でなければ『盗賊殺し』の従者など勤まりませんし”という言葉を中心に留めた。不本意ながら戦場で多くの時間を過ごさざるを得なかったケイからすれば正義や悪などといった話に興味はなく力あるものが勝利するということだった。いくら正義を叫んだところで盗賊に対し何ら意味を為さず蹂躪され、悪人たる盗賊も正義など欠片も考えていない母に無慈悲に殺される。そこに正義も悪も介在せず、ただ力のみが関係していたのだ。

「……なら、ワタシの目的が魔法を世界にばらすことだとすればどうするネ？」

ケイは沈黙し熟考する。

「……………積極的に止める理由は存在しませんね」

「そう力。貴方とは敵対するしかないようネ」

積極的に止める理由はない。ただ、麻帆良学園に所属している以上、そこに所属する者としての義務が存在しそれに従わなければならぬ。真名と同様にある意味ビジネスライクにその義務を考えているケイは学園の意思に逆らう気はない。だからこそ、学園と敵対せざるを得ない超とは敵対しかあり得ないのだった。

「僕としてはもう少しお話ししておきたいのですが」

超が構えを取ることでお喋りの時間が終わった事がケイに伝えられた。ケイは真名と同様に戦場に多くの時間を費やしてきた二人だったが、答えは全く異なった。ほとんど魔法世界のみで過ごしてきたケイと、旧世界の戦場で戦ってきた真名。答えを変えたのは戦場の違いであり、また大切な人間を失ったことのないケイはその痛みを理解することは未だできないのだった。

\*

超はケイに対し期待を持っていなかったからこそ、失望もしなかった。ただ、他の学園の魔法使い達とは毛色の異なるケイの答えに興味を覚えたにすぎない。学園の魔法使いであれば誰もが悩み直ぐに答えを出せないものであり、中には真名同様に賛同するものさえいると超は予想していた。

学園と敵対する以上ケイとは対立するしかない。真名と同様傭兵で有れば金で味方にできた。契約に縛られる学園の魔法使いたちの中でその契約を破ってまで超に味方しようとするほど、ケイは主義主

張を持っていないのだ。

だが、“積極的に止める理由がない”とは消極的にしか動かないということ。そういった意味での交渉は可能ということだった。

「思ってたほど強くないネ」

何度目かの攻防、超がケイを壁まで蹴り飛ばすことで終えた。戦いは超が有利だったが、超には止めを刺す手段がない。一方、ケイは圧倒され終始超に翻弄されていた。超は気の扱いがそれほど巧くない。ケイも同様に魔力を全身に巡らしてはいたが量自体が大したものではないのだ。そのため互いに力は拮抗していたものの、超はその戦闘服によりケイを引き離していた。思っていたほど強くないと確認できたところで超の目的は果たしたといって良い。

だからといって超が油断したというわけではない。再度接近戦となり、ケイの蹴りが向かってきた時避ける事ができず、受けることとなった。何度目かのことであり、それ自体の選択は今まで通りであれば間違っていなかったはずである。しかし、その威力は先ほどまでとは段違いだった。

「グフッ」

十メートルほど蹴り飛ばされ壁にぶつかることではまった。辛うじて予感に従い両腕で受け止めようとしたためこの程度で済んでいたものの、下手をすれば片腕を折るところだった。

「……ゴホッ、どづいうことネ？」

「さて、何のことやら」

先ほどまでの威力を圧倒する蹴り。魔力による身体強化をケイが行

つていたがそこまでの威力を出す魔力量をケイは持っていない。残りの魔力を全て込めるといった賭けに出たわけでない証拠にケイの身体強化は今まで通り一定だった。

つまり、他の場所から持ってきたということ。周囲の魔力を取りこみ自らの魔力として利用するという手段は未来の技術のほずであり、ケイには使えないはずである。しかし、超には一つ心当たりがあった。茶々丸の動力炉だ。

「……エヴァンジェリン、か」

「顧客の情報を漏らさないのは当然かと」

魔力を貯めこめる道具を作れるのは超の知る限りエヴァだけであった。それに対しケイは一応のフォローを入れることで応えた。

超としてはもう一つ疑問を持った。巨大な魔力を身体に突然巡らせる事は出来ない。徐々にその魔力の量を増やさなければならぬのだ。ケイがそれを手にいれたのは、エヴァの事であるから最後に交渉したこの一月以内のはずである。常識的に考えればその短期間にこのレベルの魔力を身体に巡らせるようにできる事は難しいはずだった。

「どうする気ネ？」

「今、捕まえればこの後何も面倒はないのでしょうか？それで良いのではないかと思ひまして」

超には逃げる手段もあり、先ほどのケイの蹴りはかなりのダメージを負ったが致命傷ではない。しかし、超の知る限り込められる魔力は先ほどの威力をあと一度といったところ。目的を果たした以上、すでにここに用はない。

「超さん」

「どうしたネ？」

壁を背に超が立ちあがったところで、聡美から連絡が来た。ケイは“どうぞ”と手で示し距離を取った。ケイは情報が不足しており、少しでも情報を欲していた。どんな手段でも情報を手にいれる事は悪い事ではない。

「高畑先生が逃げました」

「そうか。明日菜サン達の方はどうネ？」

「あ、そっちは順調です」

「わかったヨ。すぐそっちに向かうネ」

ケイもまた上へとその情報の真偽を確認するため連絡を取った。現状念話の使用はできないため携帯という一般的な手段を使用していた。

「本当らしいね」

「それで、どうするネ？」

「目的は果たした事になったからね。ここでお別れしたいのだけど」

「ワタシも望むところネ。しかし、今後の面倒の為、捕まえるんじゃないのか？」

「捕まえられるとは到底思えませんしね」

## 第二十二話 麻帆良祭？（後書き）

以下妄想。

関連し合っている記憶の中で魔法の事だけピンポイントに消すとか可能なのだろうかとか考えてしまう。その時その場所でならともかく、例えば半年前に知った事とそれに関連する事を消せるとか凄すぎる。もしその半年間の記憶の多くが魔法関連で占められていれば、半年間の記憶喪失に為るといふことだろうか。さらにニセの記憶を移植可能といふことなんだろうなあ、とか考えてしまいます。

しかし、拙作の設定は原作より遙かにテキストなので、魔法使いはそんなことはできない設定。記憶が消せるのはその日のうちとか、その時間丸ごと消えるとかそんな大雑把な魔法です。別に関係ないですが。

## 第二十三話 麻帆良祭？

「よかつたんスか？」

「何がだよ」

「先輩、かなり疑われていますよ。タイムマシンだなんて荒唐無稽な話をしたそうじゃないっスか」

「信じようと信じまいとどちらでもいいんだけどね」

ケイからしてみれば完全な失敗だったと言って良い。あまり深く考えず、聞いたことをつい口走ってしまったのだ。ネギたちが一週間後に現れる、と。荒唐無稽だと思われるうちはケイにとって問題ないものであったが、問題は事実となった後だった。何故知っているかを明確に説明できない以上、ケイは疑われるのだ。

が、現状疑われているのは学園祭での行動把握においてただ一人明確に証明する人物がいなかったからだ。あまりにも手際が良い超に内通者が居たのではないかと思われており、ケイは第一に疑われている。もつとも、そちらの点は、学園長の保証がなされるため、ケイ自身は問題視していない。

超による魔法バレから既に五日が過ぎ、ケイは教会を訪れ時間を潰していた。高音や愛衣は隠れるように指示されており、人前に出ないようにになっている。これは強制認識の魔法後に魔法の存在を知らしめるために使用された映像が麻帆良祭の武道会のものであり、そこに出演していた彼女達が有名人となっているからだ。特に高音はその派手な魔法から眼を付けられている。高畑も同様に狙われており、あまり表に出ない様になっていた。

その点、ケイや美空は目立つ事をしておらず、既に普通の毎日を送っていた。特に美空にとっては忙しく動き回っているお目付け役の

シャークティーがいないことを良い事に羽を伸ばせる日々だった。

「まあ、村上小太郎くんでしたっけ。彼がああ直後に関西呪術協会に呼び出されたのが痛かったスね。一緒に証言をしてくれる人が居なくなるなんて」

「そのうちあつちからも証言が上がって僕が正しかったことが証明されるよ」

その日、途中まで一緒に行動していた小太郎が関西呪術協会に召還されてしまっていた。それが祭りの翌日であり、まだ証言がとれていなかったのだ。混乱する生徒たちを抑え、祭りに来ていた人を帰らせ、取材も殺到していた魔法関係者にそこまでの余裕は残っていなかった。関西呪術協会としても少しでも状況把握をするため召還を急いだのは当然のことだった。

ネギたちの捜索にも人員を割かれており、現在対超の情報収集に力を入れるほど麻帆良に余裕はない。漸くおぼろげながらあの日に何が起きたか把握し出したところだった。それは証言すべき人間がしなかったことにも関係してくる。

「で、先輩。あの日どうして止めなかったんスか？」

「何のことだい？」

「見ちゃったんスよ。あの日、先輩が最後に飛行船に向かって飛んで行くのを」

美空は当日、直ぐに念話も通話もできなくなったため、また傍に目付け役が居なかったため妹分のココネと共に離れた場所での見学をしていたのだ。真名や超を止める戦力と為り得ず、ココネを危険な場所においておくわけにいかず、また混乱が起きている状況を収拾するために多少の手伝いはしていた。しかし、お祭り慣れしている

麻帆良の生徒達は大きな混乱を起こすわけでもなく、イベントとしてそれを受け入れだしていたため、美空は見学に移ったのだった。

「……はあ、証言すればよかったじゃないか。美空は確か右往左往している間に終わっていたって証言していたんだろっ」

「面倒なことになりそうだったし。先輩に不利なことを証言するの  
もどうかと思っちゃったんすよ。それに先輩もその話をしなかった  
んでしょ？」

「……………」

ケイが飛空船を発見し、杖に乗り空を目指したのは事実だった。地下・地上・空の三択中で地下に潜る時間的余裕が無い以上、飛ぶことが妥当であると考えたのだ。空から地上をみればどこに魔法陣があるか見つけられるかもしれないからでもあったが、偶然にも飛空船を発見してしまった。

「私の計算ではギリギリ止める程度の時間はあったと思うんすけど」「  
「どうだろうか。……微妙なところだったと思うよ。でも、多分迷  
わなければ間に合ったかもしれない」

「何に迷ったんすか？」

「……どう言えばいいのかな。僕は主役の柄じゃないからね。止め  
ていいものか迷っちゃって」

「たしかに柄じゃないっすもんね」

「超鈴音もより良くしようとして準備に時間を掛けて資金を投じて  
あんなことをしたと思うんだ。それを偶々見つけた脇役が止めるの  
もって思ったんだよ」

実際のところ、流れに身を任せ偶然飛行船を発見し、そこに降り立  
った。魔法を世界にばらすことが目的であるとケイは知っていた。  
けれども、ケイは超を個人的に知っているわけではなく、言動と行

動が一致しているのか、他にどんな目的があるのか、など不明なことが多過ぎた。しかし、魔法をばらそうとしていただけは本気だと受け取っていた。

一方で、ケイの考えでは態々魔法関係者に協力を求めず、自力で行おうとするということはやましいことが有るのではないか、とも疑ってしまってもいた。賛否はあれど裏が無ければ、公表してからやれば魔法関係者にも迷いが生じよりやすかったのではないのかと。ケイの見たところ超側の参加者は少なく、真名だけだった。戦力の拡充を行わずギリギリの橋を渡り成功にこぎ着けていたが、もっと簡単にできたのではないか、と思わざるを得なかった。

しかし、できる限り秘密にし責任を自身のみで背負うつもりだったのかもしれない。結局のところケイには判断材料となるべきものは少な過ぎた。

だから、最後に止めなかった理由は単純だった。千鶴が超のことを信じると言っていたからだ。千鶴の信じる超を信じたのだ。

「まあ、私もその場面になったら迷うと思いますけど。……でも、こんなことになったせいでオコジョにされちゃうとは思わなかったんすか？」

「いや、思わなかったよ。オコジョにもされないしね」

「……現実逃避は良くないっすよ。正式な通知が来たって聞きましたよ」

「大丈夫だよ。これからこっちの世界は混乱するからね。長くこちらの世界で暮らしている有用な人材を閉じ込めるわけがないだろ。後で学園長が巧くやるさ」

「だといいいんすけど」

ケイは誰にも言わなかったし、美空も知らなかったが、自身が奮闘

していたのを着にエヴァと学園長は酒を飲んでいたことを知っていた。強制認識魔法発動後に下を見たときにその姿を目撃していたのだ。

学園長曰く、“ 老い先短いワシが判断すべきことではないと思つての。責任だけはワシが取るから安心せい” だった。眼光鋭く睨んでくるエヴァをみればそれだけでなく、彼女の動きを止めるために動けなかったというのが正解である気もケイにはしていたが、懸命にも口にはしなかった。

「それにしても高音さんアイドルみたいっすね」

「そうだな。毎日あの武道会の映像流され続けてるし、この間も

」

\*

「超くんから退学届が出された。これをどう取るか、じゃな。タカミチくんはどう思う?」

「……そうですね。報告した通り、彼女の目的は全世界に魔法使いの存在をばらすことだと言っていました。僕はそれを実行しようとしているのだと思います」

「しかし、高畑先生。彼女の目的が本当かわかりませんし、仮に本当だとしてもそれは失敗に終わったのではないですか?」

「確かにあの映像はインパクトがありました。あの程度では魔法の存在は明るみにはなり得ません。彼女はそれを諦めたのではないのでしょうか？」

「……………すみません」

主要な魔法関係者が集められ会議が行われていた。問題は超が退学届を提出した意味についてである。シャークティーと式集院は共に超が目的を諦め、麻帆良を去るつもりであるという退学届の通りに信じる立場にあった。

武道会の映像はばら撒かれたものの、大きな意味を為すことはなく鎮静化する事に成功しており、全世界に魔法をばらすといつてもそのような手段は到底浮かばないのだ。インターネットやテレビなどを通じあの程度の映像を流されたところで今回同様無駄に終わるのが関の山だった。そして、全世界を被う魔法など現在の魔法では到底あり得ない眉唾物だった。

「しかし、美空さんとココネくんが見た地下のロボットについてはどう考えるのですか？」

「確かにあの田中というロボットが複数いるのは正しいでしょう。しかし、あの空間いつぱいにいたとしてどうしてそこまでの力を持ちながら高畑先生をみすみす逃がすような真似をするのですか？」

「……………それは」

「高音くんがやられるほどの力ですよ。百もいるなら高畑先生を逃がすような真似をするとは思えません」

「……………すみません」

百もいれば高畑に付ける事はできただろうし、そうすれば高畑は逃げる事はできなかつたはずだった。見張りが居ないからこそ、高畑は逃げる事が出来たのだった。

「ケイくんはどう思う?」

「……そうですね。対峙した感じでは魔法をばらそうとしているのは本気だと思えますよ」

「勘、かい?」

「はい」

「じゃあ、高音くんは?」

「………すみません」

「いや、そうではなく」

「あ、すみません。私にはわかりません。会えもしませんでしたし……… 本当にすみません」

「そんな気に病むことはないぞ、高音くん」

気落ちし、先ほどから名前が出る度に高音は謝罪を繰り返していた。武道会の例の映像で最も問題視されている部分は高畑より高音の部分であり、また高畑救出に向かうも手も足も出せず、一方的にやられたのだ。精神的な弱さを持つ高音はその事だけで頭がいっぱいだった。

「目的を諦めているとなると、何故武道会后逃走したのかわかりません。また僕達から逃走した手段は見事なものでした。転移だとすればケイくんのアートイファクト並の発動時間でしたが、そうは思えなかったので別の魔法でしょう。しかし、彼女は魔法をその魔力量からそんな便利な魔法使えないはずですよ」

「つまり、そんな凄い魔法が使えるのじゃから、なにか魔法をばらす方法を持っていても不思議ではない、と」

「………はい」

「ふむ。明石くんのこととも一理あるのう。それに龍宮くんもあちら側なんじゃろう、美空くん」

「え、え〜と、はいそうですね」

「警戒度合いを上げざるを得んな」

学園長からすれば結論ありきの会議。明石が止むを得ず、口を出し学園長自身がまとめたものの、そろそろこの程度の話し合いは高畑に任せたいところだった。元教え子である超に気をやるのは仕方ない事であるが、だからといって妥当な結論を導き出せないようでは困るのだ。後の事を高畑に任せ、学園長はその場を後にした。

\*

田中の性能確認はできなかったものの、魔法だと思われるであろう映像を入手することはでき超としては及第点といったところの武道会の成果だった。一年後であればもっとほかにやり様があったものの、今できる最良の手とあって良かった。

撤収は無事成功させ、準備を整えた。あとは決行を待つのみであったのだ。ネギと会合とそれに続くお別れ大宴会は予定外のものであった。しかし、それは心底嬉しいものであり、涙を堪えるのが精一杯であった。

「超さん」

「どうしたヨ。千鶴サン」

「ケイから話は聞いているわ。それで一つ聞きたいんだけど」

「何かな」

宴会も最後に差し掛かり何人か眠り出し、超が一人となったところを千鶴が近づいてきた。千鶴が来る時点でおそらくケイ関連のことであろうことは想像できていた。宴会、その中でも超は一応警戒を怠ってはいなかったものの、ネギたちが仕掛けて来る様子はなく、また魔法関係者も手を出してくる様子もなかった。先に聡美を真名

と茶々丸とともに帰らせたため、今は超一人である。一人であればカシオペアの使用により逃走は確実であり、既に近接戦闘では負けることはないと踏んでいたためであった。この場所に自身を引きつけければ仲間である彼女達より優先され逃げることもできるだろう、と。

「超さんがしようとしている事は私にはわからないわ。ただ、それは善いことなの？」

「当たり前」

「ちゃんと答えて」

千鶴の声に対し超は夜空を眺めながら軽く答えた。しかし、千鶴は強引に超を振り向かせ、正面から超を見つめ再度問いを発した。その眼はどこまでも真剣で、嘘を許さない、そんな眼だった。

「……善いことにするネ、必ず」

「そ、ならいいのよ、じゃあ頑張ってね」

超の答えに対し千鶴は笑顔を浮かべた。その答えに満足を覚えたのかどうかは超には定かではなかったものの、素っ気ない言葉を返し千鶴はその場を後にした。超は屋上から再び景色を眺めなら自身への問いを行う。超にとっては幾度となく繰り返される問いであり、自身の答えは既に決まっていたものだったが。

## 第二十四話 麻帆良祭？

「やっぱりアナタだた力」

超は目を覚ました直後目の前にいたケイを見てそう口にした。身体の動きを確認し、拘束されていないことを確認、時間が何時か解らないものの、問題は計画が成功したか、だった。

「やっぱりというത്？」

「龍宮サンに聞いたネ。厄介な関係者についてネ。学園長、エヴァンジェリン、高畑先生、ネギ先生、そしてアナタを挙げたヨ」

「龍宮さんも冗談が過ぎますね。僕なんて彼らに較べれば……」

「“厄介さ”ネ。現にこうして私は捕まてるネ」

「……………偶然ですよ」

「犬上小太郎だた力。彼を囿に使たのは巧かたネ。彼の影に転移先のポイントを作っておいて私に挑ませる。彼レベルの使い手だと私もそこまで余裕をもて戦うことができないネ。彼もそれを知らなかつたろうから怪しい動きもなかつたヨ」

「……………はあ」

他人の支配下にある影をゲートに使うなど普段のケイには到底できないことだった。それは主に魔力量の問題であり、それは強引に圧倒的な魔力を使用し為されるものだったからだ。しかし、祭りの中、魔力は周囲に満ち溢れており、ケイ自身の手には魔力の塊が存在した。特殊な状況だからこそ為せたことだったのだ。

そして何より小太郎が見事だったといつてよい。高畑と超の戦いを見ていたため、超の能力については半ば推測が付き、ケイによる助言があつたとはいえ接近戦で数分間の攻防を可能としたのは小太郎の力によるものだった。

そのため、小太郎に近づき時間跳躍弾を当てる寸前に超に触れることに成功した。超の気の緩み、小太郎の影の位置が重なったために巧く行った。超の能力の欠点の一つはあくまで手動で有るといふ点気付かれなければ当てる事は可能だった。

「まあ、そういうことにしとくネ。ところでケイさん、どうして私を捕まえた力。アナタは何も思わないと思ってたんだけど」

通信・念話など全てダメにし、意思疎通をできなくした。ケイが指示なく動くことなどその性格上あり得ないと踏んでいた。もちろん動く可能性を考慮にいれ、超は油断していなかったつもりだったが、ネギを未来に送り学園長にエヴァを当てることで無力化し、最大戦力である高畑を倒した超に少々の慢心が生まれていたのは否めない。全て順調だったのだ。

「それも偶然ですよ。龍宮さんの弾が千鶴に当たりました。庇おうとしたんですけど、逆に庇われてしまいましたね。千鶴の行動を予想できませんでした」

「そう力。悪いことしたネ」

ケイは千鶴とともに歩いてきたところ襲われたのだ。正確には跳弾が偶然飛んできたに過ぎなかったが、偶然であったからこそ、ケイは気付くのが遅れた。そして自身が避ければ千鶴に当たることを考慮し、敢えて避けなかった。急所にさえ当たらなければ治癒できるのだから。

しかし、先に気付いていたのであろう千鶴が、ケイを押し倒したことでその弾は千鶴に当たることとなった。目の前で消える笑顔の千鶴を見てケイが無力感に苛まれるとともに怒りを覚えることとなった。共に居た小太郎とともに敵討ちに向かったのだ。

撃つた真名でなく超を狙ったのは責任者がどちらかは明確であったためだ。その時にはケイも冷静さを取り戻し、高畑と超の話を聞いており千鶴が跳ばされただけで危険が無いとわかっていた。

“超さん大丈夫ですか？”

「大丈夫ヨ、それより計画はどうなたネ？」

“やりました。成功です”

「そう力。すまないけど後でまた連絡するネ」

超はケイとの無駄話に勤しんでいただけでなく情報を得ようと通信を行っていた。自身の計画の成功に内心喜びつつもこれからの事を考えなければならなかった。部屋に閉じ込められていたが、カシオペアを使えば逃走する事は可能だった。しかし、今手元にあるのは戦闘用に短時間の時間跳躍しかできないように調整済みのものであり、調整しなおさなければならぬ。そして、戦闘用として何度も使用に耐えうるほどの魔力が既に無い。

「さて、お聴きの通り、お見事でした。学園側は完全な敗北です。それでこれからの事なのですが」

「ワタシをどうするつもりネ、まさか……」

「面倒なのでお帰り下さい」

「は？」

「ですので、お帰りはあちらです」

超の処遇に関して学園長から釘を刺されなかった以上逃がしてよいものであると踏んだケイは早速逃がすことにしたのだ。超の計画が成功し段階が進んだ以上、超以外は予測のしていない状態であり、何らかの対策をしている超を留まらせる事は善い事とは思えなかったのだ。中途半端に計画を止めるのではなく、完遂させるために逃がすことにしたのだ。もっとも、その意味では千鶴が無事だと

知っていながら超に手を出し、出し抜いて捕縛したケイが口にすべき事ではなかったが。

「あ、そういうええネギ先生方が見つからないそうなのですが、なにか知りませんか？」

\*

ケイは学園長室に居た。警戒を上げるとは指示されていたものの見回りと称し千鶴とともに祭りを今から楽しもうとしていたのだ。漸く互いのシフトを終え一日夕方まで時間が空くのだと期待していたのにもかかわらず、学園長室への呼び出しだった。そして、その連絡の仕様が全員への強制招集だったことで、不機嫌さに拍車をかけていた。

超の事であるのは明白であり、何が起きるかを掴んだための呼び出しであろうことは想像に難くなかった。そして、明かされる超の計画。全世界に対する強制認識魔法、本来荒唐無稽と一笑にふしたいところだったが、残念ながら学園長の口から出た以上そうするわけにいかなかった。ただ今の魔法理論では荒唐無稽である。無条件に学園長の言葉を信じるほどケイは盲信しておらず、情報源も明かさねなかった。が、その真相はともかくとして行う事は変わらなかつ

た。

「先輩、強制認識魔法なんて可能なんスか？」

「……今の魔法理論では僕の知る限り不可能だね。世界規模の魔法なんて今まで考えられる事はなかったから、その規模まで増幅できるほどの増幅魔法は今のところ存在していない。特に強制認識魔法自体かなりデリケートなものだから、その増幅となればさらに難しい」

「え〜と、じゃあ学園長の嘘ってことっスか？」

「いや、そうとは言い切れない。僕が知らないだけで数十年来その研究に時間を掛ければできる可能性はあるしね。ただ、実験もせずにぶっつけ本番となればかなり成功率は低い。けど彼女は『最強頭脳』なのだからどうにかできるのかもしれない」

「失敗すれば危険ってことっスか？」

「大丈夫だよ。だから先生方もそんな事を口にしていなかっただろ」

「そうっスよね」

会議が終わりいわば雑兵役の数ある一般魔法使い同様に特別な役割を振られる事のなかった美空とココネ、そしてケイは少々無駄話に耽っていた。魔法理論に詳しくない美空の質問に対しケイは適当に応えていた。ネギの魔力の暴走を見ていた美空としては、規模の大きな魔法の失敗に危険を感じていたために少々大げさに胸を撫で下ろした。

「三人ともちよつと待ちなさい」

「どうしたんだ、高音？」

「ケイ、貴方は武集院先生が呼んでいますわ。それに美空さん達はシスター・シャークティーが来るように、と」

「ちよ、それってもしかして」

「シスターに付いて回るんじゃないか？」

「先輩助けてください」

「いや、無理だつて。僕だって式集院先生に呼ばれているしね」

三人で空き教室で少し話し終え、外に出ようとしたところに高音が来て伝言された。ケイは式集院の元に美空達は高音に引きずられシヤークテイーの元へと向かった。

「式集院先生、どういった御用件でしょうか？」

部屋に入り開口一番ケイはそう口にした。場所は学園長室であり式集院以外にも高畑や明石、刀子、もちろん学園長もまたそこにおり、嫌な予感をさせるものだった。

「すまないね。可能性としては低いんだけど一応考慮しておかないといけない事が出来てね」

「魔法が失敗した時の事ですか？」

「いや、それは心配いらん。発動さえすれば必ず成功する」

ケイの疑問に対し学園長は間髪いれず断言した。明石は少々怪訝な表情を浮かべたものの、刀子もまた頷いており、ケイとしては判断に迷うところだった。学者肌である明石が怪訝な表情を浮かべている以上ケイと同様に魔法が失敗し暴走する可能性を危惧しているのだろう。しかし、学園長と刀子は自信ありげな表情をしており、情報源を知るものの差か、とケイは諦めざるを得なかった。

「その話は大丈夫だから、通信妨害の件なんだ。明石教授が言うには念話妨害も含め通信手段が取れなくなる可能性を考えなければならぬ」

「それは……」

「メインコンピュータで対策は取るけども落とされる可能性を憂

慮している。相手は超くんだからね。守りきれるかどうかわからない」

「そうだね。弐集院先生のいうように防壁も張るけども可能性の一つとして考えるべき事なんだ。だからこそ、対策をしなければならぬ」

「……………はあ」

強制認識魔法などと考えられない魔法を使おうという相手なのだ。既存の魔法である念話妨害や通信手段の破壊程度はやってきてもおかしくはないとケイもその事には同意を示す。それと同時に自身にここに呼ばれた理由も理解せざるを得なかった。

「他にもいるんですね？」

「もちろんだよ。何人かに言っている。ただ、万が一の為だからね。あまり人員を回していないし、学園長の言う通りに為るとすれば戦闘に回したいのが本音だね」

「……………はあ。で、どこの担当をさせていただければいいのですか？」

ゼークトのいうところの無能な怠け者なわけだ、とケイは自嘲気味に笑いつつも、それなら同様の下級兵でありたかっと思った。伝令兵、戦闘員としては低能力の自身にはまだ向いている役割だったが、無役をもつとも願っていたケイにとっては面倒な役割である事には違いなかった。

\*

「ゲホッ……………ゲホッ」

「ケイさん大丈夫ですか？」

愛衣の言葉に感謝しつつも何故愛衣がこんなところにいるのか、と疑義を呈さざるを得なかった。司令部付きだったはずの愛衣が前線に高音とともにいるのがおかしいのだ。お陰で、高音の居場所の把握に時間が掛ってしまった。

「高音、「飛空船に向かえ」だそうだ」

「わかりました、愛衣行くわよ」

「はい、お姉さま」

祭りも終盤、超の居場所が発見され連絡が付く限りの魔法使いはそちらに向かうように指示を飛ばした。その指示を伝える一人としてケイも向かいその間に偶然発見した美空にも上に行かせた。自身は既に魔力を尽きかけており疲労困憊、戦える力はないのだった。

最初、メインコンピュータへの侵入を許したものの、辛うじて有線だけは守ることができ最低限度の通信手段は残すこととなった。有線が残ったため、ケイは役割がほぼなくなつたと感謝していたが、後半に為るにつれ学園側の戦況は悪化する一方であった。

有線には限りがあり前線まで通じているものは極少数であったためケイは何度となく前線に転移で情報収集兼伝令として飛ばされた。貯めこんだ魔力も使い切り、最後は戦力を上に上げるために各地を走り回った。その中で何とか発見できた高音を上げたところでケイは仕事を終えたとばかりに、空が良く見える近くの麻帆良ヶ丘公園に登った。

公園のさらに高い場所へと移動し人の少ないそこで寝転んで空を見上げていたケイを夏美が発見し声を掛けた。

「あれ、ケイさんどうしてこんなところにいるの？」

「うん？さつき用事が終わってね。今は休憩中だよ」

「あ、そういえば今日ちづ姉との約束破ったでしょ。すっごい不機嫌だったんだから」

「それはすまなかつたね。急用が入ってしまった」

「仕方ないんだろうけど、小太郎くんと三人で回っていたときも機嫌悪かつたし」

「ごめんごめん。夏美ちゃんと小太郎くんが二人きりになるチャンスを潰してしまつて」

「そんなんじゃないよ!!」

夏美が少々大きめの声を上げたことで周囲の眼を引く事になった。

「そ、そうだ。ちづ姉いるから呼んでくるね」

周囲からの眼に耐えきれなくなったのか夏美は一人千鶴を呼びに下の公園へと降りて行った。

「あら、ケイ行かなくて良いの？」

「僕の仕事はもう終わりだよ。そういえば第一発見者は千鶴らしいじゃないか」

「ええ、そうなの。偶然だったのだけどね」

「よかつたのか？超さんは善いことをするんだろ」

「私が見つけなくても誰かが見つけていたでしょう。それにこんなことくらいで……」

「確かに僅差で別のところから報告が上がって来ていたよ」

夏美に呼ばれたのかやっしてきた千鶴はケイの隣に腰掛け、二人は共に空で繰り広げられている戦いを見ていた。

「それで大丈夫なの、あんなところで戦って」

「うーん、僕にはわからないけど、あつちに学園長とマクダウエル嬢がいるからなにかあつたらどうにかすると思うよ」

「あつち？」

ケイの指さす方向を見ても千鶴には二人の姿は確認できなかった。

「ああ、そうか。結界を張っているから見えないのか。あの辺りで学園長とマクダウエル嬢、あとはチャチャゼロっていう彼女の従者の三人でネギ先生の戦いを肴に酒盛りをしているんだ。だから大丈夫だよ」

「……酒盛りって」

「まあ、今回のことの善し悪しに学園長なりに思うところがあるんだろっね。手を出さないつもりだろうよ」

「ところでケイ」

千鶴は寝転んでいるケイを起き上がらせ、自身の前に座らせた。

「ところでケイ。夏休みはアメリカに行くんだったわね」

「ああ、ちよつと母から呼びだされていてね」

「でも、二十日は長いんじゃないかしら」

「去年会わなかったからその分だろうね。それに気紛れだから途中でどっかに連れていかれるかもしれないし、どうなるかわからないんだ。一応二十日取っているけどその中で頑張っただけ帰ってくるのか」

「そう。わかったわ。私もそれに着いて行くから」

「へっ？」

「いいでしょ。別に」

## 最終話

麻帆良代表として魔法世界に行く事は大変名誉なことであると真面目な高音も口では言っているが実際はただの観光に過ぎない。ジュニアクラスの高校生以下の数名を魔法世界に招待し魔法世界を見せる元老院によるイベントに過ぎないのだ。

麻帆良学園もそのイベントに参加し毎年何人かの生徒を送り出していた。成績優秀者から順に希望を聞き定員になれば締め切るのだ。魔法世界に入った事のある生徒は少なく人気のイベントであり毎年すぐに定員は埋まる。

大体十名前後であるそのイベントに昨年はケイ・高音・愛衣も参加していた。高音と愛衣は成績優秀者であるためその希望によるもので、ケイはその年の参加者に魔法世界に行った経験が豊富なものが居なかったため魔法世界での生活が長いために案内役として付けられた。世話になっている式集院からの頼みであつたためケイも断れなかったのだ。

毎年人気イベントであつたこの魔法世界訪問も今年は毛色が違った。まず、募集前にケイが夏期休暇の申請を出したため案内人としての参加が見送られた。それに対し昨年に同イベントに参加し幼少期の短い間とはいえ魔法世界に住んでいた高音が参加することで問題ないと踏んでいた。

しかし、麻帆良祭が終わった辺りからそのイベントに対して辞退が相次いだ。高音・愛衣も辞退しようとしたがガンドルフイーニに説得され渋々参加する事になった。その原因には麻帆良祭の三日目での出来事が大きく影響を及ぼしていたのだった。麻帆良祭で多くの

魔法関係者は自身の無力を嘆いたのだ。最後まで参加できず飛ばされた者もその映像を見ることで自身の力の無さを思い知ったのだ。

数多くいた魔法関係者を反則技ともいえる弾を使っていたとしても実質二人、超と真名のみで制圧されたという事実を知ったのだ。未だ子供であるネギや魔法使いではない楓により各々倒されたがそれがさらに自分達の力の無さを痛感することとなった。前に京都で高音たちが思い知った無力感を今度は魔法関係者全体で思い知ることとなったのだ。だからこそ、多くの魔法関係者は夏期休暇など返上することとなり修行に勤しむようになったのだ。それは参加予定だった生徒達も例外ではなく、夏期は全て修行に励むため参加の辞退をする生徒が続出したのだ。

最初、教員たちもまた募集すればすぐに集まるだろうと考えていたため受理したが、直ぐに甘い考えだったと思い知った。ほぼ全員が断ってきたのだ。高音と愛衣を無理矢理説得し参加させ、他に唯一行きたがっている美空とその美空と行動を共にするココネが参加することで最低限の人数は揃えた。本来、中止にすべきところだったが、継続的に行っているイベントであり既に参加する由を先方に送っていたため中止とできなかったのだ。唯一人数をまだ送っていないかったが、それが幸いした。

「やったー。やっぱりここまで来たってことはドツキリとかじゃないんすね？」

「はあ、ドツキリってなによ。態々美空さんを嵌める意味なんてないでしょ」

「そうなんすけど、実感がわかなくて」

成田空港に着いてからどこかそわそわし、キョロキョロ周囲を絶え

間なく見ていた理由はそれだったのかと高音は溜息を漏らした。漸く荷物を預けたところで、確信したのである。美空が言い出した事に頭痛を高音は覚えていた。こんなお気楽ともいふべき美空と一応麻帆良代表としてやっていけるのか、と。

「ハハハ、そうだね。美空くんを嵌めるドツキリを考えておくよ」  
「ちょ、待って下さいよ。式集院先生。そんなことしないで良いんすよ」

「いや、美空くんの素行については高畑先生から聞いているからね。偶には掛けられる側に為るのも新鮮だろう」

「いやいや、そんな必要ありませんって」

荷物持ち兼見送りとして空港まで着いてきた式集院は少々おどけて見せる。学園祭の後始末も既に終え、学園ではさして緊急の案件は存在していなかった。そのため式集院にも余裕があったのだ。

「そういえば、ケイ。貴方も明日から出るんでしょ？」

「ちよつとアメリカの方に来ているらしいんで、会いに行かなくちゃいけないんだ」

「正直そっちに着いて行った方がまだ意味がありそうなのだけど」

「お姉さま!」

「解っているわよ、愛衣。でも、ケイの話を五割引きで聞いても会つてみたい人ではあるでしょ？」

「それはそうですね……」

「それにそんなに強いなら会って、その強さを見てみたいのよね」  
「まあ、どちらにしる連れて行く事はなかったと思うから安心してくれ。高音と愛衣ちゃんも頑張つて美空を御してココネと楽しんできてくれ」

「それはそれで気が重いわね」

ケイの言葉を美空は全く聞いておらず、高音はその言葉に少々げんなりとする。ケイを尊敬しているとはばからない美空を巧く御せるのか、と。

ケイは服の裾を引っ張られたことを感じ、そちらを見ればココネがケイを見上げていた。

「ココネも楽しんでこいよ」

「うん、楽しんでくる」

「土産話も楽しみにしているから」

「次会うのは九月。私も楽しみにしてル」

にっこりと笑ったケイはココネの頭を撫で、ココネは無表情だったが拒否することなくそれを受けた。

\*

麻帆良祭、その後始末は長引いた。超をそのまま見逃したのが一因だった。この件に関する情報はすべて学園長により半ば緘口令、ただ例年より大きなイベントがあったということのみとして処理された。

このような事を未然に防げなかったこと、それ自体を本国が問題視し、安易な学園への介入がなされる可能性を危惧した学園長が報告しなかったのだ。教師の中には反対意見もあったが、学園長により封殺された。

後処理の中で見逃された超を除き、彼女の協力者であった聡美・真名・茶々丸の問題があった。表向き例年よりも大きなイベントとして処理されたものの、彼女達三人に関しての処分を行うことは可能

だった。

聡美に関しては観察処分ということで事なきを得た。そして、真名に関しては傭兵という立場のままであり、厳密には魔法生徒ではない。外部協力者であり、かつての刹那同様に所属には至っていない。そのため、真名との契約は個別の事案ごとに結ばれており契約違反とはならない。最も目立ち派手に動きまわった彼女に関しては、聡美よりもある意味では重い、契約順守を第一とする傭兵に対するように学園に有利な契約を結ぶこととなった。

三人の中で最も厳しかったのは茶々丸だった。いわば外部協力者に過ぎなかった真名と異なり茶々丸はエヴァの従者であると同時に準魔法生徒である。そのため、警備員として仕事をエヴァの代わりにすることもあったのだ。従者の責任は主人の責でもあり、エヴァがその責任を負い学園長との交渉に臨んだ。結果はケイ達に知らされることはなかったが表面的には他の二人同様軽いものだったと思われる。

三人とも重い罪と為らなかったのはネギの嘆願によるものだった。第一の功労者であるネギが自身の功に代わり三人の罪を帳消しにと求めたのだった。

「ケイあとどれくらいなの？」

「うーん。もう少しだったと思うよ」

ケイと千鶴は二人でケイの母・メアリーに会いにアメリカに来ていた。メアリーが通信手段に余り頓着しなかったため電子機器など持ち歩かず、また定住もしていないため一方的な連絡、それも場所と日時をみの簡潔なものを送られてから音信が取れなかった。

「それにしても千鶴はネギま部だっけ、夏美ちゃんたちと一緒に行かなくて良かったのか？」

「あら、ケイは私にそっちに行つてほしかったの？」  
「いや、そういうわけじゃないのだけど」

アメリカの僻地、街から少し離れた荒野の拡がる場所が待ち合わせに指定されていたため、車での移動となった。身分証の詐称などケイからすれば朝飯前であり、現に彼自身により運転が行われていた。

「確か、この辺りだったと……」

車を止めケイと千鶴は下車し、ケイは周囲を見渡した。

「……来たようだね」

ケイ達が来た方向とは逆から一台の車がやって来ている事を千鶴も確認できた。近くに来て止まったところで降りてきたのは見目麗しい女性だった。千鶴は写真や映像で見た事がなかったため、その女性があまりにも若く内心驚いた。念の為にケイを見やれば落ち着いており、その眼はその女性がケイの母・メアリーであると物語っていた。

「久しぶりだね、母さ」

ケイがメアリーに声を掛けた時、突風が吹き千鶴は自身を庇った。どうやら砂埃も目に入らなかつたようだと言を明ければ、先ほどまで代わりに居たはずのケイは居らず、代わりに先ほどまで少し離れたところにはいたメアリーの姿があった。

「……え？」

思わず声を漏らしてしまったものの、キョロキョロと周囲を見渡し

てもケイの姿は確認できない。ただ、良く見ればかなり遠く離れた地点で砂埃が待っていることは確認できた。

「貴女はケイの彼女かしら？」

「え、はい。那波千鶴と申します」

事情が全く呑み込めず混乱する中、メアリーに話し掛けられ動揺しつつも千鶴は返事を返す事が出来た。

「私はケイの姉のメアリーよ」

「え、姉？」

「そう姉よ！」

ケイからは母だと聞いており情報の齟齬はあつたものの、浮かべられている笑顔は有無を言わさないものであり、微かに疑問を口にしたが反論は許さないとばかりに強い口調で押し切られた。確かに外見上では高校生の息子を持つとは思えないほど若く、高く見積もっても大学生といったところだった。ケイの言葉を聞いていなければ自身も姉と判断していただろうことは千鶴には容易に想像できていた。

「千鶴ちゃん、ちょっと待っていてね」

“ どういうことですか ” という疑問を口にすることなくメアリーは千鶴の眼の前から消え失せ、遠く離れた場所で、先ほど土煙が上がっていた辺りでより大きな土煙が上がっていた。

そちらに微かに見えた人影、ケイとメアリーであつたが千鶴の眼では追い切れず、その影が動き交り合い、そして凄く速度で離れることを繰り返している事だけはわかった。千鶴の脳裏に浮かぶのはネギと高畑の戦い、あの戦いは近距離で範囲も狭かつたため多少見え

やすかったが、広い荒野で殆ど待ちが無く動き続ける二つの人影を  
追いつけることは千鶴には無理だった。

「私にできる事はないわね」

何故、いきなり戦い始めているのか、母子ではないのか、疑問は尽  
きないものの遙か遠く、移動したところで何もできない事は目に見  
えている。諦めの境地に立った千鶴は車に背を預け、殆ど見えない  
砂埃の辺りを注視していた。

\*

「ごめんなさいね、お待たせして」

数分が過ぎ、突然目の前に現れたメアリーはぼろ雑巾のようになっ  
たケイを片手にそう言い放った。千鶴は驚きのあまり声を出せずに  
いた。

「もうちょっと待っててね」

ボロ雑巾のようになったケイに対し“治れ”という一言で、先ほど  
までの怪我が嘘のように治った。千鶴にはその凄さの度合いはわか  
らなかったものの、魔法自体の凄さを感じ入った。

「ゴホッ、……かあ……いや、姉さんお久しぶりです」

「ええ、久しぶりね、ケイ」

千鶴は確かに見た。ケイが“母さん”と言い掛けたところで、メア

リーの腕が動く事を。そして、それに明らかにケイは反応していた。なるほど、母と呼ばれたから殴り飛ばしたのか、とかなりあり得ない事情を千鶴は想像していた。

もし、そうなのだったら、少し自分は早まったのかもしれない。呼び方一つであんな事に為る相手に会いに来るつもりはなかったのだ。これから彼女と幾日か過ごすわけだが、自分は巧くやっていけるのだろうか、と千鶴は危機感を持った。

「さて、それじゃあ、行きましようか」

メアリーがパチンと指を鳴らしたことで彼女の乗ってきた車は消え、またしても魔法の凄さを千鶴に感じさせた。攻撃魔法はケイと高音の模擬戦や麻帆良祭などで見ていたが、便利な実用的ともいえる魔法は耳にはしていたが、初めて見た為に千鶴が啞然とするのも仕方ないとも言えた。

ケイが啞然とする千鶴を促し、車に乗せた。運転席にはメアリー、助手席にはケイがそして、後部座席に千鶴を乗せ車は出発した。

「あ、そういえば千鶴ちゃん」

「は、はい」

傷が一瞬で治ったことや車が指を鳴らしただけで消えるという聞いた事があったても信じられなかったものを目の前で事もなげに見せられ、驚いていた千鶴に対しメアリーが声を掛けた。

「あ、その前に、と」

パチン、パチンと続けざまに二度メアリーが指を鳴らしたことで千鶴は何が起きるのかと少々身構えていたものの、今度こそ目を疑った。見ていた景色が少し変わり助手席にいつの間にか千鶴が座って

おり、そして後部を確認すればケイが眠っていた。

「ケイは煩いし眠らせたわ。それに二人きりで話したいしね」

「……は、はい」

「うーん、緊張してるわね。もっとリラックスしていいのよ」

「……はい」

「そうね、ケイって学園ではどうなの？連絡とってないから知らないの」

至って普通の会話を始められ千鶴としては少々構えていた緊張感をやや緩和させつつ話に応えていった。ケイのこと、特にここ数力月にあったイベントについて、できる限り周囲からの評価を含め千鶴はメアリーにと話した。

三十分ほど車を走らせ、千鶴も緊張を解きメアリーとの会話が楽しくなってきた頃、一つの疑問を思い出した。だから、気軽にメアリーにと尋ねたのだった。

「……しっかし、やっぱり女の子は良いわね。ケイよりも千鶴ちゃんがほしかったわ」

「そんなことありませんわ。あ、そういえば」

「うん？どうしたの。お姉さんに話してみなさい」

「私たちってどこに向かっているのですか？」

「あれ、言っただけじゃあなかったっけ？」

「はい」

「うーん。考えてなかったのよ。ほら、千鶴ちゃんがどんな娘かわからなかったし。今は昔住んだところに向かっているんだけど、そこで私の荷物回収したら、そうね、東回りに日本に向かおうかしら」

「へ？」

「ケイの面倒見てもらってるし、学園の爺さんにお礼言いにいかなきゃいけないからね。どこか寄りたいところある？私はローマとパリ、

あと中国でおいしい中華でも食べたいんだけど」

「え〜と、そんな無計画で大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ。移動には転移使えば一瞬だし。今だって千鶴ちゃんとおしやべりと旅気分を味わう為に運転してるだけだしさ。う〜ん、そうと決まればこんなチンタラしてるのは無駄ね」

そう口にしたメアリーはまた指を鳴らした。一瞬、周囲の風景が真っ暗になったが、直ぐに明るい場所に出た。その場所は見た事のない場所であり、おそらく昔住んでいたであろう、家が一軒建っていた。

「ちよあつと待っててね。……それにしてもケイは邪魔ね。ここに置いて行こうかな」

「そ、それは」

「う〜ん、そうよね。何かの役に立つかもしれないし、ね。私の影に荷物と一緒にしまっところか」

彼の母、いや姉に気に入られるのは良い事だと思っていたが、こういう人はちよつと違うのではなからうかと千鶴は思う。もしかしたら、こちらではなくあやか達とともにネギに着いて行った方が良かったのかもしれない。頭に過ぎるその考えを千鶴は辛うじて否定しつつも、先行きに非常な不安を覚える。無事帰れるのだろうか、と。

「じゃ、早速ケイも仕舞うわね」

「ま、待って下さい。メアリーさん」

## 最終話（後書き）

皆さまのご期待に添えるレベルに至らない拙作ではありましたが、  
完結まで書ききる事が出来ました。

感想やお気に入り、評価していただいた方、また、ここまでお読み  
いただいた方々、皆さまありがとうございました。

## 没ネタ

「ほ？どうしたのでござるか、ザジ殿？」

「……………」

「ネギ坊主を連れていけというのでござるな。ふむ、事情は」

「……………」

「……聞かぬ方が良い、と。わかったでござる」

「……………」

「感謝する必要はないでござるよ。どちらにしるアスナ殿が連れていく気でござった」

\*

「ネギ・スプリングフィールド、か。ナギの息子。確かに面影はある……………」

「どうしましたか、マスター？」

中学二年最後の期末試験を三日後に控え、エヴァは物思いに耽っていた。最近クラスに来た担任であるネギのことだ。想い人でありまた登校地獄などというふざけた呪いを掛けられ十五年の時を過ごすに至った原因、ナギの息子である。面影は確かにあり、成長すれば

瓜二つとなることは容易に想像できるが、性格が大きく異なっていた。ナギは奔放でテキトーな性格をしており、気分によって物事を決めるような人間だったとエヴァは記憶していた。それとは正反対とも言える生真面目なのがネギだった。

それにネギが十歳で自分が閉じ込められているのが十五年、あのナギはどうして、と思わざるを得ない。エヴァにとって掛け替えのない男だったが、ナギにとっては自身など路傍の石の如く忘れられていたのだろうか、などと少々ネガティブな思考に入りエヴァは独り言を口にしていた。

「マスター？」

「……ああ、すまない」

従者である茶々丸の何度目かの声掛けに漸く気付き、思考を一端中断する。自身の住まうログハウスのソファに無作法にも寝転がり考え事をしていたエヴァに対し、風邪をひかない様にとの配慮からベッドに移動するようにと促すためだった。一方で、茶々丸としてはエヴァの独り言に対し一つの疑問を持った。

「……マスター、ネギ先生に対しどういった態度で臨まれるのでしょうか？」

半年前から吸血行為という魔力収集を行っていた理由はネギから血を吸い、呪いを解くためであり、その過程でネギは死に至る可能性が濃厚であった。茶々丸としてはそのことを理解しつつも殺すことに躊躇を覚えてしまっている。それは問いを発する態度にも表れておりエヴァはそのことを好ましく思っていた。

聡美と超、そしてエヴァで茶々丸を作り出してから二年が経とうとしていた。いわゆる“親”に対して逆らうという事は未だないものの、疑問を覚える段階までは成長している。途惑うのは良い傾向だ

と思いつつも、この事に関しては譲れないのだと内心エヴァは苦笑していた。

「ふむ。そのことか。先日小賢しいネズミと遭遇したため少々面倒なこととなったが方針は今のところ……る……」

「マスター？」

エヴァが話の最中に押し黙り、眉を顰め周囲を探るような動きを did。茶々丸は声を掛けるも理由はすぐに推測できた。侵入者が結界に引っ掛かったのをエヴァが察知したのだ。

「……ネズミが一匹。魔力量は平均以下だな。場所はL-4だ。じじいに連絡しておいてくれ。それともう夕食にしよう」

「畏まりました」

茶々丸はエヴァに言われた通り、侵入者の情報とエヴァがそちらに向かわない由を学園長に伝え、夕飯の支度へと取りかかった。

\*

「援軍は間に合わず、逃げられるのは確定じゃな。長期戦に為らざるを得ん。が、不幸中の幸いじゃな」

「ザジさんの機転、それに魔法の本などという噂のおかげですね」

「……それもあるがのう」

学園長は茶々丸からの通報により近くにいた神多羅木と式集院を向かわせた。それでどうにかなるだろうと思っていたものの、帰ってきたのは交戦の開始と相手の情報。直ぐに援軍を差し向けようとす

るも、そのレベルの戦闘に耐えうる教員が近場に居なかった。それでも比較的近場に居たガンドルフイー二と刀子を向かわせたが最低でも三十分は掛る。

“切り裂きジャック”英国で行われた連続殺人犯の渾名からこの侵入者もそう呼ばれている。ターゲットをバラバラにして殺すという手口、魔法使いらしからぬナイフを得物としたスタイル。大戦以降でもっとも恐れられた暗殺者の一人だった。

暗殺者ということでのこの学園内にターゲットに為る人間がいるという事になるが、ターゲットに為りそうな人間は少数のはずであった。最有力はネギ、次点はアスナとこのかくらいのものである。高畑始め魔法使いも狙われる可能性は充分にあるが態々厳しい警備の布かれる学園に侵入する必要はなく、外部に出ている時に行うのが簡単ではなくである。その意味で学園から出る事が極端に少ない人物がターゲットの可能性が高いのだ。

候補として学園長自身とエヴァが挙げられるがネームバリュー的に彼の暗殺者では力不足であり、ネギ同様親の件で狙われる可能性のあるケイは彼自身の情報が知られていない。その意味で学園長はこちらの三人の可能性は著しく低いと見ていた。無差別殺人や生徒を人質にということは彼の暗殺者の今までの傾向からあり得ないと思われる。

さらに瀬流彦が口にしたように魔法の本などという平時であれば、面倒な噂が今は良い方に働き、主たるターゲットに為るであろう三人は図書館島に向かっている。侵入路から正反対であった事と近場に高畑がいたために安全が確保される図書館島内には入ることができらるだろう。

図書館島にさえ入れれば後はクウネル・サンダースというふざけた名

乗りを最近のブームとしている魔法使いに任せれば安全といえた。あとは早急に暗殺者を捕まえるだけである。魔法生徒も動員し警備体制を布いた。一応魔法生徒には相手にせず、場所を知らせ逃げることに。そして可能ならばターゲットが図書館島にいる可能性が高い事を暗殺者に知らせるように伝えてある。できることであれば早急に決着を付けたいところである。

「さてさて図書館島を閉鎖。橋を封鎖すれば一般人は周囲にも近づけんじやろ」

\*

「高畑先生とペアですか」

「うん、そうだよ」

「……普段であれば高音となのですが、一応理由を聞いても？」

「……わかっていると思うけど、可能性の問題として君が狙われているかもしれない。学園長はゼロに近いと見ているけどね」

「できることでしたら、そういう場合、大人しくさせていたいただきたいのですが……」

「すまないね。相手が相手だけにあまり余裕がなくてね。僕が君を守りつつというのが一番安全ということになったんだ。まあ、その時はすぐに逃げられるのだろう？」

「まあ、そのつもりです」

“切り裂きジャック”暗殺者だけに隠行を得意とし、また魔力量が低い事で見つけにくい。気付いた時にはバツサリとまで行かないまでも近くに潜むのでなければ発見しがたいのだ。外縁で神多羅木と式集院が発見できたのは幸運だったのか、はたまた何らかの情報入

手の為、あちら側が気付かせたのかは謎だが次に見つけるのは至難の業。有効な手段として学園全体を探查することであるが、その使い手は未だこの巨大な学園を覆うに至らず、かなりの回数を重ねなければ学園中をくまなくとはいかない。また、その間に移動されれば見逃す可能性もあり、魔力の問題で連続使用にも限界がある。一応、何人か護衛を付け交戦した場所から探查を開始するようだが見つかるかどうか甚だ疑問であった。

「それにしてもネギ先生達に着いて行かなくて良かったですか、高畑先生？」

「うん。僕は知らないのだけれど学園で一番安全なのは図書館島の中らしい。一応中に入るまでは確認してきたから大丈夫なはずだ」  
「それは新情報ですね。僕もそちらに、というわけにはいきませんかね？」

「すまないね。さっきも言ったように人手が足りないんだ」

\*

厳戒体制の中、深夜まで及んだ巡回を終え、何ら新情報を得ることなかった。警戒を解くことなく、生徒に優先的に休息を割り当てられ、ケイもまた高畑と別れ休息を取った。朝になり再度の警戒への参加となった時ケイは人手不足を実感せざるを得なかった。

「先輩、サボりましょうよ。私たちじゃ即やられちゃうつスよ」

「ミソラ、流石にそれはまずい」

「はあ、まあその時は僕が時間を稼ぐから二人は逃げるようにね」

「先輩、よろしく頼むつスよ」

「……はあ」

ケイは溜息を漏らさずにはいらなかった。明らかに戦闘員で無い三人を組ませる理由がわからないのだ。いや、聞いている事には聞いていた。人手不足それに尽きるのだ。明け方外縁部に新たな痕跡が発見されそちらを中心に戦力を傾け、ネギたちターゲットがいると考えられるであろう校舎などに護衛を付けた結果、周辺施設の巡回まで人手が回らず戦闘員で無い三人まで狩りだされたのだ。悪い事に今日は土曜日であり、昼までの授業を終えれば様々な場所に生徒が行きかう。その為、警戒度を上げざるを得ず、その時間までに決着をつけようと戦力をすべて投入しているのだった。

「もう逃げたつてことは考えられないっすかね？」

「ないよ。出ていくにしろ結界を通る事は確実だ。ならその報告が上がるはず。上がっていないという事は中にいるってことだよ」

「神多羅木先生達が負傷させたつて言っていたし、それで身動きとれないつてことはないスか？」

「可能性は低い。神多羅木先生自身は重傷を負ったけど相手は軽傷だろ？身動きとれなくなるほどではないだろう。それに負傷時の対策も用意しているはずだ」

「うう、そうっすけども、遭わない保証というか可能性を示してほしいっす」

凄惨暗殺者が学園にやってくるということに対し美空は実感が湧いていない。ある意味、訓練や悪い夢ではないかと思っっているのだ。しかし、ほとんど実感していなくとも気休めとして安心できる材料はほしいのだった。

「……………僕が思うにターゲットはネギ先生達ではない」

「どうしてっすか？」

「見つかった以上、彼らは一番に保護されることは容易に想像でき

るだろ。じゃあ、かなり長期の潜伏をし続けないと警戒が下がらない。だったら撤退して仕切りなおした方が良い」

「つまり、どういうことっスか？」

「例えば下見だね。侵入者が入ってきた時にどう反応するか、戦力の傾け方から重要施設はどこかなんかを推測する。けどこの可能性も低い。彼の暗殺者はこういった威力偵察をしたという話を聞かない」

「だから、何が言いたいんスか？」

「つまり、見つかることも警戒態勢を布かれることも計画内で戦闘員がターゲットの可能性が高い。例えば高畑先生だね」

「……高畑先生とかヤバいんじゃないスか？」

高畑を相手にできるようなレベルの暗殺者だとすれば美空は何をおいても逃げるが、それも可能かどうか疑問だったのだ。

「聞く限りにおいて彼の暗殺者はそのレベルには至っていないから、それはないと思うんだけどね。まあ、長々といったけど僕ら非戦闘員は狙われる可能性は低いつてことだね」

「そう、それが聞きたかつたんスよ」

発見され負傷し警戒体制を布かれたにも拘らず撤退しないのはそれでもターゲットを発見殺害できる自信があるということ。下見や調査・陽動など様々な可能性がある中、それを口にしたのは美空とコネを落ち着かせるためであった。下見や調査・陽動などであれば非戦闘員も情報や囷のためにターゲットとされる可能性があるため敢えて口にしなかったのだ。あまりターゲット以外を殺さないといつてもその“あまり”に入る可能性も充分にあり警戒しなければならぬ。

\*

「だから、先輩今度一緒に……」

美空とココネの二人とともに巡回をしようすぐ昼になるうとする頃、ケイは女子寮の前で違和感を覚え立ち止まった。場所は美空が住居としていた数ある女子寮の一つであり、不審に思った美空も見てみるがいつもと変わらない。しかし、ケイの表情は非常に厳しい。

「先輩どうしたんスか？」

「……ココネ」

「……わかんない」

ココネにも気配を探るようにいうが愛衣であればともかくココネにはそのような能力は備わっていない以上無理難題だった。しかし、確証がなくなただ胸騒ぎがするといったところで、ケイも明確な根拠があるわけではなかった。

「ちょっと見て行くか」

未だ学生は授業中であり、この女子寮には殆ど人はいないはずである。一階のロビーから上に続く吹き抜け、そしてその周囲に部屋が階層ごとに存在する。三人がそのロビーに差し掛かったところ悲鳴が聞こえた。

「キヤーー!!」

即声につられ上を見上げたケイは五階の吹き抜けを遮るように存在する一本の渡り廊下に気配を感じる。魔法使いである、と。激しい嫌な予感、そしてその声にケイは焦りを覚えてしまう。直後ケイは連絡と封鎖の指示を二人に出し魔力で身体を強化し飛び上がる。二

階まで一気に飛び、その柵を足場に再度飛び上がり、という事を続け五階へと辿りついた。途中、当然上の魔法使いもそれに気付き見下げるもニヤリと笑いケイを見た。まさか自分がターゲットなのかと思えるも意味がないと五階へと着地した。

「すまねえな。その嬢ちゃんがちょっと煩いもんだから気絶させただけだ」

獰猛な笑みを浮かべつつも思ってもいない謝罪を口にした男の前にケイは焦りが苛立ちへと変化した。苛立った原因は、渡り廊下の中、中央に堂々と立つ男に対し、ケイが降り立った廊下側に壁際で気絶していたのが千鶴であった事も大きく作用している。直ぐに千鶴の下へとケイは駆け寄った。

「ちょっと聞きていことがあるんだが」

そう口にしつつ、男は袖からナイフを一本取り出し右手で手遊びを始めた。ケイとしてはまず千鶴を逃がそうとアーティファクトを取り出すも、素早い動きでそれを見越した男のナイフが飛んでくる。飛んでくるナイフを避ければ千鶴に当たるため避ける事ができずアーティファクトを出した左手を貫かれ落ちたところをさらにナイフで飛ばされる。運悪く廊下の隙間から階下へと落ちていく。

「まずあは話を聞こうぜ、坊主」

千鶴の前にそして男と対峙するようにケイは立ち上がる。後悔の二文字が頭を過ぎる。自身のアーティファクトをあまりに万能視し、かつ慢心していたのだらう、と。“闇の福音”エヴァを前に使用してきたことで天狗に為っていたのだらうと。この場合、悲鳴が聞こえた時点で一般人がいるので避難の為に美空を連れ、ココネに連絡と

封鎖の指示を出すべきだったのかもしれない、いやココネを一人にすればそちらが襲われた場合逃げることはできない。ではどうすればよかったのか、と今考えても仕方ない事に気付く。頭では否定しつつも悲鳴の時点で千鶴の声だとわかっており焦っていたのだらうとケイは自嘲する。

近接戦闘を得意とする魔法使いを前にケイは気絶した千鶴を庇いつつの戦闘、難しい事態に陥ったのだった。

「さて、ターゲットの場所を知りてえんだが？」

「……………図書館島だそうです」

「ほう、そんな簡単に喋っていいのか？」

「絶対の自信があるそうですよ」

\*

「うっ」

頭が痛い。千鶴は少々頭痛を覚えながら目を覚ました。俯いたまま眼を開ければ、眼に映った地面は廊下であり、何故自身が廊下に居るのかと痛い頭を押さえながら千鶴はその理由を思い出そうとする。確か、ネギ先生のクビを防ぐために勉強しようという話になって、……………何故かネギ先生と何人かのクラスメイトが行方不明になったので自習に、……………あやかが勉強会を開くからと一人準備の為に帰ったら男の人が……………と千鶴は漸く女子寮に男がいた事を注意しようとした事までを思い出した。

その後の事が思い出せず、頭痛の上に頭があまり働かない千鶴はなにがあったのかと下を向いていた顔を上げれば、自身に背を向け男性が仁王立ちに立っているのが見えた。その背中は確かケイのもの

だったと、あまり思考が回っていない千鶴は起き上がろうとしつつケイに手を伸ばした。しかし、途端にケイは千鶴側へと背中から倒れて来て辛うじてそれを受け止めることしか千鶴にはできなかった。

「キヤツ。ちよつと、ケイどうし……」

そこまで口にしたところで千鶴の言葉は止まる。自身の手とケイの服に着く血に気付いたからだ。ケイの身体には何本かナイフが刺さり、そこから血が流れ出しているのだろう。服も血に染まり千鶴の頭は真つ白になり、何が起きたのか理解することができない。

「……っ」

あまりのことに息をのみ、千鶴は声をあげることできなかった。ただ茫然と真つ赤に染まった服を着たケイを見ていた。長い沈黙だったように千鶴が感じるも実際は五秒にも満たない時間だった。

「おう、嬢ちゃん。中々あんたも気丈だな」

声をあげることも忘れていただけに過ぎないが、男はそれを我慢したと見て声を掛けた。正面からの声に千鶴は視線を上げ、漸く他の人間がいた事に気付いた。男は千鶴からすれば何が愉快なのかわからないが、嬉しそうに笑みを浮かべていた。一方、千鶴はほぼ無表情、眼から光が失われ茫然自失で口をポカンと開け目の前のことが理解できないのだ。

「そいつぁ、中々いい兄ちゃんだったよ。気骨のあるいいやつだった」

男は千鶴のことなど見ていないかのようにただケイを褒める。避け

るといふ選択肢を奪われたケイに受け止めることや弾くことなどを続ける事に限界があり、長い時間保つ事はなかった。ただ、最後までその弾道に千鶴が入る攻撃を時には自身の身体に刺さる事も構わず受け止め続けたのだ。中々気骨ある覚悟だったと男はケイを評価した。

「あんたがあー!!」

それは悲鳴のような痛ましい叫びだった。茫然自失とした千鶴が男の言葉と状況を勘案し目の前の男がケイにこんなことをしたのだと理解するのに数秒を要した。眼に光を灯し千鶴は男を精一杯睨みつけた。ケイの身体を抱きしめつつ、我を忘れそう叫んだのである。

「嬢ちゃんも良い感じだな」

睨みつけられた男はそれまでの獰猛な笑みから心底嬉しそうな喜びに満ち溢れたような笑顔を見せ、千鶴へとゆっくり話し掛けた。少々自身の評価が甘くなっているであろうことは男は自覚しつつも、千鶴に対し言い聞かせるように話した。

「良く聞きな、その兄ちゃんはまだ生きています。さっさと治療してやれば助かるかもしれん」

「……………」

睨み続けるものの千鶴は頭の中で男の言葉を反芻する。混乱の極みの中であり男の言葉を理解するに至るまで数瞬を費やした。そして同時に一人では意識のないケイを運ぶのにあまりにも非力であることも理解したのだ。

「誰かー!!!誰か助けて!!!」

男を無視し助けを呼ぶ事に千鶴は思い至った。そして同時に自身だけでもケイを運ぼうと立ち上がりケイを引き摺ろうとする。しかし、あまりにも非力で一向にケイを動かす事が出来ない。

「嬢ちゃん、周囲には誰もいないぜ。それに兄ちゃんを運ぶのはあんたじゃ無理だ」

何故だかわからないが千鶴にはその男の言葉が全て本当であると理解した。正常な思考を持っていればあり得ない行為、しかし千鶴は正常とは言い難い短絡思考に陥っていた。だから千鶴は単純に手助けを求めた、目の前の男に。

「じゃあ、貴方が手伝ってくださいませんかしら」

「ハッハッハッハッハッ、俺がか？俺がやったのに、か？」

「そうよ。今はケイを助ける事の方が…」

非常に愉快そうに声を上げ笑った男は、突然笑うのを止め真剣な面持ちで上の階を見た。何があつたのかと千鶴は不思議に思い言葉を一端止める。そして男の目線の先を見たが何も無い。

「……いや、嬢ちゃん。あんたは非常に愉快だよ。安心しろ、その兄ちゃんは助かる」

「助けてくださるの？」

「いや、俺じゃねえよ」

そう言いきつた男の言葉が終わると同時に、では誰が助けてくれるのか、という当然の疑問を千鶴が持つ前に大きな音が鳴った。ガシヤーンと鳴り響いたその音は窓を割る音、千鶴は冷静に最上階にある窓が割れた音ではないかと推測した。そして、男を見れば再度真

上を見ている相変わらず愉快そうなその顔に不快を覚える程度には正常に為りつつある千鶴の思考は男と同様に上を見ることに至った。そして、見上げれば人が空から降りて来たことがわかった。あり得ないほどゆっくりとした動きであるように思えたが、何故かスローモーションに見えたのだらうと千鶴は後に思った。天井の照明を背景に舞いおりるその姿にある種の救いを覚えた。それは一人ではなく二人、近い距離まで降りてきたところで二手に分かれ男を挟むように降り立った。

渡り廊下の中央に男が居り、千鶴の側には背を向けた茶々丸が、そして反対側にはエヴァが降り立ったのだ。茶々丸の背中を見て千鶴は安心したためか気が抜け、ペタンと座り込んでしまった。

「茶々丸、その二人を連れていけ」

「……しかし」

「連れて行ってやんなよ。俺あ、闇の福音に会いに来たんだからよ」

「ほう、私にか」

「復讐ってやつさ」

茶々丸は主であるエヴァの言葉に従い、千鶴とケイを一人で担ぎあげ空に、そして外へと連れ出していった。千鶴は再度夢心地となりそれ以降の記憶が曖昧となった。

\*

「茶々丸、その二人を連れていけ」

「……しかし」

こんな場面でも茶々丸の反対に笑みを浮かべる。唯々諾々と命令に

従うのではなく考え反対を表明する。成長していることを実感するも、もう一人の従者が一瞬頭をよぎりあそこまでには至ってくれないよ、とエヴァは考えた。

「連れて行ってやんなよ。俺あ、闇の福音に会いに来たんだからよ」  
「ほう、私にか」

手を出さないから連れていけという言葉、そして何より自身を狙いに来たという言葉にエヴァは意外に思う。“闇の福音”のネームバリューを前に怯まない。エヴァから見れば遥かに劣ると言っても良い力の持ち主。魔力を封印された状態でもエヴァからすれば勝つこと自体は難しくないことは容易に想像できた。

先日の茶々丸が運び出そうとしているケイの時とは異なり時間は自身への味方なのだ、技量も弁えない愚かな頭しか持っていないのかとエヴァは失望した。

「復讐ってやつさ。そしてお前えとも遭った事があるぜ」  
「ほう、記憶にはないが、な」

百戦錬磨のエヴァからすれば相手の強さは対峙しただけで大体解る。魔力が少なくとも強さは一流、平均的に質の高いこの学園の魔法使いでもこの男に勝てるのは十指で足る。

「当たりめえだ。二十年も前の話だ。末端のチンピラの俺の事を覚えてる方が異常ってもんだぜ」  
「どれ、最期になるのだろう。話くらいは聞いてやるぞ」

余裕の笑みを浮かべエヴァはそう口にする。時間稼ぎというわけではない。男の身体を見て事情を察したのだ。内心失望した評価を撤回し、無謀ではなく弁えた上での勇気に対し侮蔑を返すほどエヴァ

は堕ちてはいない。

男はエヴァがその余裕を持つのは当然であると思う。二十年前、当時組織の末端のチンピラに過ぎなかった男は偶然生き残った。組織が壊滅した理由は知らないが手を降したのが目の前の“闇の福音”だったことを男は自身の眼で確かめていた。その組織とて非合法のクスリや誘拐も行っていたいわば悪の組織。壊滅させられたこと自体に興味はない。弱肉強食が基本であり組織が弱かったただけなのだ。ただ、孤児だった自分を拾い、育ててもらった恩がある。組織というより直接の上司に向いていたそれが復讐の理由だった。

しかし、当時の男には力なく魔力も少ない。それでも力をつけようとする様々な仕事を引き受け、腕を磨いた。いつか大層な渾名で呼ばれるようになっていたが、それでも遥か高みに“闇の福音”など相手に為らない事はわかっていた。“闇の福音”が封印されたと聞いた時、何人もの魔法使いが幾通りもの理由を持って挑んだがその全てが撃退された。当時はまだまだ男は小物、そのことを知ることすらできなかった。今でも敵わないことはわかっていた。しかし、時間がなかったのだ。

「……………最期か」

「病だろう？腐っても真祖、そこまで明確であればわかるものだ」  
「ハッハッハッ、まああんたのお陰で楽しい人生だったかもしれない」

腕を磨く中で様々な出会いがあり別れもあった。復讐という芯を常に持っていたつもりだったが、それが全てだったわけではないのだ。エヴァがいなければ末端の構成員として人生を終えていただろうが、今の人生も悪くない。

そして、病がなければこのまま“できない”ことを理由にズルズルと延ばしていただろう。既に伸び代はなく、ピークを過ぎたあたりだと自身の力を男は評価していた。その代わり経験を含め、それを

補ってもあまりある。その意味で良い機会、良いタイミングだったのだろうと男は考えていた。

「ふむ、その感謝は受けておいてやろう」

「けどよお、俺あ、死ぬのが怖い。地獄で姐御にどやされるんじゃないかねえかと思つてな。けどあんたの首を土産にすりゃ、許してもらえらんじゃねえかと思つてよ。こうして遙々やってきたわけさ」

「面白い事をいう」

地獄など到底信じていなさそうな男の言葉にエヴァは苦笑する。賞金や復讐、様々な理由の為に命を狙われた事は数限りなくエヴァにはあった。しかし、この男は復讐というより……。

「ま、そう言うわけで悪いんだけど、お前の首がほしいわけだ」

「渡す気はないがな」

「当然だ。弱肉強食だろ。あんたを殺して奪い取るさ」

「良かろう。最後に名を聞いておこう。後で供養しなくてはいかんからな」

「いうね。俺あ」

「

\*

ケイが意識を取り戻したのはそれから三日後だった。千鶴は集中力を欠いていたものの期末テストでは普段以上の点数を取る精神力の強さを見せつけた。もっともテスト終了直後には病院を見舞い、可能な限りそこで過ごしていた。治癒魔法を使用は患者の体力を大きく削るため、唯でさえ少なかつたケイの体力を失くし目覚めるのに時間を要したのだった。

テストから発表までの二日間は休みであり、テストで無ければ休むつもりだった千鶴からすれば当然とばかりに病室に居座っていた。目覚めたケイに対し、直後に勢いそのままに抱きつきケイが唯でさえ弱っていた身体に更なるダメージを与え入院期間を延ばすに至った。その事に対して千鶴は謝罪するものの、それはそれとばかりにケイの怪我に対してお説教を行った。守ってもらうのは嬉しいがケイ自身も大事にしてもらわなければ意味がない、と。謝罪し次の機会があれば巧くやるよというが、内心はそうでなく表面上の言葉に過ぎないという事に気付きつつも千鶴は溜息一つでその場は許した。

後日、二人してエヴァのログハウスを訪れ、感謝を伝えたが、先日の借りを返したただけだとぶつきら棒に口にしつつも表情はそれを裏切り赤らめていた。感謝され慣れていないのかもしれない、と千鶴は微笑ましい表情を浮かべたものの、隣のケイはニヤニヤとした笑みを浮かべ病み上がりにも拘らずエヴァに追い回されるという劇を演じることとなった。

## 没ネタ（後書き）

没理由は

？流石にここまでやると千鶴がケイに苦言を呈したり、ネギに対して血を見るような危険な魔法使いを止めるようにいうと考えられたため

？書き終わってから気付いたため、内容変更するのが面倒

以上二点というより主に二点目で没ネタになりました。折角書いたので没ネタとして投稿させていただきました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5301p/>

---

ある脇役の話。

2011年3月10日16時37分発行